



-The Heart of Eternity-  
幻想小説ハートオブエタニティ第二部 「Luna」  
著作：焰火紅

構想開始	2004/12/30
小説化開始	2005/05/08
本編完成	2007/05/16
HP公開完了	2007/05/16
本書作成	2008/10/04

目次	2
プロローグ	3
第一章 柔らかな光	5
第一節 微風	5
第二節 待ち望んだ日々	9
第三節 芽生えた心	12
第四節 小さな冒険	18
第五節 夢に落ちる	22
第二章 今を生きる	29
第一節 羨望	29
第二節 継承と解放	31
第三節 衝突する光と闇	36
第四節 目覚めと約束	44
第五節 未来を生きる為に	47
第六節 此処にいるという奇蹟	50
第七節 深愛	54
第八節 歴史の闇	57
第九節 信念の戦い	60
第十節 星の名を持つ存在	69
第十一節 終末の光	74
第十二節 悲嘆と覚悟	77
第十三節 永遠への協奏曲	81
第三章 心を受けて	91
第一節 記憶の層	91
第二節 心の層	93
第三節 魂体	95
第四節 与えられた試練	101
第五節 心を受けて	104
第四章 Luna	107
第一節 母子の絆	107
第二節 再臨	109
第三節 小さな翼	110
第四節 The Heart of Eternity	113
第五節 終幕の焰	116
第六節 星は一つへ	124
第七節 Luna	125
エピローグ	129

## プロローグ

「僕も自由が欲しい……運命などに縛られない生き方をしたい」

第23264代目獄王の後継者、ファイアレスは深手を負って動かぬ体でそう呟いた。『新生・中界計画』の失敗……ルナリート・ジ・エファロードによる天界の維持放棄から既に9年が経過している。だがファイアレスの体は、ルナリートの兄ハルメスから受けた剣で指先を動かす事さえ困難だった。……ファイアレスは強く憎んでいた。エファロードとエファサタンは『界を守る者』であり『孤独な支配者』であるはずだ。それなのに、ルナリートとハルメスは己が信じるものの為だけにそれを破壊したからだ。……そして、同時に羨んでいた。定められた運命に従わず、『自分の生きる道』を選択している事を。

「ファイアレス、『断罪の間』へ」

その時、ファイアレスは現獄王で父であるシェドロットと呼ばれた。『獄王』を継承するためだ。ルナリートが『神』を継承したように、この日ファイアレスも『獄王』を継承する事となる。神と獄王は表裏一体……生まれる時期、そして死を迎える時期さえも重なるようになっていく。

「僕はこれから……進むべき道は自分で選びます」

ファイアレスは決めていた。獄王の役割、『獄界の存続』と『深獄の封印』を捨てても自由になる事を。

だが知らなかった。それが意味する事……そして、近い未来に引き起こされる事象を……その『存在』は唯静かに……物も心も存在しない無の中で目覚めの時を待っている。

210年前……

『現在』を語るのならば、この210年前の出来事を認識する必要がある。この時、一人の天使で後にエファロードとして覚醒するルナリートが人間界に堕ちた。当初彼は、天界の歪んだ教えによって『人間』は下等な存在だと思っていた。だが、フィーネという一人の少女の強く温かな心に接している内に『人間』に好感を抱き、やがて彼女と恋に落ちる。しかし、その幸せは長く続かずフィーネの死という形で終わりを迎えたかのように思われた。ところが、二人は何よりも強い絆で結ばれており……『永遠の心』を信じて200年後に再び結ばれる事となる。

10年前……

『永遠の心』の約束通り、フィーネはシェルフニアとして生まれ変わりルナリートと再会する事が出来たこの年……

長い長い歴史の連鎖の中で、この星は転機を迎える。第23265代目で兄弟のエファロード、ルナリートとその兄ハルメスによってだ。今までのエファロードは『天界の維持』を最優先とし、次に天界での余剰エネルギー排出の為に『人間界』に人間を創っていた。

しかし二人は人間を愛し……兄であるハルメス、そしてルナリートと苦楽を共にしてきた天翼獣リバレスが犠牲となる事で『天界の放棄』と『人間界との同化』、更には『獄界との隔絶』を果たした。

そう、全ては愛する『人間達』の為に……

今という『幸せ』は掛け替えの無い命の代償で生まれたものなのだ。

そして現在……

歴史を変える戦いから10年、人間界は平和そのものだ。ルナリートとシェルフニアの子供リルファイは8歳になった。また、リルファイ誕生の1年後にルナリートの友人セルフアス、ジュディアにも子供が生まれウィッシュと名付けられた。

人間界は皇帝となったルナリートが治めており、各街には天界に住んでいた天使も暮らしている。天界を失った今、天使達は力を失いつつあるがそれでも人間以上の力は保持しており、人間界の発展に寄与している。また、科学技術も発達した。有事の際に使用する事が出来る武器

の性能も向上し、もし万が一昔のように魔が襲来したとしても人間達だけでもある程度は戦えるだろう。そして、機械の動力エネルギーとして『蒸気エネルギー』も開発された。この動力は試験段階だが、機関車と船に採用されている。魔に虐げられていた時代は終わり、人々は力強くそして未来を信じて前向きに生きていけるようになったのだ。

勿論ルナリートとシエルフィア、その娘リルフィも毎日を幸せに暮らしている。シエルフィアがフィーネだった時から願っていた夢……

誰と争う事もなく、幸せな家庭を作り……ずっと傍にいて、愛を深めながら日々を送っていく。200年以上も前からの切なる想いが、ようやく実現したのだ。

そして、この3人は唯一人間界の中に於いても力を失わない特別な存在である。ルナリートは、エファロードとしての力を受け継ぎ失う事はない。シエルフィアは、フィーネからの転生の際に強大な力を受けた。その力は天使を凌駕し、エファロードに近い力を持つ。そんな二人の娘リルフィも、両親の力を確実に受け継いでおりそれが発現する日もそう遠くは無いだろう。

平和ならば戦う必要などない。

だが、愛すべき者の為ならば命を賭して戦う心がある。

「愛する人が幸せに生きてくれるならば……自らの命すら惜しくは無いから」

そして、再び物語は始まる。『永遠の心』を持ち……『Luna』く……

## 第一節 微風

### 第一章 柔らかな光

「パパ、ママ行つてきますす！」

午前8時。私とシェルフィアの娘、リルフィは朝陽を受けて城に響き渡る元気な声を張り上げた。背中まで伸びる、私と同じ真紅の髪。純粹さと強さ、そして優しさを秘めたシェルフィアにそっくりの茶色の目。それを見る度に、この子は私達の子供なんだという実感と深い愛情が生まれて来るのを感じる。その想いは、リルフィが大きくなるのと同じように膨れ上がってきた。現在リルフィは8歳で、私達家族が暮らすフィグリル皇国の学校に通っている。そう……父である先代『神』との戦いの後、フィグリル皇国に暮らし始めて既に10年が経過したのだ。「行つてらっしゃい！」

私とシェルフィアは同時に笑顔で手を振った。リルフィは嬉しそうに何度も振り返りながら、学校へ向かう蒸気機関車の方へ駆けて行った。この城下町は昔よりも拡張され、新たに発明された蒸気機関の恩恵を受けて人々は高速移動できるようになっている。そして、ここでハルメス兄さんと再会した210年前にそうだったように、私の指示で街全体を『白亜』の美しい外観に戻した。

あれから、争いは一度たりとも起こらず平和な時が緩やかに流れている。かつて……『魔』に虐げられていた人間達も見てきたが、今に生きる人々は夢と希望に満ち溢れているのが分かる。勿論私とシェルフィア、リルフィも今……他に望む事など何も無い。互いの存在を確かめ合い、平和の中で安心して……ずっと一緒に生きていけるからだ。そして、私達は目を合わせた。

「さあ、見送りの済んだし私達も行きましょ！」

「ああ、今日も一日頑張ろう！」

城の入り口までリルフィの見送りに来ていた私達は、手を繋ぎながら城の中へ戻って行った。私とシェルフィアの心は変わらない。210年前に『永遠の約束』を交わしてからずっと……私達に変わった事と言えば、お互いの左手薬指にプラチナで出来た結婚指輪が光っている事ぐらいだ。

今日も私は皇帝として世界を治める仕事を行い、シェルフィアはフィグリル城の料理長として働く。彼女は本来なら料理をする必要などないのだが、元々好きな事であり私とリルフィにより美味しいものを作るために日々精進しているのだ。勿論、世界についての重要事項を決定する時には彼女も参加する。

「今日の授業参観楽しみね。リルフィ、ちゃんと先生の質問に答えられるかな？」

お互いの持ち場に就く前にシェルフィアはそう言った。10年前から変わらない私の好きな瞳、肩より少し下まで伸びた柔らかな金の髪。今も尚、そしてこれからも彼女に対する愛しい気持ち是不変だ。

「はは、心配いらないよ。私達の自慢の娘なんだから」

これが俗に言う親馬鹿というものだろう。しかし、自分の子供が可愛いが故に期待してしまうのは仕方ない事なのだ。

「ふふ、それもそうね。本当に……優しくていい子に育ってくれて嬉しいわ」

そう言いながら彼女は幸せそうに微笑む。私は周りに人がいない事を確認してから、シェルフィアにキスした。

私は、最愛の妻と娘に囲まれて世界中の誰より幸せだ。

〜穏やかな日常〜

私は今日の仕事の手初めに、まずは世界中から集ってくる『報告書』や『意見書』に目を通した。各地の現状や改善点、新技術の開発状況などを理解する事が目的だ。毎日書類は数百枚に及ぶが、大体1時間程で把握出来るので今は一人で何とかこなしている。しかし今後書類の査読も含め、皇帝としての仕事量が大幅に増えれば流石に一人では無理だろう。その時は人間達



にもっと多くの事を任せなければいけない。そんな事を考えながらも、今日はリルフィの授業参観なのでいつもは一日かけてやる仕事を午前中に終わらせた。

「コンコンコン……皇帝、ミルドよりセルファス様とジュディア様がお越しです」

ミルド、全ての始まりの地。私が墮天し、フィーネと出会い……旅立ちを決めた場所。そしてミルドの丘は、死してもなお消えない愛を誓い……生まれ変わっても再び巡り会う『永遠の約束』の場所だ。

「どうぞ」

私がそう言うと、ドアは遠慮なく開いた。こんな開け方をするのは世界にセルファスぐらいのものだ。

「よう、ルナ！ 相変わらず皇帝は大変そうだな！」

と、セルファスこそ相変わらず陽気に私の肩を叩いた。元々少し大柄だったが最近更に逞しくなった気がする。

「そうだな、ある意味天界での勉強の方が楽だったよ。勉強は自己責任だけど、皇帝としての仕事は多くの人の事を考えなければいけない。それがたまに重荷と感ずる時もあるな。でも、自分も含む皆の幸せを想えば多少の辛さは何ともないさ」

私はそう言って笑顔を見せた。

「流石ルナね、でもそろそろ支度した方がいいわよ！」

セルファスと共に現れたのはジュディア。リルフィが生まれた1年後、二人の間には『ウィッシュ』という男の子が生まれた。現在彼は7歳で、リルフィとは幼馴染だ。今日、セルファスとジュディアがミルドを連れてここに来たのは息子の授業参観を見る為だ。

『学校』は各街に一つずつあるが、月に一度『フィグリル中央学校』で任意参加制の世界規模の交流会（授業）がある。これは子供達の視線を世界に向けさせる事が狙いだが、友達も多く出来るので子供にも受けがいい。そして、授業は誰が参観してもいい事になっているのだ。

「ああ、シエルファイアも呼んで来る！」

私はそう言って厨房まで駆け出した。そして、シエルファイアと合流して少し急いで昼食を食べて城を出発した。学校までは、機関車を使って10分程の距離だ。勿論私は空を飛ぶ方が早い。セルファス達の翼は消えつつある。私が天界の維持を放棄し、人間界と融合した時点から天使達は時間と共に力を失ってきているからだ。まるで、それを補うかのように人間界では科学技術が発達した。何にせよ、平和ならば力を使う必要も無い。私達は談笑しながら『フィグリル中央学校』へと向かう機関車に揺られていた。機関車には、世界各地から授業参観に出席すると思しき人が多い。

しばらくして私達は、世界で随一の講堂規模を持つフィグリル中央学校に到着した。

「皆さん！ この問題を解く為に必要な事は何でしょうか！？ わかった人は手を挙げて下さい！」

沢山の生徒達が座る広い講堂に隅々まで響き渡る声を出しているのは、20代前半の人間女性の新米教師だ。現在、各地にある学校で勉強を教えているのはほとんどが人間だ。人間は、元天使達の知識を吸収して以前よりも博学な者が増えた。無論元天使達は、何もしていないわけではなくちゃんと学問、技術の向上に貢献している。

世界は、皇帝として私が治め……元天使と人間達によって更なる発展を目指しているのが現状だ。それよりも……

「はいっ！」

リルフィが誰よりも早く、元気良く手を挙げたので私とシエルファイアは驚いた！

「はい！」

そのすぐ後に、セルファス達の息子ウィッシュが挙手した。

「じゃあ、リルフィちゃんとウィッシュ君黒板に書いて下さい！」

教師がそう言うと、二人は小走りに前の黒板へと向かった。

「（リルフィ、頑張れ！）」

私とシエルファイアは小声で囁き、息を呑む。隣では、セルファス達も同じ様子だった。

この問題は数学だが、発想力を問われるものだ。しかも、7歳や8歳で解けるレベルでもない。リルフィの代わりに私が解きたい衝動に駆られたが、ここは娘の力を信じてあげないと……

「はいっ、リルファイちゃん正解！先生が言う事は何も無いわ。ウィッシュ君、惜しいわね……あと一歩よ！」

その瞬間、リルファイは私達の方を嬉しそうに見た。同時に、ホッとしたがウィッシュとセルフアス達はガックリ来たようだった。その後も授業は滞りなく進んでいった。リルファイは全ての教科で最優秀の成績で、ウィッシュは全てで二番だった。かつて、私が天界にいた時は自分の能力が他者と違う事が嫌だった。特別視されるのも辛かった。

しかし、今の人間界は誰かを隔てるような考えを持つものはいない。人にはそれぞれ役目があるって得意分野がある。皆が協力しあって世界は構成されていると思ってるからだ。『不必要な者』など誰もいないのだ。だから、リルファイの能力も誰かに妬まれるような事はない。リルファイの力も、この世界に必要な大切なものの一つでしかないからだ。ただ、ウィッシュはリルファイには負けたくないらしく日々頑張っているようだが。幼馴染で、自分は男の子だからと思っているみたいだと聞いた事がある。

授業参観が終わり、今夜はフィグリル城で久々の会食を行う事になっている。セルフアス達は勿論、現在リウォルを治めているノレッジも来る予定だ。リウォルは、かつて禁断の兵器が使用され私が沈めたリウォルタワーの跡地からオリハルコン等の珍しい物質を採取する。その為、学者が多く集まり世界の技術進歩の最先端を行く街となった。

また、あの街は思い出深い……街には、フィーネが私の腕に抱きつく像があるし、私とフィーネが初めて愛を確認し……後に婚約を果たした湖も近くにある。人間界には思い出が多いとつくづく思う。

ノレッジの他には、人間も数名参加する。人間の中で特筆すべきは、『知識の街リナン』を治めるディクト・リナンだ。彼は生粋の人間でありながら深い知識を持ち、私に対しても意見を述べてくる貴重な人物だ。『知識の街リナン』は、10年前に天界と人間界が融合した際に『天界と人間界の書物』を全て一箇所に集約する目的で作られた。そうする事で『知識』の研究をより深く効率よく行う事が可能となった。実際に、この街が現在の技術躍進に果たした役割は大きい。

そして、陽も落ちて会食の時間になった。

「皆様、本日もお忙しい中ようこそお集まり下さいました！人間界の今後の繁栄を願って……

乾杯！」

「乾杯！」

セルフアスが乾杯の音頭を取り、場にいる皆が杯を交わした。このような会食は不定期に行われる。大体が、私達家族とセルフアス達、そしてノレッジの都合が良い時だ。今日はリルフイとウィッシュの授業参観なので、夜は会食という事が前々から決まっていた。

この日も、美味しい食事と酒……そして音楽隊の演奏で楽しい時間が流れた。食事と酒はシェルフアスが苦心を重ねた末に生み出された最高のものだ。私は、シェルフアがまだフィーネだった時から料理を食べさせて貰っているが、今日の味も忘れられない程心がこもった料理だったと思う。音楽もまた発達した。様々な楽器が現れ、同時に多様な楽曲が描かれた。それは、人々の心が豊かになっっている証かもしれない。会食も終わりに近付き、一人の人間が私に声をかけた。

「皇帝、少しお時間を頂けますか？」

知識の街リナンを治めるディクトだ。年齢は確か57歳。髪は白髪だが、歳の割に精悍な顔付きをしている。その彼が何か真剣な表情をしてそう言ったので、私は領き人の少ない窓辺の方へ移動した。

「どうした、何かあったのか？」

私は彼の目をじっと見据えた。すると、ディクトは静かに首を振ってこう答えた。

「いえ、皇帝がご心配されているような事ではありません。唯、世界の街々からの報告を受けて調べた結果……僅かばかり例年と違う傾向が見られました」

「それは具体的にどういう事だ？」

私がそう訊き返すと、ディクトは静かに答えた。

「そうですね。全て局所的なものです。漁の不作……作物の立ち枯れ、流行の病、後は子供を授からない夫婦の増加等です。これらは世界全体から見ると、影響のある程のものではないですが私には皇帝に全てを報告する義務がありますので」

「そう言うって、デイクトは頭を下げた。とても礼儀正しく律儀な人間だ。」  
「そうか……報告ありがとう。確かに気にする程の事ではないかもしれないが、デイクトはこの事態をどう読む？」

「私は彼の読みを結構当てにしている。私の35分の1程度しか生きていないのに素晴らしい知識と洞察力を持っている。」

「……『何か』が起こる兆候ではないか？と思っております。良い事ではないでしょう」

「そうか……この10年間、本当に何も無く平穏な時が流れた。不思議なぐらいに……だが、今後何が起ころうともこの世界は私が守る。だから、引き続き調査して報告を頼む」

「私がそう言うって、デイクトは強く領き会食の輪へと戻っていった。」  
「私もシェルフニア、リルフィと共に皆と楽しく語り合った。昔の事、今の事、そして未来の事を……」

この日も有意義な一日だったと思う。後は、家族3人水入らずの時間だ。

ここは私達家族だけの部屋。窓からは月光と星明りが射しこみ、穏やかな風が通り抜ける。現在の季節は初夏、日中は少し暑いぐらいだが夜は涼しい。

「今日はリルフィ、よく頑張ったな！」

私とシェルフニアは愛娘の頭を撫でながら微笑んだ。

「うん！パパ、ママ今日は見に来てくれてありがとう！わたし、嬉しかったよ！」

屈託の無い満面の笑み。その笑顔を見ていると、私達はとても幸せな気持ちで満たされる。

「ふふ、リルフィはルナさんに似て何でも出来るのね！」

「いや、リルフィの性格はシェルフニア譲りだろ」

そんな事を言いながら、私達は終始笑いが絶えない。

「もう、パパもママも相変わらずなんだから！」

「はははは……！」

こうして、私達3人は眠りに就く為電灯（最近開発された、電気というエネルギーを用いる照明器具）を消してベッドに入った。

ベッドでは、私とシェルフニアの間でリルフィが眠る。勿論、城には夫婦用の部屋もあるし一人一人の部屋もある。今日は家族で眠る日なのだ。

リルフィが可愛い寝顔を浮かべて眠りについて暫く経った頃、シェルフニアが神術『転送』で私に意識を伝えてきた。

「（ルナさん、少しだけ屋上を散歩しましょう？）」

「（ああ、そうしよう。）」

リルフィを起こさないように注意を払いながら、私達は手を繋ぎ城の屋上へと向かった。

「今日も楽しかったね。リルフィがどんどん成長してくれて嬉しいわ」

月光を背にして、ずっと変わらないシェルフニアが嬉しそうに微笑む。

「そうだな、私もシェルフニアとリルフィがずっと傍にいてくれるだけで幸せだよ」

私がシェルフニアの肩を抱くと、すぐに彼女は私に甘えるように寄りかかってくる。

「うん……私も、ルナさんの子供を生めて幸せ。ずっと昔……でも昨日のように思える『約束』が叶って本当に良かったわ。私達は、奇蹟で出会って……奇蹟的に再会できた。これが、もし『運命』だったとしても私はずっとあなたの傍にいますから……」

私は『愛』を命題に生まれたエファロードだ。しかし、今こうしてシェルフニアと共にいられる事、そしてリルフィがいる事……何より『永遠』を信じ、未来永劫変わらないという事は決して運命ではないと思う。例え、運命だとしても私は絶対にシェルフニア、リルフィを最優先にして生きていく事に変わりはないだろう。

「わかってる。私も決して離れない。例え、この先何があっても……誰にも邪魔はさせないから」

そう言うって、私は彼女を抱き締めた。世界に唯一人、永遠に愛していく女性を……  
そして長い間口付けた……永遠も刹那の積み重ねだという事を噛み締めながら……



明日は今日よりもいい日になる。私達は今……そう信じて生きている。

## 第二節 待ち望んだ日々

眩しい……窓から射しこむ朝の光で私は目を覚ました。ここは夫婦の寝室だが、一緒に眠っていたシエルフィアは既に起きていて、今日の支度を始めている。この前の授業参観から数日が経った今日は、ある『特別な日』だからだ。リルフィも母を手伝う為に珍しく早起きしている。私は顔を洗い、真紅の髪に櫛を通した。そして、寝巻きからゆったりした服に着替えて部屋を出た。

「おはよう」

私は厨房を訪れ、忙しなく動きまわるシエルフィアとリルフィに朝の挨拶をする。

「おはよう！」

少し眠そうな私の声を聞いた二人は、零れそうな笑顔で挨拶を返した。二人とも、とても楽しく嬉しそうだ。それもその筈、今日は月に一度の『家族水入らずの日』だからだ。この日だけは、『皇帝の仕事』、シエルフィアは『料理長の仕事』、リルフィは『学校』を休む。そうする事によって家族だけで過ごせる時間を作っている。たまには仕事の事など何も考えずに、唯家族で楽しめる時間も大事だと思ったからだ。また、この日は基本的に世界中の人々も休むように奨励している。

「ルナさん、ちよつと待ってね！すぐ朝食にするから！」

二人は、朝早くから家族で出かける為のお弁当を作っていた。ほぼ完成のようだが、私が起きてきたので先に朝食にするようだ。

「ああ、私も手伝いたいのに……」

と私が言うと、最愛の妻は首を横に振る。シエルフィアは、私には決して料理を作らせようと思わない。一緒に作るのもいいような気がするのだが、彼女は私の為に美味しい料理を作るのが生き甲斐らしい。その気持ちはとても嬉しいが、たまには私も料理というものに挑戦してみたいと思うのは贅沢だろうか。

「パパは座ってて！ママとわたしで準備するからね」

可愛い娘にまでそう言われたら私はそうするしかないな。

こうして、まずは一家三人で愛情の込められた朝食を摂った。その後、外出用の服に着替えて荷物の準備もした。そして初夏の晴天の日差しの中、城の屋上に上った。

「よし、出発しようか！」

私がそう言うと、シエルフィアとリルフィは私の体に抱き付いた。神術『転送』で移動するからだ。

「はーい！」

二人の声が重なった。転送で移動するのには二人とも慣れているから当然といえば当然か。私は精神を集中して転送の術式を頭の中で描いた。その瞬間、私達の体がフィグリルから消失する！そして、目の前の景色が変わった。

「本当にパパもママもミルドの丘が好きなのね。わたしも好きだけどね！」

と、ミルドに着いた瞬間リルフィが微笑みながら言った。リルフィは、8歳にしては大人びた口調だ。それは、彼女は本が大好きで5歳の頃から一日に3冊ぐらい読んでくる所為だろう。この間、3000冊読破したと言っていたのには驚いた。しかも、私と同じで覚えようと思えば忘れないらしい。彼女は、しっかりとエファロードの血を引き継ぎながらもフィーネとシエルフィアの心も持っている。

「リルフィ、ありがとう！この丘があったからママはパパと出会う事が出来たのよ。何度も言ったけどね」

シエルフィアはリルフィの頭を撫でながらそう言った。そう言う彼女はとても幸せそうで、リルフィも頭を撫でられて喜んでいる。そんな光景が私には何よりも貴重な宝物だと心から思う。これを守る為ならば私は何だって出来るだろう。かつて、フィーネを救う為に獄界に行った時のように……

「ははは、さあ丘に登ろう！」

こうして、私達は丘の上へと歩く。私とシエルファイアの間にはリルファイを挟んで3人で手を繋ぎながら。時折、私とシエルファイアが繋いだ手を上にするとリルファイは嬉しそうに真ん中でジャンプしていた。ちなみに、ミルドの丘やリウオルの湖などに私達家族が訪れる時は他の人間には遠慮してもらっている。勿論、それ以外の日は誰でも来れるようになっていた。私達の存在（エフアロードや天界、天使、獄界、魔、その他様々な出来事）は、10年前の戦い以降人々に広く知られる事となった。その際に、ミルドの丘やリウオルの湖、ファイネの肉体が眠る輝水晶の遺跡がある島などは『聖地』とされるようになり、人々に丁寧に扱われ保護されている。だが、私達の恋愛談が世界中に知れ渡るといいうのも何処か恥ずかしいものがある。

「さあ、着いたわよ！」

ここは、丘の上の大木の下。かつて、私が墮天した時に出来た穴に生えてきた大木の下だ。樹齢は200年を超えるんじゃないだろうか？この木の大きさが、私達の歴史の大きさを物語っているような気がする。

「今日は何を作ってくれたのか、とても楽しみだよ」

木の下に撥水性の高い皮のシートを敷き、簡単ながらも準備が出来た。そう、ピクニックだ。「はいっ、パパ！わたし、ママのお手伝い頑張ったのよ！」

「ルナさん、沢山食べてね！」

満面の笑みと共に差し出されたもの、それは……

「サンドウィッチか！今日はまた一段と美味しそうだなあ！」

様々な具が彩り鮮やかに入っており、香りもいつもより一段と芳しい気がする。それは二人の愛情を料理から感じ取っているからかもしれないが、美味しそうだし早速食べてみよう。

「う……うまい！」

私は……大袈裟かもしれないが、全身に染み渡るような美味しさを味わった。

「良かった！」

そんな私の様子を見て、二人は手を取り合って喜んでいた。

こうして、木漏れ日と柔らかな風に吹かれながらの一家団欒が始まった。

「昔から、ずっとこんな日々を夢見てたわ」

3人で美味しい昼食を食べて、リルファイが周りで四つ葉のクローバーを探して始めると不意にシエルファイアが呟いた。

「そうだな、私達が恋人になった時からの夢……いや、ファイネが小さい頃からの夢かな？」

「ふふ……流石ルナさん、何でもお見通しね。ずっと憧れてた……ファイネもシエルファイアも生まれた時は平和な日常じゃなかったから……でも、今はこうして夢が叶ったの。大好きな人と一緒にいる、何処までも澄み渡る空……何者にも怯えなくていい日々……そして、ここにいてくれる私達の可愛いリルファイ。その成長を見守っている掛け替えの無い幸せ……」

まだまだ言い足りないようだったが、シエルファイアは言葉を止めてニッコリと微笑んだ。

「シエルファイア……」

私は彼女が愛してくれようがなくなり、抱き締めようとした時だった。

「四葉のクローバー見つけたよっ！」

私達は驚いて思わず仰け反ってしまった！そして、赤面する。

「リ……リルファイ良かったわね！」

「お……おめでどう、リルファイ！それは大切にするんだぞ！」

いつもと違う私達の様子にリルファイは不思議そうな顔をした。

「パパ、ママ何かあったの？」

「いや、何でもないよ。さて、次はリウオルの湖に行こうか！」

私はそう言って、リルファイを肩車した。すると、途端に彼女は嬉しそうに私の頭を両手で持つ。

「うんっ！」

こうして、私達はリウオルの湖へと向かう事にした。

200年以上前から変わらぬ景色……穏やかな風を受け細波を立てる水面、そして遙かなる山々の壮大な影。ここは、私とファイネが愛を確認し……シエルファイアとして生まれ変わった

後に生涯、いや永遠の伴侶として生きていく誓いを交わした場所だ。今は夕刻で、辺りは紅色に染まっているが直に月と星明りに包まれるようになるだろう。

「今日もいい風が吹いているわね……さあ、暗くなる前に夕食の準備を済ませないとね！」  
今晩は湖の近くで夕食を摂る。大自然の中で、家族だけの時間を過ごし食事をするのは最高の贅沢だと思う。

「よし、私は焚き火と食事場所を作るよ！」

私がそう言うと、リルファイも私と一緒に折りたたみのテーブルや椅子を組み立て始める。

「朝はママを手伝ったから、夜はパパを手伝うね！」

と言っていたからだ。テーブルや椅子の配置が終わると、私はかまどを作った。そこに、リルファイが拾ってきた薪を入れて『焦熱』の神術で火を点けた。すると……

「パパ、それは神術『焦熱』って言ってたよね？パパもママもそんな不思議な力を使うけど、わたしは使っちゃダメなの？」

そうリルファイが興味津々といった様子で私に尋ねた。

「うーん……リルファイは私達の子供だし、少し訓練すればすぐに使えるようになると思うよ。でもな、大きな力っていうものは使う必要がないのなら使わない方がいいんだ。この世界は平和で、誰とも争う事もない。それにもし、世界が誰か悪い奴に壊されるような事になれば戦うのはパパだからね」

私はそう言って、少し遠い目をしながら愛娘の頭を撫でた。

「パパ……！そんな事言って一人で抱え込んだりしたらダメよ」

「ははは、そうだな。それだけの事が言える8歳はそうそういないぞ。でもな……パパは、ママと結婚して平和の中でお前を授かるこの未来の為に、昔大きな戦いをした。その時に、凄く悲しい事や犠牲があつて……今がある。そんな辛い事はリルファイには味わって欲しくないんだよ」

私がそう言うと、俯いていた彼女は私の顔を見上げて強い眼差しで言った。

「パパがそう思うのと同じ事をわたしも思うよ。きっとママだって同じ。だから、誰も傷付かないのが一番よ！」

確かにそうだ。現実はその甘くはないが、それが一番に決まってる。

「ああ、お前の言う通りだ。ずっと皆が平和で在り続けられるように頑張ろう！リルファイが大人になつてもな」

「うんっ！パパ大好きっ！」

そう言って無垢な笑顔を輝かせながら、リルファイはジャンプして抱き付いてきた。背中まで真っ直ぐ伸びる真紅の髪が大きく揺れる。

「ありがとう、パパもリルファイが大好きだよ。（リルファイには、誰からも愛されて……誰にでも優しく接する事が出来て……何より、人の痛みがわかる子になつて欲しいと思つていたけど、何も心配いらないみたいだな。）」

そんなやり取りを繰り返していると、シエルファイアの料理が完成して夕食が始まった。

湖は月光を浴び、山々は星明りに照らされる。また、焚き火の赤が空まで立ち昇っているような感覚さえ覚えた。この場所は、静寂が支配しているが確かな生命の力強さも感じる。それは、かつてこの場所で永遠を誓い……今もこうして愛する人と、愛する娘と共にいられるからかもしれない。

「綺麗な景色」

格別に美味しい夕食を食べ終わり、今は3人で焚き火の傍で景色を眺めている。初夏とは言え、森の中で湖の傍ともなると夜は冷え込む。だから火の傍でリルファイを包みこむようにシエルファイアが座り、そのシエルファイアを包むように私が座っているのだ。

「リルファイはこの景色が一番好きね。初めてリルファイをここに連れて来たのは、まだ言葉も喋れない時だったわ。どんなに泣いていても、ここに来たら泣き止んだ。だから、パパに頼んでよく連れてきてもらったの。ね、ルナさん」

「ああ、そうだよ。リルファイは昔はよく泣く子だったから、一日に何度もこの場所に来た事もある。それも楽しかったけどな」

私はそう言って、シエルファイアとリルファイを少し強く包みこんだ。  
「うーん……わたし覚えてないよ。でも昔から好きだったって事は解るわ」

「ふふ、覚えてなくてもそんな事があって今のリルファイがあるのよ。それは忘れないでね。これから先も色んな事があると思うけど、パパとママは変わらずあなたを想い続けるわ」

「ずっとずつとな」

私とシエルファイがそう言うと、リルファイは私達の方を振り返り……

「パパ、ママ……わたしもずっと想い続ける！……大好きだから何処にもいかないでね」

「大丈夫(だ)よ」

私達がそう答えると、彼女は何も言わなくなった。これは……

「……眠ってるわ。今日は朝早くから張り切って動いてたからね。私と一緒にルナさんを喜ばせたなんて嬉しそうに」

「そうか……こんなにいい子に育ってくれて、本当に嬉しいよ。心はシエルファイに似たんだな」

「もう！またそんな事を言うでしょ？この子は、心も身体も私達を半分ずつ受け継いでるわ。本当に子供供って不思議……二人から生まれて、一人なのに二人分を受け継いでる。それに、愛情を注げば注ぐ程大きくなって……いい子に育つ。ね？」

「そうだな。不思議だよ。日が経つ毎に愛しさが増して、自分自身も強くなれる気がする」

私達はそう言って強く手を握り合った。そして、リルファイを起こさないようにそつとキスをした。湖から優しい風が吹く……その風が水面を揺らし、キラキラと月明かりを反射させている。

「ルナさん、ずつと家族で幸せに生きていこうね」

「ああ、シエルファイとリルファイと一緒にずつと……ずつとな。最近は何だか少し恥ずかしくて言う事が少なくなっただけ、シエルファイ愛してるよ。昔と変わらず……いや、今の方がもつとな」

「ルナさん……、私も愛してるわ！そう言われると本当に嬉しい……だからもつと言つて」

「わかった」

そうして、暫く空を見ていると数多の流星が流れた。

例えどれだけの時が流れたとしても、積み重ねられる永遠の心は決して消えはしない。

死も、魂の離別も……私達を引き裂く事は出来なかった。

どんなに深い悲しみや苦しみが訪れても……私は愛する者を守る。

その為ならば自分の生命などどうなっても構わない。

だが……この考えは、二人も同じだろうな。

私は一人じゃなくなつたから。

人を愛する事で私は強くなれた。

これからも、大事に守り……そして愛し続けよう。

遙かなる星々の中で奇蹟的に同じ星に生まれ……同じ時を生きられる喜びを噛み締めながら。

大好きなシエルファイ、リルファイを……

### 第三節 芽生えた心

ここはリウォール。現在、世界の最先端技術を生み出す街だ。この街の傍には、リウォールタワーというかつての神が創った古代兵器があった。その古代兵器は、ルナリート君達の活躍によって滅せられ跡にはオリハルコン等の天界の貴金属が残った。その貴重な物質と共に天界の技術が残るこの場所には、多くの学者と研究者が集まった。その中には、僕のようにかつて天使だった者もいるが人間も沢山いる。研究したいという情熱に、自分の身上など関係ないからだ。僕は、天界と人間界が一つになってしばらくしてからこの街の指揮を任された。この街には、リウォール国王という名の人間がいたが『国王』と呼べる存在はルナリート君だけになり、旧リウォール国王にはこの街で『科学技術研究機関』の最高顧問として活躍してもらっている。勿論



僕も、街の統治だけでなく研究全てを把握して指導と試行錯誤を繰り返す毎日だ。そう、僕はかつて天界でルナリート君に負けないように勉強し続けた毎日を、この街で存分に活かしているのだ。

「おはようございます！ノレッジ様！」

僕が研究機関への視察と街の人々との交流の為に歩いていると、いつもそんな風に明るい笑顔で話しかけられる。

「皆さんおはようございます！今日もいい天気ですね。何か変わった事はありますか？」

僕は話しかけられたら、必ずそういう風に異常がないかを訊く。人々の異常は、街の不幸に繋がるからだ。

「ええ、皆いつも通り元気ですよ！ありがとうございます」

そう聞くといつも胸を撫で下ろす。と言っても、今までに大きな異常が起きた事は一度もないのだが。

「それは良かったです。また何かあったら些細な事でも構わないので、すぐに言って下さいね」

僕はそう言うと、近くにある研究機関の一つに向かった。すると……

「ノレッジ様！お待ちしていました！見て頂きたいものが！」

研究施設に入った途端、待ち構えていた研究員に僕は手を引つ張られる。すぐに僕は白衣に着替えて研究室に入った。

「これは……新しい化合物ですね！まだ何に使えるかはわかりませんが、これは凄い発見ですよ！」

僕は眼鏡を何度もかけ直しながら、研究員と共に顕微鏡の接眼レンズに夢中になった。その後、この化合物に対して施設の研究員全員と白熱した議論を交わし、気付けば時間は夜になっていた。その間、昼食の時間が過ぎていた事は誰も気付かなかったのには驚いた。

「さて、名残惜しいですが今日は帰りますね。皆さん、食事を忘れて倒れないように気を付けてください！」

「わかりました！また来て下さいね！」

施設を出ると、辺りの家々は夕食の時間になっており窓から零れる温かな光は平和という幸せを象徴しているようだった。

「（帰って片付ける書類は沢山あるけど、その前に……）」

僕は頭の中でそう呟いて、とある場所へ向かう。向かう先は、一軒の家だ。この家には3人の家族、人の良い父母と繊細な娘がいて慎ましやかな生活を送っている。僕がこの家族と知り合ったのは、父親がある研究施設の責任者ですぐに意気投合したからだった。僕がこの街に来て間も無い頃からなので、もう付き合いは10年近くになる。

「今晚は、今日は研究で遅くなりました」

「お待ちしましたよ、どうぞ上がって下さい！」

家の中からはとても良い匂いがある。きつと美味しい夕食を作っていたのだろう。僕は昼を食べていなかったので、かなり空腹だった。しかし、城に帰れば夕食がある。それまで我慢する事は造作も無い事だ。

「レンダー！ノレッジ様が来て下さったわよ！」

レンダーとはこの家族、フィロソフィ家の娘の名前だ。

「ノレッジさん、いつもすみませんね」

父親が僕に頭を下げた。頭など下げる必要はないのに……

「僕はそんな仲じゃないでしょう？頭を上げて下さい。僕はここに来たくて来てるんですから！」

僕がそう言っていると、レンダーが階段を降りてやってきた。母親に似た、黒く美しい長髪、父親に似た優しい茶の目。

正直に言うが、僕は彼女が好きだ。今まで自分は恋をする事など無いと思っていたが彼女と会って変わった。いや、接する内に序々に変わっていったというのが正しいだろう。

「ノレッジ様……！お忙しいのに、私なんかの為に毎日……申し訳……ゴホゴホッ……！」

「レンダー！」

僕はすぐに彼女の元に駆け寄ったが、ちゃんと母親が支えてくれていたので倒れる事はな



った。

そう……彼女は病気だ。その病気は生まれついでのもので、原因も不明だ。主に呼吸器系が弱いようで、外の空気をまともに吸う事すらままならない。彼女が生きていられるのは、父親が開発した空気を濾過する装置がこの家全体に張り巡らされているお陰だ。レンダーは、家から殆ど出る事も無く22年の月日を送ってきた。22年という歳月は、天使だった頃からすれば大した長さではないが、人生の4分の一以上と考えると気が遠くなるような長さだ。

「……私は大丈夫です。ご心配をおかけしてすみません。それはそうと、ノレッヅ様今日は遅い時間ですし、失礼でなければ家で一緒に夕食はどうでしょうか？」

呼吸を整えて話す彼女の顔は、家から出ない所為で全く日焼けせず透き通るような白さだ。それが、彼女の儚さと可憐さを余計に醸し出している。それは美しいが、僕が一番望む事は彼女に健康になってもらう事だ。

「いえいえ、僕は城に帰れば夕食がありますよ！一家団欒を邪魔しては悪いです」  
僕がそう言う……

「ノレッヅさん、さっき言われた言葉そっくりそのままお返ししますよ。『俺達はそんな仲じゃないでしょう？』もう10年近くも交流を続けてきたんですからね！ノレッヅさんは、この街を治める方なのに偉そうな素振りなど一切見せず……住人や研究員と同じ視点に立ってくれる。いつもお世話になりっぱなしなんですから、たまにはお礼をさせてもらわないと！」  
「ノレッヅ様、私からもお願いします！ノレッヅ様がいてくれると、この子が元気になってくれるんです」

「お母さん！」  
レンダーの白い顔が朱に染まる。それを見ると、僕まで恥ずかしくなった。ここまで言われたら僕は断るわけにはいかないだろう。

「わかりました、今日は御馳走になります。空腹なので沢山食べますよ！」

僕が笑顔でそう答えると、家族皆が喜びに満ちた顔をした。天界にいた時は、僕一人の存在がこんなにも必要とされるなんて思ってもみなかった。今なら、ルナリート君が人間の為に天界を捨てて戦ったのも素直に納得できる。自分が生きている事が他の人に認められて、必要とされる。また、僕も人を愛する事ができる。これは本当に掛け替えの無い素晴らしい事だって気付いたからだ。

「……ノレッヅ様、今日は私の我が儘を聞いて下さって本当にありがとうございました！」

「いえいえ、また来ますよ。時間を作れたら明日も来ますから！」

「本当にありがとうございます！」

と、家路に就く私に向かって3人はいつまでも手を振っていた。

「（今まで……本当にありがとうございます。ノレッヅ様……）」

しばらく歩いていると一瞬、心の中に何か聞こえたような気がしたが気の所為だと思い城に帰った。城に帰ると、溜まっていた書類をサッと読み審査した。それが終わったのは、夜の1時ぐらいだったが別に辛いとは思わない。今の暮らしはとても充実しているからだ。

「（さて、明日も人間界では変化に富んだ日が待っている。早くレンダーの病気を治せるような薬を作らないとダメだな。）」

と考えていると、いつの間にか眠りに落ちていた。

「何よりも大切だという事」

「ドンドンドン……！」

ん……？何処か遠くでドアを激しくノックする音が聞こえた。階下だろうか？一体今何時なんだ？薄明かりの中、置時計を探し月光に照らすと時刻は午前3時だった。眠ってからはほとんど時間が経っていない。僕が出る必要があるなら、兵が僕の所まで来るだろう。今日は疲れたのか眠過ぎる。

「コンコンコン！ノレッヅ様！レンダーの父親が来ております！娘が危篤との事です！」

「何！」

僕の眠気は一瞬にして消失した！と同時に、例えばような程の悪寒が全身を駆け巡った。全力で城の入り口まで走った！

「ノレッヅさん！レンダーがこんなものを……！」

と父親が僕に手紙のようなメモを見せた。内容は……！

「ノレッジ様へ 今までずっとありがとうございます。10年間……私の事を考えて下さって嬉しかったです。余り時間が無いので、大事な事だけ書きますね。ご迷惑だとは思いますが……ノレッジ様、私は貴方の事が大好きでした。貴方はいつもいつも優しくしてくれました。他の人は私の事を可哀想だと思いかもしれないですが、私は十分幸せでした。父も母も私を愛してくれて、ノレッジ様もいつも傍にいてくれたから。でも……私は自分の時間が残り僅かだつて知っています。だから……感謝を伝えたくて手紙を書きました。本当にありがとうございます」

そんな馬鹿な！さつきまでは普通に話も出来たのに……！

「ノレッジさん……！俺と妻とノレッジさん宛てに一通ずつ手紙を書いてレンダーは……！」

「わかりました……！僕が絶対助けます！」

僕は珍しく冷静さを欠いていた。何よりもレンダーを助けたい一心だったからだ！僕は消えつつある翼を開き、彼を抱えて家まで飛んだ。

「レンダー！今ノレッジさんが来てくれたから！」

僕は、彼女のいる部屋のベッドまで走った！すると……

「レンダー……レンダー……！」

レンダーの傍で泣きじゃくる母親……それもその筈だ。レンダーの吐血でベッドは真紅に染まり……彼女自身も意識を失い、微かに動いているだけだったのだから……！

「レンダー……！」

僕は彼女の手を強く握り締め、『治癒』の神術を使った。昔のように思うように神術を使う事は出来ないが、少しは効いてくれるはずだ！

「ゲホッ……！ノレッジ様……お父さん……、お母さん……、」

気管に溜まった血を吐き出し……レンダーは何とか意識を取り戻してくれた！

「良かった！」

皆が彼女に抱き付く。しかし……

「……みんな……本当にありがとう。でも私は……もう生きられない。ノレッジ様……私には自分の命が間もなく……終わりを迎えるという事がわかります。今は……ゲホゲホッ……一時的に……戻っただけ」

そう言うと、彼女は再び意識を失ってしまった！

「僕は……絶対に君を死なせない！」

僕はその言葉と共に、レンダーに『停止』の神術をかけた。助ける方法を見つかるまでの時間稼ぎだ。……さつきからの『神術』の連続使用で体中が痛むが、今はそんな事を気にはしていられない！

「二人はそこでレンダーの傍にいてあげてください！」

「わかりました！」

そうして、僕は『聖石』を取り出した。『聖石』は、輝水晶できており『神術』のエネルギーを蓄える事ができる。これはルナリート君の『転送』のエネルギーが蓄えられており、有事の際に使用するようにと僕とセルファス君達に支給されているものだ。聖石を使えば、人間でさえも『神術』を使う事が出来る。

「知識の街リナンへ！」

僕の姿が消え、景色が瞬時に塗り替えられリナンの中央図書館の前に到着した。すぐさま、僕は閉まっている門を叩く！

「リウォルの街を統治するノレッジです！開けて下さい！」

僕は無心に叫んだ！一刻の猶予もないからだ！

「これはこれは……ノレッジ様。こんな時間にどうされました？」

リナンを治める、ダイクト氏が出てきてくれた。それなら話が早い！

「レンダーが危篤状態に陥りました！助ける方法を探しています！」

「何と！それは早く探さないとけません！私も手伝いましょう！いえ、集められるだけの者を集めます！」

こうして、ダイクト氏の声で200名もの学者が集まった。人間界の知識、そして天界の知識が信じられないスピードで調査されていく。だが今は1秒ですら過ぎるのが憎い。そして、

無限とも思えるような時間の果てに……

「見つかりました！瀕死の人間、いえ死後すぐの人間ですら助けられる方法です！」  
それを発見したのは学者の一人だった。僕とダイクト氏はそれが書かれた本を食い入るように見た。

「……禁断神術『蘇生』か」

僕は背筋が凍るのを感じた。僕は……天界が現存し、『死の司官』だった頃ですら究極神術までしか使えなかった。そもそも、禁断神術は神であるエファロードのみに許された神術だ。今の僕は、恐らく高等神術を発動させるのも難しいだろう。神術はレベルが上がれば上がる程、肉体的及び精神的な消耗が激しい。でも……！

「……やるしかない！」

ここで……ルナリート君にこの事を打ち明ければ……きつと簡単に蘇生を使ってくれるだろう。でも……愛する人ぐらいは自分で助けたい！これは僕の意地だ。

「ダイクトさん、僕は今からリウォルに戻り……自分の命をかけて……禁断神術『蘇生』を使います。でも……発動出来なかった場合はルナリート君に助けを求めて欲しいんです。だから、一緒に来てくれませんか？」

僕は強い覚悟を込めた目でダイクト氏をじっと見た。

「承知しました。行きましよう！」

彼は僕の考えを全て汲み取ってくれたようだ。

レンダーの家を出て約一時間、それでも気が遠くなるような長い時間の後に僕はダイクト氏と共に禁断神術が描かれた本を持ち帰った。

「お待たせしました！皆さん……、離れていてください！」

「ノレッジさん（様）！」

僕は、まず『停止』の神術を解いた。すると……再びレンダーが血を吐き出した！僕は彼女の手を握り締める。

「レンダー……もう大丈夫だから。僕を信じてくれ」

敬語など、どうでも良かった。僕は彼女を助けたい。今の僕を構成するのはそれだけの気持ちだ。

「禁断神術……蘇生（Resuscitation）！」

僕が術式を描いた瞬間……！物凄い速度で力が奪われていくのを感じる！これが……禁断神術の反動……！指先の感覚が消え……視界が狭まる！そして、体の奥底から激痛が走る。痛い……！この痛みは精神が削れていく痛みだ……！体も……心も……鈍い刃物でゆつくりと削られていくような激痛……！だが……発動にはまだまだ力が足りない！このままだと……僕は死ぬんじゃないか……？

「……ノレッジ様……」

その時、消え行く視界と聴覚の中に再びレンダーの姿が映った！僕は……まだやれる！

「うわああああああああ」

意識が光に溶けてゆく……！これで僕は天使としての全ての力を失っても……構わない！いや……自分の命さえも……！僕がそう思うと……心の奥底からまだ力が溢れてくる感覚があった。もう、五感失っているというのに……そして……溢れてくる力が全て放出された後……僕は完全な闇の中に落ちていった。

希望の目覚め

僕は……一体どうなったんだ？生きているのか……？体に感覚がない。少し怖いけど……目を開けてみようか……

「ノレッジ！」

この声は……この姿は……ルナリート君？あれ、セルフアス君……それにジュディアさんまで……？一体？

「あれ……僕は？」

「ノレッジ様！うわあああー……ん！」

今僕の胸元に泣きついてきているのは……レンダー！？良かった。何とか助かったんだ！僕

も生きている！

「馬鹿野郎！」

痛い！喜びで思わず笑みを零していると、セルフアス君に頭を軽く殴られた。何故だ？

「無茶な事をしやがって！昔のお前は……決して危ない事には手を出さなかった。なのに今何だ！？お前はもう少しで死ぬ所だったんだぜ！ルナが来るのがもう少し遅ければな……！自分が死んだら意味がないだろ！？」

セルフアス君は目に涙を浮かべている。そうか……僕は結局ルナリート君に助けられたのか……

「私はお前を少し助けただけさ。彼女を救ったのはノレッジ、全部お前の力だ。見直したよ！まさか、禁断神術まで使うとはな」

「……はは……ありがとうございます。どうしても彼女だけは僕の力で助けたかったんですよ」

「ノレッジ様！もうそんな無理な事はやめて下さい！」

ああ、そうかすぐ傍に彼女がいたんだ。……恥ずかしいな。顔が真っ赤になるのを感じた。

「ノレッジ、あなたが倒れてからも1週間が経ったわ。その間、レンダーはずっと心配し続けていたのよ。片時も傍を離れずにね。二人とも……これからは辛かった分、仲良くしないと駄目よ」

ジュディアが笑った。天界にいた時は殆ど笑顔を見る事なんて無かったのに。そうだ、レンダーも僕も助かった。本当に良かった！

数日後……

「ノレッジ様……」

僕とレンダーは、リウォルの街の近くにある砂浜に来ていた。レンダーの病気は完治し、外を自由に歩く事が出来るようになった。

「『様』はやめてくれて言ったでしょう？ノレッジでいいよ」

「じゃあ、ノレッジさん！」

「はは、まあそれでいいか。慣れないと思いますしね」

「あ！ノレッジさんも敬語が抜けきってない！」

「あ、ごめん。僕は、基本的に誰と話す時も敬語を使うからなかなか慣れなくて……」

「お互いに慣れていかないとダメですね」

「そうですね」

「あはは……！」

僕と彼女はこんな感じで、手を繋ぎながら浜辺を散歩している。何だろう？こんな幸せな気持ちになったのは生まれて初めてだ。

「ノレッジさん……、私、幸せです。あの時、本当に死ぬと思っていたのに……」

突然彼女は砂浜に座り、恥ずかしそうに海を見つめながらそう言った。今は夕方……夕陽が海に射して、辺りが真っ赤に染まっている。

「僕もとても幸せですよ。いや、幸せだよ。僕もずっと、君の事が好きだったから……今生きていてくれて……元気になってくれて心の底から嬉しく思う」

「ノレッジさん！私も貴方の事が大好きだから……ずっと傍にいて欲しい！」

レンダーは顔を炎のように赤くしながら……そして目を潤ませながらそう言った。僕は、そんな彼女を愛しく思い抱き締める。きつと、こうやって抱き締めるっていう事は誰かに教わる事じゃなくて本能的なものなんだと思う。

「僕はずっと傍にいますよ。あの時命を懸けたように、これからも君を守り続ける。ね？」

「ノレッジさん……、私も永遠に」

こうして……僕達は、長い長いキスを交わした。そして、未来を……永遠を誓った。二人とも死を乗り越える事が出来た。これから先、どんな事があっても僕達を切り裂くものはないだろう。例え、ルナリート君ががかって経験したように魂の離別があつたとしても……僕達も大丈夫だ。こんなにもお互いを想う事が出来る。

これが『永遠の心』だったんだ。



人を愛し、愛される。  
永遠に同じように想い続ける事ができる。  
何があっても、どんなに離れていても変わらない。

ようやくわかったよ。

これが、僕の今まで生きてきた意味なんだ。

#### 第四節 小さな冒険

夏の力強い陽射しを受け、リルフィは今日もフィグリル中央学校へ向かう。彼女は朝から上機嫌だ。何故なら、今日は月に一度の交流会（授業）が行われる日だからだ。この日は、フィグリルの学生だけでなく世界中から数多くの同年代の友達が学校に集まる。リルフィは、誰にでも優しく接する事が出来るので友達が多い。その性格は、母であるシエルフィアと父であるルナリートからの遺伝による所が大きい。リルフィ自身の魂が力強く純粋である事が一番の要因である。魂は……生きている者の肉体が朽ちても生き続け、記憶を失い新たな生命に宿る。それが転生であり、神や獄王を除いては殆どの場合例外は無い。普通の人間だったフィーネが、シエルフィアとして生まれ変わり記憶まで持っている事は歴史上類を見ない程の奇蹟なのだ。だから、リルフィも前世や太古の記憶は無い。だが、一つだけ言えるのはリルフィの魂は遙か昔より本質は変わっていないという事だ。

「今日も暑いなあ……でも、今日は月に一度しか会えない友達も学校に来るから嬉しいなっ！」

リルフィは嬉しさの余り、学校へ向かう機関車の中で微笑みながら一人でそう言った。周りに座っていた人々もその様子を見て和んだ表情を返した。この時間に機関車に乗っているのは、学校へ向かう学生か仕事へ向かう大人達だ。大人にとつて子供達は宝だ。子供達は、いざれ自分達に変わり世界を支えるようになる。また、その成長を見守る事は楽しいものだ。そして、大人は子供の姿に自分自身の過去を思い浮かべてしまう。子供達が無邪気に明るく生きているという事を見られるのは、嬉しい事だ。

やがて、機関車はフィグリル中央学校に到着した。リルフィは、いつもより少し早めに校舎へと歩む。

「リルフィ！」

聞き慣れた元気な声、呼ばれたリルフィはすぐに振り向いた。

「おはよう、ウィツシュ！」

彼女もまた元気一杯の声で返事をする。相手は8歳のリルフィの一つ年下で幼馴染、ウィツシュだった。

「今日は父さんと母さんが忙しかったから、聖石を使ってぼく一人で来たんだ！」

「えっ!? ウィツシュ一人で来たの?」

「うん。ぼくはどうしても交流会に来たかったから！」

ウィツシュは嬉しそうに笑った。彼は7歳なのに、交流会に参加する為に『転送』の神術が込められた聖石を使って一人でやって来た。セルフアスの子供らしく、なかなか度胸のある行動だ。

「ウィツシュ、凄いな！今日は、わたしのパパとママも参観には来ないけど学校頑張ろう！」

「うんっ！」

そう言って二人は駆け出した。リルフィの長い真紅の髪が揺れる。その隣で、金の短い髪と青い目を携えたウィツシュが走る。二人は、物心つかない時から一緒だった。ウィツシュは父母と共にミルドに住んでいるが、父母がフィグリルを訪れる度に一緒に歩いてきたからだ。この日学校は9時〜15時までで、色々な授業が行われた。数学や言語、歴史や料理、合同体育などだ。どの授業も今後の生活に役立つようなものばかりで、かつてルナリート達天使が天界で教えられたものとは全く異なるものだった。

「冒険へ」

「リルフィちゃん、バイバーイ！」



「うん、またねー！」

「リルファイちゃん、今度また遊ぼうね！」

「うん、約束だよ！」

昼の3時。学校の授業が終わり、リルファイは多くの友達に囲まれていた。毎日学校で会う友人に加えて、今日は月に一度だけ遙々中央学校まで訪れる友人もいる。リルファイは、友達が好きだし大切にしている。だから、必然的に友人の数が増えたのだ。

「リルファイちゃん、今度会えるのは来月だけど元気でね！」

「ありがとう、元気でね！」

こうして皆が去った後、ウィツシュも近付いてきた。

「リルファイ、今から遊ぼうよ！」

ウィツシュは嬉しそうだ。リルファイは殆ど一月に一度しか会えない幼馴染。それ以上に、彼は彼女に惹かれている。物心付く前から一緒にいた女の子。一つ年上のお姉さん。そして何より、リルファイの優しさや強さに接して好意を持たない筈が無かった。

「うん、いいよ！でも5時までには帰らないとダメだからね」

リルファイは笑顔でそう答えた。ウィツシュは幼い頃からずっと仲の良い幼馴染。大切な友達の中でも、付き合いが長い分ウィツシュは特に大切だ。

「わーい！ちゃんと5時までには帰るようにするよ」

「何して遊ぶの？」

「楽しい事だよ、リルファイちよつとだけ目を閉じて……」

そう言うと、彼女はすぐに目を閉じた。リルファイはまだ人を疑う事を知らない。というより、騙す人間がいらないから疑う必要もないのだ。

「レニーの森へ！」

ウィツシュは、目を瞑ったリルファイの手を右手で握り左手には聖石を持ってそう叫んだ！途端に二人の体はフィグリルから消え、神術の膜に包まれてレニーの森へと到着した。

「えっ！？ここは？」

「レニーの森だよ。周りをよく見てみてよ！」

そう言われて、彼女は驚きながら周囲を見渡した。確かに父母と何度か来た事のあるレニーの森だった。しかし……この場所はフィグリルから遠過ぎる。リルファイは、地理の本も読んでいたからこの場所の位置を知っていた。

「ウィツシュ！ダメよ！ここは遠い場所だからパパとママに怒られちゃうわ。それに5時までに帰れないよ！」

彼女は首を振りながら動転して大きな声を出した。

「リルファイ、この森には月夜の光で花を咲かせる『ルナ草』があるんだ。10年前、レニーの街と森は魔の攻撃で壊滅状態になっていたけど、天界が人間界と融合した時に天使が多くこの街に移り住んで、見事に復興した。その時に、たまたまルナ草もこの森に生息するようになったんだよ」

ルナ草。リルファイはその名前を知っていた。父親と同じ名前を持つこの植物は、かつて父が育て魂が宿り、先代神との戦いで活躍したという事を。

「ルナ草を持って帰ったら、きっとリルファイのお父さんが喜んでくれるよ！」

確かに、持って帰ったら間違いなく喜んでくれるだろう。でも、ルナ草は月の光を受けて白い花を咲かせる。月の光を受けるには、夜が来るのを待たなければいけない。今は夏なので、夜が訪れるのは遅い。リルファイはそれが心配だった。

「でも……時間が……」

「大丈夫だよ、花は咲いていなくても凶鑑で見た事があるから時間内に探せるよ！」

「……うん、そうね！じゃあ頑張って探しましょ！」

という訳で二人は森の中を冒険する事になった。レニーの森は作物が多く取れて、それを育てる人間や天使も多い。だがそれは森の入り口の方だけで、奥に進むと人影は無くなる。それでも、ルナ草は森の奥地にしか生息していないので二人は懸命に探した。ウィツシュは冒険が好きだ。しかも、隣には自分が好意を抱く女の子がいる。彼は意気揚々と森の奥へ奥へと歩を進めた。

「なかなか見つからないね……」

「大丈夫だよ！もつと進めば絶対見つかるから」

森を進むにつれて、辺りは暗くなる。陽が落ちてきている所為もあるが、森を覆う木々の密度が上がつているからだ。ウィツシュも少し不安になり、落ちていた木の棒を手に取りそれを剣のように構えた。その手とは逆の手はリルフィの手をしっかりと握り絞めている。

「ガサッ……」

突如草むらから音がする！ウィツシュはすぐに棒を構えて、リルフィの前に出た！何があっても彼女を守る為だ。二人の心拍数はピークまで上がった！……しかし、小さな鼠が通り過ぎただけだった。二人は安堵の溜息をついた。

「ふう……びっくりしたあ」

「ウィツシュ、守ってくれてありがとう！でも……そろそろ時間が……時計は持っていないの？」

「ぼくは持っていないね。リルフィも？」

「うん……どうしよう……時間がわからない」

「多分まだ大丈夫だよ、もう少し探したら帰ろう！」

「うん……わかった」

この時、時刻は既に5時を過ぎていた。だが、森は常に薄暗く所々に灯りが設置されていたので時間の変化を感じにくい状態だった。灯りは、森の中で人が踏み込んだ領域までは所々に設置されている。

だが、更に歩くとついに灯りさえも途絶えた。そう、人が踏み込まない領域まで辿り着いたのだ。

「ウィツシュ！暗いわ。何も見えない！」

「大丈夫……ぼくがいるから！ほら、向こうに灯りが見えるよ！」

半ば強引にウィツシュはリルフィの手を引張った。リルフィは、涙を浮かべながらも懸命に走る。すると……

「あっ！？月が出てる！」

ウィツシュは驚きの声を上げた。遠目に見えていた灯りは月の光だったのだ。こんなにも月の光が眩い……そこで初めて、時刻は5時などとくに過ぎてしまっていた事を理解した。

「うわーん」

リルフィはついに泣き出した。父も母も絶対に心配している。自分が怒られる事より、大好きな父母を心配で悲しませる事が何より辛かったからだ。その様子を見て、ウィツシュは深く反省した。

「リルフィ……ごめん。ぼくがリルフィのお父さんとお母さんに謝るから泣かないで！」

「ウィツシュはリルフィの背中を優しく擦りながらそう言った。その時……！」

「……あっ！ルナ草！」

リルフィの涙で滲んだ目に飛び込んできた白い花……月光の光で咲くそれは紛れも無くルナ草だった。これを持って帰ったら、お父さんが喜んでくれる。リルフィの心はそれで一杯になり涙が止まった。しかし、ルナ草は切り立った崖の頂上にあり崖を登らなければ摘む事は出来ない。

「心配しないで、ぼくが取ってくるから！」

ウィツシュはそう言うと言わずに崖に走ってあつと言う間に登り切った。リルフィを悲しませた分、それを挽回しなかったからだ。そして、花を摘んで彼は戻った。

「はい！これで喜んでもらえるよ！」

「うん……本当にありがとう。とっても嬉しい！」

「よし、後は一刻も早く帰るだけだね」

その時だった！

「グルルルルルル」

二人の周りに狼の群れがいた！数は十数頭！

「ガウッ……！」

その中の1匹が不意に飛びかかった！ウィツシュはすぐさま木の棒に渾身の力を込めて叩き落とす！

「キヤウンッ……！」

叩かれた狼はすぐ群れに戻り、二人の周りを旋回し始めた。隙を見れば一気に襲われる！聖石を使えば逃げられるが、生憎聖石はリュックサックの中でそれを出す暇など無い！

「……ウイッシュ！どうしよう！？」

「大丈夫！ぼくが追い払うから！」

ウイッシュはそう叫び、棒を両手で強く握りしめた。ぼくは尊敬する強い父親セルフアスの息子だ。絶対に負けない！と胸に誓いながら。

「うおおお」

およそ7歳とは思えない程の気迫を狼達にぶつける！その様子に驚いた狼は、今度は3匹以上が同時に襲ってくるようになった！

「リルフィは絶対にぼくを守るんだ！」

ウイッシュは見事に狼達を捌き、そして攻撃する！この技術は、セルフアスの教えによるものだ。男は強く在らなければならぬという思想が息子にもしつかりと息衝いている。しかし！

「キヤアー」

標的がリルフィに変わったのだ！咄嗟にウイッシュはリルフィの前に出る！

「ガブツ……！！」

「うわあああ」

ウイッシュが腕を狼に噛まれた！流血が地面を真紅に染める！

「ウイッシュ！いやああー！」

リルフィが叫び、ウイッシュは痛みと出血で動けずにその場に座りこんだ！それをリルフィは必死で抱きかかえる！

「ガルルルル」

狼の群れは二人の様子に構う事は無く、止めの一撃を喰らわせようと間合いを詰める！「（わたしが……何とかしないと……！！ウイッシュを守らないと！）」

その瞬間、彼女は強い目を携えて立ち上がった！

「まずは……ウイッシュを守る！」

リルフィがそう叫ぶと、ウイッシュの周りに強い結界が出来た。そう、神術で生み出されたものだ。普通、神術の発動には脳内での術のイメージとそれを呼び出す術式が必要だ。だが、リルフィにはそれは必要無かった。術式というものは、神であるエファロードが天使達に与えたものであり、強い力を持つ者に術式は必要無い。唯、脳内で神術の結果をイメージするだけでそれを発動させる事が可能だ。勿論、天使が使えない禁断神術以上神術には術式が必要となるが……

「キャンツ……！！」

ウイッシュに近付いた狼が結界に弾き飛ばされ、そんな叫び声を上げた！この結界は恐らく、銃火器でも破れはしないだろう。それぐらい、リルフィの力は強力だった。この神術が、生まれて初めて使った神術にも関わらず……

「後は、狼を追い払う！」

リルフィが群れを睨むと、群れの足元から巨大な火柱が渦を巻いて天空へと昇る！狼は火柱を咄嗟に避けたが……

「ウオーン……！！」

一匹の狼の鳴き声と共に、群れは全て逃げ出した。これだけ圧倒的な力の差を見せつけられて戦意を喪失したのだ。

「良かった。ウイッシュ大丈夫！？」

狼が去った後、リルフィはすぐにウイッシュを抱き締めた。

「うん……ぼくはもっと強くなって、今度はリルフィを守るよ……」

そう言って、ウイッシュは意識を失った。

「リルフィ！ウイッシュ！」

そこで、リルフィは聞き覚えのある声を聞いた。

「パパ！ママ！ウイッシュのお父さん、お母さん！」

そう、二人の両親が全員集っていたのだ。

「強い神術のエネルギーを感じたから来てみたら……リルフィだったのか！？」

「ウィツシュ、酷い怪我！」  
こうして、場は一時騒然としたが、シエルフィアとジュディアがウィツシュの治療を施してようやく落ち着いた。

二人は遅い時間まで出歩いて心配をかけた事については怒られたが、他は咎められなかった。リルフィの親しいの心、危機に瀕してウィツシュを守った強さ。ウィツシュの、自分を犠牲にしてでもリルフィを守ろうとした強い決意を感じたからだ。

二人の親である4人は心配しながらも、人に優しく健やかに成長している自分の子供が誇らしかった。

しかし、神術を教えていないリルフィが作った結界の跡と、焼け焦げた地面と木々を見てルナリートは思った。

「(妻も娘も……怒らせると大変な事になるな……)」

この日見つけたルナ草は、リルフィの部屋で大切に育てられる事になった。  
しかも名前がつけられ、「ウィツシュ」と言うらしい。

時は、穏やかに過ぎて行く……

## 第五節 夢に落ちる

「パパ、ママおはよう！」

眩い朝陽を受けて、元気なリルフィの声が厨房全体に響く。シエルフィアは朝食の準備をしていて、私は紅茶を飲んでいる。そこにリルフィが元気良く現れるのはいつもと変わらぬ平和な日常が続いている証拠だ。

「おはよう！」

椅子に座る私と、スープを火に掛けているシエルフィアは同時に返事をした。今日も夏の陽射しが昇り始め、生きる者全てに恵みの光を齎している。さあ、今日も幸せな一日の始まりだ。家族3人で仲良く美味しい朝食を頬張っていると、今日も一日頑張ろうという気力が漲るのを感じる。

「それじゃあ、わたしはウィツシュ(ルナ草)に水をあげたら学校に行くね！」

朝食を食べ終わったリルフィは椅子から元気よく飛び降りた。まだ8歳のリルフィにとつて、大人用のテーブルと一緒に食事をするには少し高い椅子に座らなければならぬ。だが子供の成長は早いので、こんな光景を見られるのも後少しかと思うと嬉しい反面ちよつと寂しい。少し前までは、私とシエルフィアにずっと抱っこされていたというのに……

「本当に、子供の成長って早いわね」

「ああ、あの子を見てみると月日の流れを実感できるよ。そして、歩んできた道程をね」

「ルナさん……」  
シエルフィアはそう言うと、私の首に抱き付いた。私も優しく彼女の背中を抱き絞める。200年以上前からお互いを思い続けて、今もこうして同じ場所で同じ事を考えられる。この幸せを脅かす物は何も無く、ゆつくりと時間の流れに身を委ねられる他に何を望むだろう？ 私は何も望みはしない。この日も、リルフィを見送り私達はキスをして互いの仕事を始めた。この後、今までの日常とは違う非日常が待ちうけている事も知らずに……

く不可思議の始まり」

正午の時間を告げるチャイムが鳴り、シエルフィアが昼食を私の仕事部屋まで持ってきてくれた。今日は海鮮素材が沢山入ったパスタで、味は言うまでも無く絶品だった。いつも私達は、食事を摂った後は昼休みの終わる時間まで一緒にいる。昼休みが終わるのは午後1時でチャイムが鳴るのだが、シエルフィアがこの部屋を出るのは厨房の人間が迎えに来てからだ。

「カラーン……カラーン」

「あっ、もう昼休みは終わりね。もうすぐしたら、私を迎えに来るわ」



「一時間なんてあつと言う間だな、本当に。今日も美味しい昼食ありがとな！」  
私は食べ終えた皿を見てからシエルフィアに微笑んだ。  
「どういたしまして！ルナさんが喜んでくれるから私は料理が大好きなの。勿論、リルフィも美味しいって食べてくれる。妻として、母親として私は幸せ……だから、これからも料理は頑張るね！」

「そうか！じゃあ、私もこの平和な世界を維持していく為に仕事を頑張らないとだな！」  
私達は笑顔を交わしながらそんな会話をしていたのだが、10分経っても30分経っても迎えが来ない。いつもなら、大体10分以内に迎えが来るのだが……

「今日は遅いわね、忙しいのかな？」  
「少し様子を見に行ってみよう」

まず、部屋の扉を開けて私達は驚いた！誰もいないからだ。

「あれっ！衛兵達や城で仕事をする人間達が一人もいない！」

私達は辺りを見回した。しかし、本当に誰もいない！

「厨房に行きましょう！」

不安そうなシエルフィアの声と共に私達は駆け出した。幾つもの階段を走り降り、辿りついた厨房、そこには……！！？

「みんなどうしたの！？」

シエルフィアが駆け寄る！それもその筈だ、厨房の人間が全て床に倒れていたのだから！

「おい！どうしたんだ！」

私も倒れている一人を揺さぶった！しかし……返事は無い。だが、次の瞬間状況を把握した！

「眠ってる！」

私とシエルフィアは同時に叫んだ！

「一体……どういう事だ？」

「わからないわ！でも、これは唯の眠りじゃない。揺さぶっても呼びかけても起きないから眠っているだけなら命に別状は無さそうだが、さつきまでは皆元気に起きていた。私達は何が起こったのかを理解する為に、城中を見回る事にした。大抵の者は、いつも仕事をしている場所そのまま眠りに就いていた。しかし、誰一人起きていない。驚いたのは城の中で彫刻をしている彫刻家が、像を削りながら眠っていた事だ。これは、抗えない眠気が突然襲ってきた事を意味する。この城に一体何が起こったんだ！？私やシエルフィアが見る限り、これは神術等の仕業でもない。

「街も見に行かないと！」

シエルフィアはそう言って全力で城を飛び出した！

「全く……昔から変わって無いな！」

私もその後ろを追いかけた。緊急事態なのだが、傷付いた者の為なら後先を考えずに走って行くシエルフィアの背中がとても懐かしくて頼もしかった。

白亜の石畳の上を街の中心まで走り、辺りを見回したが……やはり皆深く眠っていた。

「そうだ……リルフィは！？」

私達は青褪めた！最愛の娘は今学校に行っている！城も街も眠ってしまったのならば……

……！？まさか……！

「パパ、ママー！」

その時だった！泣きながら私達の下へと走り寄るリルフィを見たのは！

「リルフィ！」

彼女はシエルフィアの胸に飛びついた！私もすぐさま落ち着かせる為に頭を撫でた……その時！

「ポオオオー」

聞き慣れた音……！こちらへ向かう線路を走る蒸気機関車だった！運転士は……やはり眠っている！勿論乗客も！このまま機関車が暴走すれば、大惨事になる！

「ルナさん！どうするの！？」

「久々だけど……力を使うしか無いな！」

私は、エフアロード第三段階の力を解放した。髪は銀に染まり、背中には光の翼が現れる！



そして、私は高速で機関車の上空に移動した！

「機関車全体に『停止』の神術を……！」

それで機関車の動きはほぼ止まった。完全に止めなかったのは、停止を解除した時に反動で再び激しく動き出すからだ。

「後は、ゆっくり動きを止めるだけだ！」

動きが緩慢になった機関車の前に私は降り立ち、片手を前に出して動く機関車を止めた。そして、停止を解除しながら衝撃を私の腕で吸収した。かつての戦いに比べれば、このぐらい造作も無い事だ。

「パパすごーい！」

さっきまで泣いていたリルファイが今度は私に抱き付いてきた。

「よしよし、もう大丈夫だ」

私が彼女を抱き締めていると、シエルファイアが少し寂しそうに私を見ていた。昔は、こんな時すぐに喜んだり泣いたり走り寄りたりするのはシエルファイア、フィーネの役目だったからな。それより……機関車は止めたが、現状は一向に良くなっていない！それを何とかしなければ！そう思った時だった。

「キュイイイ」

目の前に光の球体が現れて、徐々に消えていく……中から現れたのは、セルファスとジュディア、そしてウィツシュだった！これは、転送の力を封じ込めた聖石の力だ。

「一体これは何が起こってるの？……世界が眠ってしまったわ！」

現れるなり、青褪めた顔をしたジュディアが叫ぶ。

「ルナ！たった今世界を転送で見回ったんだが、ミルドや他の街の人間達は皆眠ってしまったぜ！しかも、人間だけじゃない。天使だった者まで！」

世界までもが……！セルファスも慌てふためいている！そんな……天使だった者まで！？

「これは今までに無い深刻な事態だ……！だが……私達は何とも無い。現状を整理すると……私達のように強い力を持つ者以外は夢に落ちていているという事……！！？」

そこで、シエルファイアが言った。

「ジュディアさん、これは神術の類ではない。そうよね？」

その声に、かつて天界で神術を司り極めたジュディアが即答する。

「ええ、間違いない。神術なら見ればすぐわかるわ。何より、世界が眠るような強力な力はルナやシエルファイアしか使えないでしょう？だから神術の仕業では無いわ。そして、魔術でも無い。この眠りは、術ではなく物理的な眠りよ！人も天使も皆眠る。その生理的な本能に対して何かが強力に働きかけているという事」

彼女にも見当が付かないようだ……一体どうすれば……！？そうだ……！！

「私が、世界に対して眠りから醒めるよう強い力を送れば何とかなるんじゃないか……！！？」

私がそう言うと……

「それはダメ！」

シエルファイアとジュディアの声が重なった！何故だ……？シエルファイアがジュディアの顔を見てジュディアは頷く。どうやら、二人の見解は同じなようだ。

「今眠っている人々は、普通に眠っているのと変わらない。それを、強い神術で起こせば精神崩壊するかもしれない！だから、原因を究明して止めなければいけないわ！」

ジュディアがそう言うと、シエルファイアは再び強く頷いた。そして……

「(ルナリート君、皆さん聞こえますか！？)」

ノレッジの声だった！声のみを転送してきているようだ……

「(ああ、聞こえる！リウォールはどうなってる！？)」

私は、この場にいる全員とノレッジに向けて意識を転送した。すぐさま、彼から返事が返る！

「(その質問をするという事は、この街だけじゃないんですね。皆眠っています！僕の傍にいたレンダーも……！僕もそちらに行こうと思いましたが……彼女とこの街が心配で……！)」

「(それは仕方無いさ、大事な人の傍にいてやるんだ！だが……私達の知る限り、原因を解明しなければどうしようも無さそうだ……ノレッジ、何かいい考えはないか？)」

私達は祈るような気持ちで彼の返答を待った。彼ならば、良い考えが浮かぶかもしれないと

思ったからだ。暫く沈黙の時間が流れ……

「(……僕も良い方法は解りません。でも、知識の街リナンにある本の中には参考になる情報が集約されているかもしれないよ!)」

成程……そうか、あの街にはかつての天界の知識と人間界の知識が集っている。行く価値はありそうだな!

「パパ、行きましょ!」

リルフィが躊躇いなく声を張り上げると、場にいる皆は頷いた。今は、リナンの知識に賭けてみるしかないだろう。

「『転送』!」

エネルギー膜が6人を包み、目の前の景色が消えて高速で流れていく。そして、リナンの中心部へと到着した。だが……!

「この街も眠ってるよ……!」  
ウイツシュが叫んだ! それもその筈だ……見渡す限り、街の中にいる人間は地面に倒れ眠っているのだから……

この街には、かつて天使だった者が多く住んでいる。ここで暮らす者は知識欲が旺盛で、科学技術だけでなく哲学や言語の分野でも研究を行っている。

天界の知識、人間界の知識が描かれた本が無数に存在するこの街の中央図書館には私さえも知らない事柄が多くあるのだ。そして、この街の暮らしは慎まじやかだ。レンガ造りの家が立ち並び、どの家も綺麗に手入れと掃除がされている。だが、豪華な飾りつけなどは一切無く人々は高級な食物も滅多に食べないようだ。そうする理由は、一般人が憧れるような奢侈な暮らしには興味が無く寧ろ知識を深める事で心を豊かにする事に価値観を見出しているからだ。

「早く図書館へ……!」

皆口を揃えてそう言った。一斉に中央図書館へと駆ける! ほんの数分、街の奥へと走ったがこの事態の深刻さが身に染みて伝わってくる! 本当に、誰一人として起きていない者はいないからだ。このまま、万が一眠りから醒めないような事があればいずれ死に至るだろう。生きている者は常にエネルギーを消費しており、眠ったままの状態では食物というエネルギーを摂取する事が出来ないからだ。

「着いたぜ!」

セルファスが、図書館の門を勢いよく開こうとした時だった!

「皇帝、そして皆様お待ちしております!」

「デイクト!」

驚いた事に、デイクトは眠っていないかったのだ! 一体何故だ……?

「皇帝、そんな怪訝な顔をされなくとも……この図書館には、強力な結界が張られているのをお忘れですか?」

そうか……確かにこの図書館には、物理的な攻撃や神術などのエネルギーを反射するように結界を張っている。この施設はそれ程重要な役割を持っているからだ。

「図書館に居た学者は既に調査を開始しております。さあ、原因を探りましょう!」

私達は暫くの間啞然とした。私達が焦っている間には既にデイクトを含む学者達は調査を始めていたというのか……? その冷静さと頼もしさに言葉すら出なかったからだ。しかし、今すべき事は決まっている。

「わかった! まずは、私達が見てきた街の状況を話そう!」

学者達に囲まれ、私達はフィグリル、ミルド、リウォル……そして、セルファス達が見てきた街の状況を率直に話した。

「成程……世界が眠っているのは、神術や魔術の類ではないと……しかし、今までにそんな話は聞いた事がありませんね!」

白髪の頭に手を遣りながら、デイクトは真剣な面持ちで考え込む。同様に学者達も首を傾げていた。

「物理的なものが作用する眠りであるとすれば、必ず働きかけている物が存在する筈です! それを探せば!」

一人の学者が思い付いた瞬間にそう叫んだ!

「そうですね。それを探す事で原因がわかるでしょう! しかし……場所が……?」

デイクトがそう言った直後、リルファイが言った。

「皆さんの話を整理すると、必ず原因の物が存在するという事ですよね？その原因の物が周りに作用させているとすれば、各地で眠りが発生した時間の差から原因の地点を算出できるんじゃないですか？」

恐ろしい娘だ……たった8歳にして、研究に生涯を捧げる学者達と張り合うとは……！しかも、この考えは……

「素晴らしい。流石は皇帝の御子息です！早速計算を始めましょう！」

大きなテーブルに大きな世界地図を広げ、各地で眠りが発生した時刻を書き込んだ。フィグリル城での正確な時間はわからないがある程度は絞られる。リルファイが学校で現象が発生した時間を覚えていたからだ。そして、各地の時間と共に計算すれば大体の地点が求められるだろう。時間が書き込まれた瞬間、私の頭の中で数式が描かれ答はすぐに出た。

「まさか……そんな筈は……!?!」

私は、各地を結ぶ線を引き計算結果の地点を指し示した。全員が計算結果の正しい事を確認した上で示した地点を見て叫ぶ……!

「『聖域ロードガーデン』」

聖域ロードガーデン……ここは、かつての人間界には無かった場所だ。それもその筈……この場所には、太古より人間界と獄界を繋ぐ『死者の口』があり、10年前に天界が死者の口に覆い被さるようにこの場所に融合したからだ。天界がこの場所に融合したのには訳がある。それは、私の最愛なる兄であるハルメスが、命と引き換えに死者の口……即ち獄界への道を塞いだ事に起因する。天界をこの場所に融合させる事によって、死者の口の復活を阻止する事が出来るからだ。天界の融合後この場所から、天使だった者は出発した。そしてこの場所は聖域ロードガーデンと名付けられ、天界の遺跡が残る事となる。今では、本や貴重な物質は全て持ち運ばれて私が強力な結界を張っている。この場所に張っている結界は、死者の口を封じていても方が一起こり得るかもしれない獄界からの侵入（転送等を用いた空間転移術での侵入）を防ぐ為のもので、エファロードである私やシェルファイアぐらいの力が無ければ結界に触れた瞬間対象者が消滅する程のものだ。だからこそ、その場に誰かがいるという事は有り得ない。勿論、眠りを起こさせるような天界の遺物がそこにあるとは考えられない。人間界でその場所に行けるのは、私とシェルファイア……そしてエファロードとしての力を内に秘めるリルファイだけだ。

「そんな事は有り得ない」

私はそう言いながらも、背筋が凍るのを感じた。冷や汗が止まらない。一つの可能性が脳裏をよぎったからだ。それは、その結果で封じる事が出来ない存在がある事を思い出したからだ。だが……そんな筈は無い！

「ルナさん……、どうしたの？」

「パパ！」

「ルナ！」

「皇帝！」

同時に皆が私に呼びかける。そうだ……私がしつかりしないでどうする？私がこの世界を守らなければ、一体誰が守る？

「『転送』により、フィグリル城に眠る私の剣を」

私がそう言うと、目の前にかつて私が使っていたオリハルコンの剣が現れた。これが、私が現在使える最強の武器だ。父である神との戦いでは『神剣』という究極の剣があったが、それは戦いの終わりと共に消えてしまったからだ。『神剣』は私を想う者の魂が剣と化した物……神との戦いが終わり、その魂は生まれ変わる為にこの世界から消えていったのだ。

「ルナさんっ！？そんな剣を出して何をするつもりなの!?!」

シェルファイアが血相を変えて私の腕を掴む！10年前から私は剣を握る事は無かったからだ。「念の為だよ。心配いらぬさ。ちよつと見て帰ってくるから！」

私はそう言って、眼前に浮く剣を握り絞めた！

「……一人では行かない約束でしょ!?!」

「そうよ、パパ!」

二人は、私の両腕を離さない。これでは、転送で聖域に向かう事もできない。「そうだな。確かに約束した。何があっても離れないって」

私はそう言って剣を下ろす。そして、セルファスやディクト達に言った。

「今から、私は聖域ロードガーデンに向かう。もし、そこに原因があればそれを排除するつもりだ。その際に……私が剣を振るう事になるかもしれないが、心配するな。必ず戻るから！ 皆は待っていてくれ！」

すると、心配そうに皆が私の傍に近寄る。

「必ず全員無事で帰って（こいよ！）（きてね！）（きて下さい！）」

私は強く頷き、まずはエファロード第4段階まで力を解放した！銀の髪、真紅の目、光の翼……そして神としての記憶の覚醒だ。こんな力を使うのは10年間一度も無かった。そして、転送の為に精神を集中する！慣れたもので、シエルフィアとリルフィはすぐに私の体に抱き付く。

「聖域ロードガーデン上空へ」

～時を変える来訪者～

景色が目まぐるしく変わり……やがて、聖域の上空へと変わった。

「あれは」

聖域の中心に見た事も無い植物が生えている！私達は結界の中に入り、その植物に近付いた。すると……

「これが原因ね」

「パパ……わたし、とても眠くなってきた」

二人は眠そうに目を擦った。だが、集中していれば眠りに落ちる程ではないが……

「これで大丈夫な筈だ……『光膜』！」

私達の体を結界より高密度な光の膜が包む。これで、この植物の影響は受けない。だがそれにしても……

「不気味な植物ね……こんな植物見た事無いわ」

「わたしも、凶鑑で色んな木を見たけど……こんな木は知らないわ」

この木は、幹も葉も枝も黒い。そして、所々にある赤黒い花が花粉を飛ばしている。恐らくこの花が原因だろう。

「こんな所に植物が生えるのは信じ難いが……切って、炎で焼けば大丈夫だろう。心配する事も無かったな……」

私がそう言って剣を振ろうとした瞬間……！植物を黒いエネルギー膜が包んだ！一体……！！？

「……久し振りだね、ルナリート」

「お前は」

黒いエネルギー膜の陰から現れた者……それは、私の最悪の想像通りの者……獄王の末裔……ファイアレス！見間違う筈も無い。かつて、獄界で戦った姿と殆ど変わらない！黒い肌で整った顔立ち……変わった所は、少し歳を取った事と耳までしか無かった髪が肩まで伸びた事くらいだ。それより……何故ここに……！！？

「……この胸の傷を見なよ。君の兄につけられたものさ」

感情をぶつける私とは対称的に、以前とは違う迫力を持つファイアレスは淡々と話を始めた。

この先に待つのは……少なくとも平和ではないだろう。

だが……私は必ず最愛の人を守る！もう悲劇は終わったんだ。

悲しみを繰り返させはしない！

今の世界の為に犠牲になってくれた。リバレス、兄さん……、そして父さんの為にも……！

そう……これが新たな始まりだった。

神、獄王でさえも知り得ない未来への……

そして、Lunaという意味を理解する為の……

だが、何があるうとも The Heart of Eternity は消えはしない。

愛する者がいる限り……それを信じる者がいる限り……

私は君の傍で永遠に在り続けよう……それが私の意味だから……

∞ Luna ∞

『I will be known the meaning I was born by this battle……

I will keep living for the people hope for the eternity until the end of the time……

I wish for the everlasting love of you who is believing The Heart of Eternity……

and my daughter lives in eternal happiness……

Luna has the meaning of the decided destiny……

But, I will walk eternally with my belief and you 』

§ 第一章 柔らかな光 §

— 完 —



## 第一節 羨望

### 第二章 今を生きる

あれは1年前の事だ。ここは獄界にある獄王の宮殿……その中で、僕はまだ10年前からの苦しみに苛まれ続けていた。

かつて、ルナリートの兄ハルメスの剣によって受けた深い胸の傷は僕の体の自由を奪った。起き上がる事は愚か、呼吸をするのにも苦痛が伴う……だが、意識は常に明瞭だった。それは……エファサタンとしての生命力、そしてまだ死ぬ事を許されない定めが僕を生かしているのかもしれない。頻繁に襲い来る死の恐怖、耐え難い苦痛と戦いながらも僕は確かに生きている。ロードとサタンは戦い続ける定めだ。相手を滅ぼし、世界を一つにする為に……そう、僕が滅ぼすべきエファロードはたった一人だ。シエドロット、ハルメスが死んだ今残るはルナリートのみ……だが、滅ぼした先に待つのは果たして本当に望むべき世界なのだろうか……？ いや、それを僕は考えてはいけない。エファサタンという存在意味すらも否定しかねないから……

「コンコンコン……」

漆黒で塗り固められた僕の部屋……ベッドを照らす薄明かりの向こうで扉を叩く音が静かに響く。

「(入れ。)」

僕は言葉を発する事をせず、扉の向こうに意思を送った。この能力は、天使達が使っていた神術『転送』の原理を魔術に応用したものだ。いや、正確にはエファサタンも太古より使用する事が出来たが、獄界の魔でそれを知る者がいなかっただけだ。

「失礼致します」

現れたのは、キュアという女の魔だ。彼女は僕とほぼ同時期に生まれた幼馴染で、昔はよく一緒に遊んだものだ。それも僕が1000歳になって、獄王の息子としての教育が始まるまでの話だが……あの頃が一番楽しかったかもしれない。

「ESS (Energy Sphere of Satan) と花をお持ちしました」

「(いつも言っているけど、そんな堅苦しい言葉はやめてくれよ。僕は昔みたいに普通に話したいんだ。)」

「いえ……申し訳ありませんが、不可能です！ 私は普通の魔で、貴方様は獄王様の御息。昔のような度重なる無礼はとでも許されるものではありません！」

魔の中では色の薄い肌と、耳が隠れる位の短い黒髪を揺らしながら彼女はそう言った。

「(はあ……こうやって、僕が獄王の息子としてではなく普通に話せるのはキュアぐらいなんだけだな……グッ……！)」

その瞬間いつもの激痛が胸から全身に広がった！最初に針で刺されるような痛みが駆け抜けて、次には痺れが訪れる！

「フィアレス様！」

キュアは叫びながら僕にESSを使用した。これはかつての神のように、父である獄王が閻合成によって創り出す獄界で生きる者のエネルギー源。だが……

「ゲホッ……！！」

痛みは少しマシになったが、痺れは取れない。この状態になると、後は耐えて待つしかないのだ。

数時間……が経過しただろうか？意識が空中に浮いているような感覚の中、ようやく僕のが通常に戻ってきた。

「フィアレス様！……意識がお戻りになりましたね！大丈夫ですか？」

「(……何とか大丈夫だよ。いつも悪いね……)」

僕はぎこちなく微笑んだ。彼女は、10年前に僕が傷付いて獄界に戻った日から誰よりも心配して毎日看病に訪れてくれていた。しかし……獄界にいる他の魔は僕に敬意を払うが……心配などはしない。根本的に僕を恐れており、僕の力に対する恐怖で命令に従っているだけだと

この9年で思い知らされた。苦しむ僕に対して、何も言わず恐れずに僕の傍にいたのはキュア一人だけだったからだ。

「いえ、これが私の役目ですからお気になさらないで下さい！」

「（ありがとう……それじゃあ、いつも通り現在の人間界について聞かせてくれ。）」

僕は毎日こうやって人間界の様子を聞く。ハルメスによって魔が人間界に行く術は閉ざされたが、魔術を用いて人間界を見る事は可能だ。

「わかりました。人間界は……いつもと変わらず平和そのものです。また、技術レベルも向上しており……特に蒸気機関と電気の進歩は目を見張るものがあります。勿論、そのレベルはまだ獄界には及びませんが。しかし、このペースで進歩していけば近い将来獄界に並ぶのは間違いないでしょう」

キュアは事実を包み隠す事無く話す。僕が嘘や回りくどい事を嫌うのを知っているからだ。

「（なるほど……僕が完治したら、獄界の科学技術も向上させる必要があるな。それで……ルナリートはどうなってる？）」

僕は一番気がかりな事を訊いた。

「ルナリート・ジ・エファアロードは……幸せに暮らしています。妻と娘に囲まれ、また人々に慕われながら……人間界はルナリートの指導と保護の下で安心しながら発展を遂げているようです」

「（そうか……）」

僕はそう言いながら、目を閉じて下唇を弱々しく噛んだ。僕はルナリートが憎い……この体が動くなら、今すぐ殺しに行きたい程だ。生命の始まり……いや全ての『知性』の始まりから、エファアロードとエファアサタンは自分の世界を創り……そしてそれを守る為だけに命を捧げてきた。なのに、ルナリートは自分の幸せの為に生きている。天界を放棄し、天使という存在までも無くした。しかも……生きている場所はかつての中界……天界と獄界の緩衝帯である筈なのに！だが、何よりも許せないのは……ルナリートが一人ではない事だ。ロードとサタンは、常に一人で生きなければならなかった。神はS・U・Nの力を受けて天界を維持し、天使を創り、それでも余る膨大なエネルギーを処理する為に『封印の間』で……獄王は闇の海の力を受けて獄界を維持し、魔を創り……そして『深獄』を封印する為に『断罪の間』で生涯を終えなければならぬのだ！

でも僕は……認めたくはないが、激しい憎しみの中で羨望の心が強くなっていくのを感じていた。決して弱くは無い思い……ルナリートの話を聞く度に心の奥底が蠢く炎のように疼いて仕方が無いのだ。ルナリートはこの星で唯一、僕と対称となる者……ロードの末裔だ。だからこそ、自分と比較する。自由に……幸せに生きるルナリートと、身動き一つ出来ず……今後、獄王としての力を継承し……その責務を負わなければならない自分とを……！

そして僕は……『新生・中界計画』が失敗し……それを容認している父であるフェアロッドも許せない。中界は天界にも獄界にも属してはいけないはずだ。本来ならば、人間界を中界に戻し……どうしても人間を殺さないのであれば人間を天界に住ませるべきだったのだ。何故、長く続いた三界（天界、中界（人間界）、獄界）を二界（人間界、獄界）に変遷させる事を父は黙って見ていたんだ！？

僕は……体が動かない分、考える時間だけが無限に続いていた。そして、僕は言葉を発する痛みも気にせず呟いた。

「僕も自由が欲しい……運命などに縛られない生き方をしたい」

その瞬間、キュアは必死で僕を制止しようとする。

「ファイアレス様！無理にお喋りになられるとお体に障ります！」

でも僕は零れ落ちる言の葉を止める事が出来なかった。

「……僕は……一人は嫌だ。僕は……生涯の全てを獄界の為だけに捧げる事は出来ない。キュアなら解ってくれるよね？」

僕はゆっくりと首を動かし、彼女の目に視線を合わせた。

「……はい……、解ります！ファイアレス様が感じてきた孤独……疎外感……少しだけなら……貴方様はいつも皆と同様の扱いを望んでおられました。でも……誰もそう出来なかった。幼馴染の私でさえこんな風に接する事しかできない」

「……キュアが僕の事を一番理解しているよ」  
彼女は僕の事を想って泣いていた。この星で、こんな風に僕を想ってくれるのは彼女だけだ。

ルナリートは、自らが信じる道を生きている。僕は……

「ファイアレス、『断罪の間』へ」

その時、僕の部屋に父の声が響いた。僕は直感する。『時』が訪れたのだと。神と獄王は、生まれる時も死ぬ時も重なるようになっていく。それは、生命の始まりから対称として生きてきた運命……いや、存在の証なのかもしれない。ルナリートは9年前に先代の神シエドロットから全ての力を受け継いだ。そして、今僕は動けない体のまま父と呼ばれた。

僕は……父に反対されてでも己の信じる道を行きたい。

それが、例え歴史と責務に反する事であったとしても……

## 第二節 継承と解放

僕は、キュアと部下の魔によって断罪の間の入り口までベッドごと運ばれた。漆黒の中に無数の宝石が散りばめられた扉……その奥から重々しい空気が肌を刺すように伝わってくる。皆気付いているのだ。僕がこの中に入れば、エファサタンはたった一人になってしまおう事。そして、二度と父である獄王……フェアロット・ジ・エファサタンの声は聞く事が出来ないという事を。暫くの時間が流れ、やがて獄界全体に響き渡る荘厳な声が聞こえ始めた。

「獄界で生まれし全ての者、同胞達よ……私の言葉を聞くがいい。私は、今日を以ってこの命に別れを告げる。それは、新たな唯一の獄王ファイアレス・ジ・エファサタンに全ての力と記憶を継承するからだ。我は、獄界の維持と繁栄……そして、皆の幸せの為にこの生涯の全てを捧げてきたつもりだ。ファイアレスは、まだ幼く……頼りない所も多いが、新たな獄王として皆で支えてやって欲しい。そして……我は死しても獄界に生きる。生命、魂の恒久的な幸福を祈っている」

僕は父が許せない。『新生・中界計画』の失敗を容認している父が……だが……

僕の頬に一筋の涙が伝った。殆ど、一緒の時間を過ごした事の無い父の別れの言葉。たった一人、孤独に生き……その命を全うできる強さ。それを考えると、僕は涙が止まらなかった。世界でたった一人の家族……自分の幸せなど一切考えず、唯獄界の為にだけ生きた父親。僕は……エファサタンという身分を何度恨んだ事だろう。普通の家庭のような愛情と、対等に話せる友人を切望し……それが叶わずに、どれだけの涙を流した事だろう。幾多の思考が駆け巡り……僕の体は父の力によって断罪の間へと導かれた。

「久し振りだな。ファイアレスよ」

「お父さんっ！」

父は、今まで通り十字架に鎖で繋がれていたが……生きてるのが不思議なぐらい疲れ果てた姿になっている！生気を失った真紅の目、痩せこけた肉体……そして、長く美しかった銀の髪は面影も無く白に染まり今にも抜け落ちそうだ……

そして、明らかな力の低下……僕はこの瞬間全てを悟った。父は……この9年、最後の命を削って獄界を維持し続けていた。こんな状態で、人間界を中界に変える事など出来はしない。もう、力も時間も残されていなかったんだ！

「まずは……その体を動くようにしなければ……苦しかっただろう」

父は十字架を降り、空間に浮かぶ僕の体にかざした。十字架を降りるといふ事は、二度とその十字架には戻れない。即ち、残された力の全てを子に継承する事を意味する。

「僕は……今までずっと寂しかったです！」

痛みが消え、体が動くようになって僕はすぐさま父を抱き締めた！

「お前を生み出し、1735年……我はお前を想わぬ日は無かった。しかし……父親らしい事を何一つ出来ずにすまなかったな。こうして、抱き締めてやれるのも最初で最後だろう」

父もそう言いながら、力を振り絞って僕を抱き締める。初めての抱擁……それは、弱々しい腕に背中を支えられるような感覚だった。

ずっと僕が切望してきた感覚……とても嬉しかった。でも……それ以上に僕は堪らなく悲しくて、涙で前が見えなくなる！

「泣くのではない。我が息子よ。何も悲しむ必要などないのだ。魂は離れる事になるが、消滅する訳では無い。再び出会える日は必ず来る。そして我が力と記憶は全てお前に継承される。

私の考え、意思はお前と共にあるのだ。だから悲しまずに、自分の信じる道を生きよ」

僕の考えは、全て父にお見通しだったのか……決して僕を咎める訳でもなく、父は僕の自由な未来を認めている。自分は……全てを獄界の為に捧げてきたというのに……！

「うう……お父さん！」

僕の慟哭の声が大きくなるのと反比例して、父の声は小さく……そして、肉体に宿る力が弱々しくなってくる！そして……

「第23264代……獄王……その名はフェアロット……その力を以って……『闇命(Dark Life)』を行う！」

「待つ……！僕はもつと話を」

僕はそう叫びながら、父の意思と力……そして、記憶の濁流が僕に流れ込んでくるのを感じた！

僕は……第23265代……獄王。でも、今は何より……目の前にいるフェアロットの息子さんだ！

「お前は……今までのどんな獄王よりも自由を愛し、孤独を憎む。ルナリートとハルメスが、『愛』を命題に生まれたように……だが、今のお前には、獄王の存在意味がわかるだろう。獄界の存続、魂を生み出し転生させる事、そして深獄の封印という重大な責務を」

そうだ……僕が獄界を存続させなければ、魔の住む場所が無くなる！存続させずに、魔が生きたら人間界を征服するしかないだろう。

魂を生み出し、転生……獄王としての記憶を継承した今、初めて理解した事だが『魂』は『魂界』から生まれる。そして、死者の魂も『魂界』に行き、新たな魂として転生するのだ。

神と獄王は、魂を扱う事は出来ても無から創り出す事はできない。神と、獄王はその橋渡しが出来ただけなのだ！父がさっき言った、再び出会える日が必ず来るという事は……魂界で再会できるという事。魂界で再会出来なくても、新たな魂として会う事が出来るという事なのだ。

僕がもし、魂を魂界から生み出し（橋渡しを行い）転生させる事をやめれば、従来の生命サイクルを狂わせる事になりかねない。ルナリートは天界と共に、魂を扱う事を放棄した。神や獄王の手を加えない、本来あるべき姿へ退行させたのだろう。『魂は魂界に委ねられ、何者も干渉しない』という過去の姿へ。

深獄……神、獄王の力を以ってしても、滅する事の出来ない強大な悪魂を封印する場所。悪魂……何だかその言葉に僕は引っかけたが、深獄の封印を解けば、神や獄王すらも脅かす者が現れるのは確かだ。だから、獄王はずっと深獄の扉を閉ざしてきた。

僕が自由を求めれば……その代償は計り知れない！僕は動転した！もつと父に進むべき道を示して欲しい……！

「お父さん……！僕は一体どうすれば」

僕は今にも消えてしまいそうな父に呼びかける！

「……自分の責務を果たした我が望む事は……お前の幸せだけだ。だから……自由に」

ゆっくり微笑んだと思ったその瞬間……父は黒銀の砂へと姿を変え……僕の腕の中に消えていった。

「お父さああああ……ん！」

僕の叫びは虚しく……誰もいない空間に響き続けた。

主を失った十字架、暗黒の海、仄かに光る星々……そして、僕が偉大なる父の死を悼んでいた。



数時間、いや数日が経つただろうか？僕の目から涙が止まったのを認識したのは……時は悲しみを風化させる。それはエファロード、エファサタンでも同じだ。記憶は消えなくとも、悲しみを風化させる事が出来るのは、前を向いて生きる為に進化した結果なのだろう。

僕が今出来る事は……自分が後悔しない道を考え……それを実行する事だ。

僕はそれに気付いてから一人、永劫とも思える時間の中……考えを巡らせる事となる。

半年後

経過したのは半年。それを知ったのは、僕が断罪の間から出た後キュアに知らされたからだ。思えば、僕はこの10年に近い歳月を『思考』する事で生きてきた。僕は……

「決めたよ、キュア。僕の歩むべき道だね」

僕の声にキュアは黙って頷く。僕達は今、二人で僕の部屋にいる。僕の決定事項を、最初に彼女に聞いて貰ったからだ。

「僕は……戦う事にした。ルナリートを倒し、人間界を獄界のものにする。そうすれば、僕自身が獄界に縛られる事も無くなり自由になれる。そして、魔も光の中で暮らす事が出来るだろう。始めは、ルナリートとの共存も考えた。人間界を半分に分け、魔が住めるようにすればいいんじゃないかって。その場合でも、僕は獄界の維持に力を注ぐ必要が無くなるから」

僕は落ち着いて話を続ける。その間、キュアは瞬きすらも忘れているかのようにじっと僕を目を見つめていた。

「僕が戦う間、戦いに力を注ぐ為『深獄』の封印に使う力は極力少なくする。また、ESSの生成も中断する。ESSについては、父が残してくれた分後数百年は大丈夫だろう。そして、魂についての関与は……僕も放棄する。その事によって何か問題が起こるようになれば、その時に対処すれば良いだろう。元々、魂についてはかつての神や獄王は関知していなかったのだから」

僕はそう言つて、軽い頭痛が走るのを覚えた。何故神と獄王は、魂界との橋渡しによる生命の誕生と死に関わるようになったのか？恐らく、稀に現れる『悪魂』を深獄に封印する為に、魂を選別する事が目的だったのだろうが……

唯、それだけが目的ならばここまで厳密に、魂と関わつただろうか。悪魂を封じるだけならば、転生で生まれてきた後に倒して封じれば良いだろうと思う。だが、その事に関する記憶は継承されていない。……というよりは、欠けていると言つた方が正確だろう。その理由は、暫く後になってから知る事となる。

「承知しました。魂界への関与は放棄、獄界の維持及び深獄の封印については最低限の力で行うという事です。そして……出来るだけ多くの力をルナリートとの戦いに使う」

彼女は至極冷静にそう言つた。しかし、僕を見つめる目に薄く涙が浮かんでいるのを僕は見逃さなかった。僕が再び戦いに出る事を止めたくて仕方無いのだろう。

「キュア……そんなに心配しなくていいよ、死にはしないから。必ず勝つて、人間界を『魔だけの理想郷』に変えてみせる」

そこで彼女は僕から目を逸らした。強い決意を持った僕を正視する事が出来なくなったのだ。

「はい……、お待ちしています」

「エファサタン、エファロードは相容れないものなんだ。二つの存在が生まれた時から……いや、お互いを別個の存在として意識できるようになつてから。僕は、自由に……幸せに生きていくルナリートが憎い。憎しみと羨望で胸が張り裂けそう。でも……戦う事を決めた一番の要因は、僕という存在を構成する記憶、魂がそうする事を望んでいるからだ。だから、獄界の為に……そして僕という存在をこの星の真理とする為に戦うんだ」

「うう……ファイアレス様」

我慢出来なくなつたのだろう。彼女から嗚咽が漏れ出した。

「だから、心配いらぬよ。僕は第23265代獄王だ。平和の中で安穩に暮らしているルナリート如きに負けたりしない」

僕はそう言つて、心の底から僕の身を案じてくれるキュアを抱き締めた。恋愛感情……では

ないと思う。唯、僕の事をそこまで想ってくれる者が悲しんでいるのを少しでも和らげたかったからだ。

かつて、僕はルナリートに対して「愛ってよくわからないけど大事なの？」と訊いた事がある。その時、ルナリートは躊躇いなく「当たり前だ」と答えた。自分を心から想ってくれる者に対して、自分も大切に想う事が愛だと言うのであれば、ルナリートの意見は間違っていない。僕は今ではそう思える。

「ファイアレス様ああ」

僕は彼女が落ち着くまで、髪と背中を擦りながら抱き締め続けた。

その後、僕は獄界の魔に今後の方針を伝えた。人間界を魔の世界にする、それは獄界に生きる者全ての悲願である。かつての神が中界を人間界に変えた時から……否、魔が獄界に生まれた時からかもしれない。獄界を埋める無限の溶岩の明かりではない、S・U・Nの光を浴びたいと願いつづけていたのだ。だから、僕の考えを聞いた魔は皆歓喜の声を上げてそれを受け入れた。

そして、僕は半年後に単身で人間界に行く事を決めた。人間界と獄界を繋ぐ『獄界への道』はハルメスによって破壊され、通常の魔は人間界に行く事は出来ない。正確には、獄界から人間界へ『転送』できる程の力を持つのは僕しかないという事だ。それに、僕以外の者が行った所で神を継承したルナリートの前では戦力にならないのは明白だ。何より……キュア達、自分の同胞を傷付けたくは無い。

半年間僕は自分に、断罪の間での過酷なトレーニングを課した。10年間動かなかった体の動かし方を思い出し、継承した力を使いこなす術を身に付ける為に。魔術、神術、剣の使い方……あらゆる戦闘を、自分の影（力の一部を分け与えた分身）と行った。ルナリートを除いて、対等に戦える相手がいけない以上、影と戦う事が一番効率的だからだ。

こうして僕は、殆ど眠らずに精神を集中して自分を鍛え上げた結果、研ぎ澄まされた体の感覚、戦闘センスを獲得し、獄王としての強大な力を使いこなせるようになった。これで、ルナリート……いやエファロードには負けない。確固たる自信を胸に、僕は再びの前に姿を現した。

「信念を胸に」

「ここは、獄王……僕の宮殿のバルコニーだ。眼下には数万、数十万……いや数百万の魔が集まっている。そう、僕の出発を見送る為だ。」

「今から、我は人間界をお前達の住む理想郷に変える為……戦ってくる！次に我がお前達の前に姿を見せる時は、切望が現実になる時だと思え！」

僕が剣を頭上にかざしてそう叫ぶと、獄界の大地、空気が全て振動する程の群集の歓声が返る。自分を『我』と称するのは、代々の獄王と同じ口調で話す事によって皆を鼓舞する為だ。

「うおおおおお」

熱気が空間に満ち溢れる中、僕は続けた。

「この星で覇権を得るのは、ロードではなくサタン……人間ではなく魔だ！光も闇も……我々が手に入れる！お前達、備えておけ！すぐに移住できるように！」

「うおおおおお」

そして僕は皆に向かって不敵に微笑み、バルコニーから宮殿の中へ戻った。

「ファイアレス様……どうかご無事で！私は、理想郷より何より……貴方様が無事に此処へ戻る事を切に願っておりますので！」

僕の前に跪き、手を合わせて目を閉じている。これは祈りだ。僕の無事のみを願う彼女の心からの……

「解ってるよ。人間界を制圧し、僕も無事に帰る。だから……何も心配せずに待っていてくれればいい」

僕は彼女の頭を撫でた。そして、意識を集中した。背中から闇の翼が現れ、体が闇物質の鎧に包まれる！

「信念を胸に……必ず勝利する！」

僕は、彼女に微笑んだ。そして、バルコニーから飛び立ち魔の目の前で転送を使った！

人間界に向けて、視界が高速で移り変わる！僕という存在が人間界に到達するのはもうすぐだ。だが……！

「バチバチ……！」

激しい衝撃と共に転送が途中で阻まれる！ここは、人間界の地上まで後数百mの地中だ。止まった視界の中で僕は言葉を発する。

「結界か……ルナリートが作ったみたいだけど、僕にこんな物が通用するとでも思っているのか!？」

僕は、魔剣を抜いた。魔剣、これは獄王の為に、自らの命を捧げた者達の魂が宿る剣。獄界最強の剣だ。

「貫いてやる！」

僕は剣に精神力を込めた！魔剣は僕のエネルギーを吸い取り、目に見える物全てを闇に変えてしまいそうな漆黒を呈している。そのエネルギーは僕を囲む周りの土や岩を融解させ、溶岩へと変える！その溶岩が僕の足元に溢れ始めたその時……

「エファサタンのみが使える魔術……『闇海 (Dark Sea)』を剣に乗せて放つ！」

「キューイイー」

空間が激しく振動し、僕の周りから消えていく！この高エネルギーの中では、溶岩は愚か空気でさえも存在する事を許されないからだ！

「人間界の空まで貫け！」

「ゴオオオオ」

闇海に乗せた剣の波動は、土も岩も空気も飲み込み、人間界の地上への障壁を洗い流していく！そして……！

「カッ」

眩しい！今まで生きてきた中で、見た事の無い強い光が、地上に開いた穴から差し込んだ。

そうだ、これがS・U・Nの光なんだ。獄王としての記憶にあるS・U・Nを僕は思い出した。フィアレスとして見るのは初めてだったのに、懐かしさで胸が詰まる。僕は光が射す方へ全速力で飛んだ！

「ここは」

古びた街……いや、天界の遺構に間違いない。壁も床も大理石。そして所々、神術で動いていたであろう照明機器が見受けられたからだ。ルナリートはこの場所に天界を融合させた。それは、かつてこの場所には獄界への道があり、それを完璧に塞ぐ為だったのだろう。

僕は、S・U・Nの光を浴びて爽やかな風を受けながら歩き、そう考えていた。

「何て居心地の良い世界なんだ」

視界は光に満ち、微風が髪を撫でる。細波が舐し、鳥が歌う。その風景に暫く身を委ねそうになったが、そんな場合じゃない！

「この美しい世界を魔の楽園にする為に、ルナリートを倒す！」

自分に強く言い聞かせる為に、剣を握り締めてそう叫んだ。

その後、僕はまず『人間』を全て眠らせる事にし、広範囲に眠りを齎す獄界の植物を召喚した。ルナリートは人間の為に力を発揮する。かつて獄界に来た時は、フィーンネというたった一人の人間の為に魔を薙ぎ倒し、僕を倒し、そして父の影さえも破った程だ……だから、人間は死なせないように眠らせるのが戦いの邪魔にもならず都合が良いと考えたのだ。

この時はまだ知らなかった。

自分の選択した道が招く未来を。呼び寄せる『存在』を……

その『存在』は、『歴史の闇』に葬られ記憶にも封印がされてきた。

ルナリート、そして僕は今までのエファロード、エファサタンとは全く違う選択をした。

自分の信じる未来の為に生きるという選択を……先代まで脈々と継がれてきた生き方を放棄す

る選択を……  
その代償が『存在』だったのだ。人にも魔にも、生物にさえも属さない『存在』……  
僕は理解した。ルナリート達が信じるThe Heart of Eternityを。僕も信じよう……僕を愛して待つ者の為に。

『Luna』……星が終焉に向かう中よ

僕は自分が生きる意味を理解して戦わなければならないんだ。

### 第三節 衝突する光と闇

聖域の中で立ち竦む私達に、フィアレスは語った。兄さんとの戦いで、殆ど動く事も出来なかった事。先代獄王の死……そして力と記憶の継承。私を倒し、この世界を奪うという結論……！！

「これ以上、話す必要は無いよね」

フィアレスは一筋の光すらも反射しない魔剣を私に向けた。

「ああ。私達が今すべき事は」

己を真とする為に戦う事だ！

「ガキイイイ……ン！」

その瞬間、剣と剣が眩い火花を散らした！

「（お前が、もし兄さんに致命傷を負わせていなければ……兄さんは死ななかつたかもしれない！獄界への道を封鎖するエネルギーを消耗しても……生きていたかもしれない！）」

「（そうかもしれないね。でも、少なくともハルメス・ジ・エファロードはこうなる事を解っていた。命懸けの戦いにおいて、『もし』という言葉は存在しない！在るのは、強い力と意思を持つ者のみが生き残るという結果だけだ。僕も胸を貫かれて死の淵を彷徨い、獄王を継承するまでは、指先一つ動かすのが死の苦しみに等しかった。）」

互いに意識を転送しながら、無数の刃を繰り出す！その攻防の衝撃だけで、聖域の建造物が消し飛んでいく。この衝撃を受ければ、一番力の弱いリルフィにとっては致命傷となるだろう。

「（シエルフィア、リルフィを連れて離れる！ずっと傍にいる約束はしたけど、リルフィには危険過ぎる！）」

「（わかったわ！リルフィを安全な場所に連れて行ったら、いつでも加勢できるようにしておくから！）」

私は頷いた。そこに間髪入れず鋭い刃が私を両断しようと襲い来る！

「バキイイ……ン！」

咄嗟に防御はしたが、オリハルコンの剣が魔剣に押し負けている！刃に細かな亀裂が走った！

「（エファロードともあろう者が、自分の責務を放棄して独善的な幸せの為に生きるなんてね！）」

フィアレスが漆黒の翼を広げて空に舞い上がる！

「（ならば、此処にいるお前はどうかんだ！？獄界の維持、深獄の封印、魂への干渉はどうなる！？）」

私もそれを追って飛び立った！

「（僕は君と違って、獄界を放棄などしてはいない！この世界を手に入れて、魔の住む理想郷にすれば良いだけの話だ！深獄の封印は、今は最低限やっている。君を倒したら、本気でやるさ！）」

「ゴオオオオ」

意識の遣り取りの間に、空間が消失する程、高エネルギーの炎が交錯する！

「魂への干渉は、私と同じく必要ないと考えたみたいだな」

「愚問だね」



私は理解した。私と表裏一体の存在……ファイアレス・ジ・エファサタンは、私と同じく自分の信じる道を切り開く覚悟を持っている事。その為には、自分の命を懸ける事も厭わない事。そして……やはり二つの存在は、相容れない事！

「ロード、サタンが築き上げた歴史を破壊し、混沌を生み出したルナリートに死を」

その瞬間……！空を暗雲が覆い、海が黒に染まる！そして……

「ゴゴゴゴ……」

黒い稲光がファイアレスに集り……闇物質の鎧に更なる力が漲る！それは、私……否、俺が獄界で会った先代獄王の影を遙かに凌ぐ力だ。

「その姿……エファサタンが戦いへのみ力を注ぐ完全なる戦闘態勢。久方振りだな。ルナリートでは無い、遠い記憶の中でさえそれを見たのはごく僅かだ。だが……俺は、お前に負ける訳にはいかない。この世界は大切な者の犠牲で築かれた！俺には、愛する者を守る義務がある！」

「シュウウウウ」

俺の体を禁断神術『滅』で覆う！これは、外部からの攻撃を無効化するエファロードの鎧だ。そして、この鎧の表出はエファロードとしての力の完全解放を意味する。

「それは滅鎧……それでこそ僕の対称となる存在だ。そして、今こそサタンとロード……どちらが正しいか証明する時だ！」

俺の意識、ファイアレスの意識にもロード、サタンとしての本能が駆け巡る！

長らく待ち侘びた戦いだ。俺（僕）を失望させるなよ！

「始まりの神術……『光（sunlight）』！」

「終わりの魔術……『闇海（darksea）』！」

最初から手加減などしない！相手が本気の状態で、手加減などしたら瞬時に命を落とすからだ。

「キュイイイイ」

「ゴゴゴゴオオ」

物質の存在を許さない程の光熱が空を覆い、星を細かに振動させる！同時に闇の波動が海を変質させ、宇宙空間まで届く程の波となり俺の前に立ちはだかる！

ロードが勝つ！

サタンが勝つ！

その瞬間！光と闇が衝突した！光は闇の海を貫き、消滅させる！そして、逆に闇の海は光を飲み込む！

「（相変わらず凄まじい闇エネルギーだな！）」

「（ふん、そっちこそなかなかやるね！）」

そして……！

「ガキイーン」

激しく剣がぶつかる！俺達は光と闇海を発動させながら、同時に『転送』を行い剣を振るったのだ！

「考える事は同じだね……！でも、そんな剣で僕に勝てるとも思っているのか！？」

「キキキキッ！」

確かにファイアレスの言う通りだ……！俺の剣は、オリハルコンの剣……魔剣相手では荷が重い……！力を継承したロード、サタンが全力で振るう事が出来る剣は、神剣、魔剣だけなのだ！

剣に力を集中する俺達は、光と闇海の発動を停止した。

「ゴオオオオ」

その瞬間、空を覆う光熱は消え……天に突き刺さるかのように盛り上がった海は力を失い、巨大な滝となってあるべき場所へ落ちていった！

「これでどうだ！」

「ギイインッ……！」

ファイアレスの渾身の力を乗せた剣が、俺の頭に振り下ろされる！俺は咄嗟に剣先と柄を両手で持ちそれを防いだ！

「クッ」

腕が痺れ、剣には再び亀裂が走った。このままでは、剣が折れてしまうだろう。だが神剣が無い今、俺はこの剣で戦うしかない！

「キンッ！」

「ガキンッ！」

「ブシュッ」

絶え間無く続く刃の応酬！

「キユイイイ」

「ゴゴゴゴオオオ」

瞬きすら許されない程、高速で強力な術の発動……！剣と術での攻防で、空は割れて海は干上がっていく……！俺達が戦っている空間はエネルギーの衝突で超高熱を発生していた！そんな戦闘の中で、致命傷には至らないながらも傷は際限無く増加していく……！

そして、星を激しく揺さぶる程のエネルギーを集約してファイアレスが叫んだ！

「平和呆けで弱体化していると思っていたのに上出来だよ！でも……これで終わりだ！」

突如辺りが一寸の光も通さぬ闇になったかと思うと、その闇が奴の剣に吸収されていく……！

……！

「完全なる闇剣か」

終わりの魔術『闇海』のエネルギーを剣に注ぎ込み、それを一閃にして放つ究極の剣技だ。

これに対抗するには、神剣に『光』を込めて放つしかないが今はそれが出来ない。だからと言って、オリハルコンの剣に『光』を込めればその瞬間に粉々に砕け散るだろう。ならば……！

「始まりの神術『光』で剣を保護し、その保護膜上に『光』を込める！」

勝負は一閃で決まる。俺達は互いに間合いを取り、剣に意識を集中させた！

「キイイイイイ」

「シュウウウウウ」

神であるエファロード、獄王であるエファサタン……二つの生命が意思を持ち始めた時から続いてきた戦い。幾度と無く衝突し、何度世代が交替しても変わる事の無い思い。己を真とし、相対する者を偽とする証明の為に争ってきた。今まで小競り合いは幾度もあったが、力を解き放たれた状態で相手を全力で滅する為に戦うのは星が三界に分かれた20億年前以来だ。今こそ、長き戦いに終止符を打つ……！

「光剣！」

「闇剣！」

「ピカッ」

音速を超えた光速の一閃が交叉する！

「ドゴオオオ……ン！」

光と闇の一閃が交叉する波動で、結界が張られた聖域を除く、半径数キロに渡る全ての物質が消し飛んだ！否、視界から全てが消えたと言っていないだろう。

「（一体どうなった！？）」

自分に何が起きたか理解するより前に、先に意識が脳を駆け巡る。

「ブシュウウ」

そうか……闇剣が滅鎧を貫通して、腹部に到達したのか……内臓にも損傷がありそうだ。血が止まらない。

「バキンッ」

俺の視界が歪んで行く中……ファイアレスの鎧が砕けるのが見えた。

「ははっ……！鎧は砕かれたけど、僕の勝ちみたいだね」

勝利に歓喜するファイアレス、だが……

「ブシャアアア」  
先刻の一閃で、かつて兄さんから受けた胸の傷にクロスするように新たな傷がつき、そこから勢い良く鮮血が噴き出ていた。  
「……僕も無傷ではいられなかったって事か」

深手を負った俺達は、共に聖域へと落ちて行く……  
だが、起き上がり先に剣を取った方が『真』となるのは間違いないだろう。

「大切なもの」

「ザァー」

「ルナさん、ルナさんっ！」

消し飛んだ空間に流れ込む波の音と、シエルファイアの呼ぶ声が聞こえる。

俺、私が意識を失って、ずっと呼びかける声……。この感覚、懐かしいな……

「うっ」

私はゆつくりと瞼を開いた。途端に、涙を流しながら治癒の神術を使い続ける妻の顔が目に入った。

「ルナさーん」

「パパッ！」

「ルルファイ……安全な場所に離れたんじゃないか？それより……」

「痛いって」

二人が力強く私を抱き締めるから、傷を負った私には痛かった。勿論、それだけ想われているから嬉しいのだが。

「あっ……ごめんね！」

母娘は照れくさそうに私を抱き締める力を弱めた。

それはそうと、二人が此処にいるという事は、ファイアレスはまだ立ち上がっていないという事だ。奴はまだ死んではないだろう。だが、先に目覚めた私の勝ちだ！そして、私は立ち上がった。だが……！

「グッ」

激痛で立ち続ける事が出来ない！シエルファイアの強力な神術で出血は止まっているものの、内臓の損傷は完治していないようだ。

「パパ！無理したらダメよ！」

「そうよ！ちゃんと治すから、暫く安静にして！」

こうして、再び私の治療が始まった。

目を閉じて、どれぐらいの時間が経っただろう？体が修復されていく心地良さで眠りに落ちようとした時だった！

「これで、ロードも終わりだね」

先刻受けた傷が塞がり、魔剣を携えて近寄るファイアレス……！奴は迸る力に包まれ、剣の一本振りで今の私を殺せそうだ……！

「そうはさせないわ！」

突如叫ぶシエルファイア！私から離れ、精神力を集中している！

「転生して力を得たとはいえ、エファサタンの力に勝てると思ってるの？」

「連続……『滅』！」

数十m程度の小規模な滅が数十箇所が発生し、それが全てファイアレスに炸裂する！

「シューウウウ」

挟まれた空間の後には……！？

「その力は最早人間の域じゃないね。力を継承したロード、サタンには及ばないけど大したものだ」

殆ど無傷のファイアレスが立っていた！滅を受けた体の表面は一部損傷しているようだが……

「近寄らないで！」

「パパを傷付けないで！」

二人はフィアレスの行く手を阻むように私の前に立った！このままでは……！？

「邪魔だよ」

「ヒュッ！」

フィアレスの剣が二人に襲いかかる！

「キィッ……ン！」

私……俺は痛みも忘れ立ち上がり、フィアレスの剣を瞬時に防いだ。

「俺の大切な人に剣を向けるとはいいい度胸だな」

「さっきよりも力が上がったね……！愛を命題に生まれたエファロードの為せる業か」

俺の中から更に力が爆発し、内臓の傷さえ塞がるのを感じた！フィアレスを倒さなければ、人間界は魔の楽園となる！人間は全て殺されるか、そうでなくとも数え切れない犠牲者が出るのは間違い無い。

何より……俺が負ければ、シエルフィア、リルフィを守れない！

「ルナさんっ！私、援護するから安心して戦ってね！」

「パパ！私も応援するっ！」

二人が力強くそう叫ぶと、俺の体に更なる力が漲った！二人の力が転送により注ぎこまれていくのだ。

「ああ、絶対に勝つ！」

「絶対か。僕も見縊られたものだね！」

「キキキィ……ン！」

神の動体視力を以って、辛うじて見える程の高速斬撃！俺達は瞬きすらしないまま、空へと再び舞い上がった！

「この世界をお前に渡す訳にはいかない！」

俺に宿る力と、言葉を剣に乗せて放つ！

「ザシュッ」

右上から振り下ろされた刃はフィアレスの左頬を裂いた！

「うぐっ……！星の統治者は二人も要らない！僕だけで十分だ！」

剣を振り下ろした俺の肩を目掛けて奴が剣を突き立てる！

「ザクッ」

右肩に剣が刺さり、鈍い痛みが広がる！

「ルナさんっ！」

俺の窮地に、シエルフィアは叫びながらフィアレスに対して究極神術『不動』と『魂碎断』を発動させた！

「ゴゴゴゴ」

二つの神術がフィアレスを包む！しかし、この程度の神術ならダメージは無いだろう。

これは、奴の隙を作る為だ！

「ブシュッ！」

突き立てられた剣を抜き、俺は間合いを取る。そして……！！

「始まりの神術『光』！」

「カツ」

瞬間的に発動させた『光』は通常よりも威力が劣るが、それでも奴を含む空間数百メートルが破壊の光熱に包まれた！

「倒したか」

刹那の静寂が辺りを包みこむ。そして、消し飛んだ空間を補うように、周りの大気が急速で流れ込んだ。

「今のは危なかった。もう少し、光が強力だったら僕は消えていただろう」

「流石は獄王だな」

フィアレスは、先刻の光を受けた瞬間に自分の体を高密度の闇海で覆っていた。光はそれを貫き、奴の左腕を溶かしたが致命傷にはならなかったようだ。

「はあ……はあ……。腕の一本ぐらいはすぐに修復出来るけど、君の妻と娘は厄介だね」



その言葉の直後、奴は俺の目の前から消えた！一体！？

「キヤアアア」

「ママー」

この叫び……シエルフィア、リルフィ！

視線の先で、フィアレスの刃がシエルフィアの首筋に突き立てられていた！

「貴様！」

俺は即座に自分を奴の前に転送した！

「ルナさんっ……私は大丈夫」

首から血を流して苦しそうな顔をしながら、愛する人は俺の目を見つめた。

「この女……サタンのみか使える『闇海』で身を守るとは……。僕の剣を途中で止められたよ」

「黙れ！」

「ガキイーン！」

俺は抑えられない怒りを込めてフィアレスを弾き飛ばした！

「ママッ！」

すぐにリルフィがシエルフィアに駆け寄る。そして、無意識に『治癒』の神術を使い始めた！

「ママ！わたしが治すからね！」

「うん、ごめんね」

寄りそう母と娘……。俺が世界で一番……。自分自身よりも大切な家族。これ以上、傷付ける事は許さない！

「（フィアレス……今こそサタンの終焉の時だ！）」

「（ふんっ……戯言を。歴史から消えるのはロードの末裔ルナリートだ！）」

俺達は空高く舞い上がり、互いに必要な間合いを取った！

俺は愛する者を守る為に。フィアレスは己の信念を貫く為に剣に力を込める！

「キュイイイイイイ……」

「ゴゴゴゴオオオオ」

光を吸収する剣と、闇を吸収する剣……。一振りでも目の前の物全てを破壊し尽くす程の力を内包した剣……！

「うおおおお」

体の奥底……精神の中枢から力を絞り、剣に注ぎ込む……！

「行くぞフィアレス！」

「（キュア……。僕が創る新しい世界を見せる為にも）必ず勝つ！」

「カッ！」

先刻よりも高速で強力な究極の剣撃が放たれる！

「キイイイ……ンッ！」

光剣と闇剣は衝突した！その瞬間から目に映る海、空が激しく振動を始める！先程元の姿に戻ったばかりの海と空は再び消滅を開始したのだ！

「ゴゴゴゴ」

光と闇が、互いを消し去ろうと勢いを強める！

「バチバチッ！」

俺とフィアレスが衝突しているこの空間に流れ込む物質は瞬時に形状を保てずに崩壊していく！

「キキキキイイ」

俺の剣と奴の剣のエネルギーは同等……。少しでも力負けした方が相手のエネルギーに飲み込まれるだろう！

「グッ……！例えこの身が朽ち果てようと……愛する者を守る為に」

「グオオオ……！僕が創る理想郷で……魔は光を浴びて幸せに暮らすんだ！」

「始まりの神術『光』！」

「終わりの魔術『闇海』！」

『光』、『闇海』の連続使用……！それは、自分の生命力、精神力を著しく消耗する！

だが、そんな事は関係無い！愛する者を失う事は、死を越える苦しみだと知っているからだ！

「カツ！」

「キュイイイ」

光剣と闇剣の力が共に増幅する！

血が熱い……。沸騰しているんじゃないだろうか？これ以上力を使えば、肉体が塵になってしまふんじゃないか？

苦しい……。心身共に焼けるような痛みに襲われている。

「ピキキキイイイ」

尚も力は対等のままだ。1%の優劣も無い！このまま力の放出が続けば、互いに消滅する！その時だった！

「（わたしはエファロードの血を引く者。相対するサタンへ、始まりの神術『光』を！）」

リルフィの心の声……！！？まさか！

「ピカツ」

「ブシュッ」

何が起こった！？

「うわあああ」

訝する叫び声！フィアレスの声だ！

その直後、闇の力は弱まり光が完全に闇を打ち消した！

闇を光が飲み込む瞬間、俺は確かに見た。リルフィが放った鋭い光線がフィアレスの右胸を貫いているのを……！

〜死闘の果てに〜

「ゴホッ……うう」

聖域の石畳の上で血を流し横たわるフィアレス。どうやらリルフィの攻撃を受けた後、転送で俺の攻撃の直撃は免れたようだが傷は決して浅くなかったようだ。

だが、獄王としての力を全て受け継いだ者は胸を貫かれても時間の経過で回復する。俺がこの世界の完全なる平和を手に入れる為には、今此処でフィアレスの命を断たなければならない。

俺は、先程の戦いで消耗し今にも折れそうなオリハルコンの剣を、奴の喉に突きつけた。

「サタンはこれで終わりだな」

「……君の娘にやられたよ。そんな歳で……『光』まで使うとはね」

神と獄王……。エファロードとエファサタンがこの星に誕生して65億年……。永遠に近い程の長き歴史が、俺の一振りりで幕を閉じる。

何故かそう思うと、俺の目から止め処無く涙が溢れた。孤独な神と獄王……。互いに競い合い、戦い、認め合った唯一の存在。

光と闇、相反する者が存在する事で自分の存在を確認出来た。自分が何を一番大切にすべきかは理解している。その為には、俺がここで剣を振るわなければならない事も。だが……。どうしても、腕を動かす事が出来ないのだ！

「ゲホッ……！君は甘いね……。僕を殺すには今しかないんだよ」

「わかってる！すまない！」

俺は目を瞑り、剣を強く握り締めた！血が滲む程強く……。これで終わりだ。

「ルナさん止めて！」

二人の叫びが俺の決意を凍らせる。何故だ？

「ルナさんは戦いに勝った。でも……。殺さなくても、他に方法がある筈よ！」

「パパ……。獄王を殺せば、獄界の魔は怒り……。必ず報復に来る。そうなれば、もつともつと多くの血が流れる事になるわ！人間、魔のどちらかが滅びる事になるかもしれない！」

そうか……。

俺は神の血を引く者として、また、この世界の守護者として敵であるフィアレスを殺す選択しか見えていなかった。冷静にならなければ……。

最良の方法は、フィアレスを生かして人間界の不可侵を約束させる事なんだ。獄界は統治者を失えば迷走する。

「……はは、君達は本当に甘いよ。僕は人間界を奪いに来たというのに」

嘲笑しながらもフィアレスは口元から血を噴き出す……

「お前は殺さない。だから、人間界への侵攻を今後一切行わないと今此処で誓え」

俺は再び剣を握る力を強めた。

「……断る。それを認めれば、僕は僕としての存在意味を失う。即ち、獄王だけでなく獄界全ての敗北を認めるという事になるからだ。だから、君が取るべき一番賢明な方法は僕をこの場で抹殺する事なんだ。解るだろ？」

その通りだ。神と獄王の意思が薄弱なら、否、柔軟だったら長きに渡って争う事も無かった筈だ。

しかし、リルフィの言う事も正しい……。憎しみからは憎しみしか生まれず、それによって数え切れない犠牲が払われる事だろう。

最良の選択は……

「自分自身と獄界の敗北を認める事が、死よりも難しい事ならば……。お前が納得出来る形で出直して来い。次の戦いでは互いの『界』が万全の態勢で臨み、敗者が勝者に従う。それならば、勝敗は神と獄王の独断に委ねられる事は無くなり、真に強き者が証明されるだろう」

此処でフィアレスを殺しても殺さなくても、全面戦争は避けられない。奴の固い意思を秘めた目を見ると、それを確信せざるを得なかった。

フィアレスを殺せば、獄界は激しい憎しみで人間界を襲うだろう。全ての魔が自分の命すら顧みない程の力を発揮すれば、俺が張った結界は破られる。そんな中で人間界を守る為には、魔を殲滅するしか無いのは明らかだ。

だがフィアレスを生かした場合、トップであるフィアレスを魔の目の前で倒し、人間達が魔に対して優勢である事を認識させれば、敗北を認めさせる事が出来る。

「……いいだろう。今日から丁度『半年後』、僕は精鋭を連れて再び現れる。ゴホッ……。僕に止めを刺さなかった事……。必ず後悔させてやる！」

胸を貫かれ、一振りで自分を殺す事が出来る刃を眼前にしても、気高き信念が刻まれた表情は変わらない。

「半年後、俺は今度こそお前の信念を砕く！」

「次に会う時こそが、真なるエファサタン誕生の日だ！」

その叫びと共に、ファイアレスは獄界へと戻った。

暫しの静寂の後に、髪を撫でる穏やかな風が吹いた。その瞬間、『俺』は『私』に戻る。

一気に力が抜けた……。背中の翼が消え、髪が銀からいつもの紅に戻る。

「ルナさんっ！」

「パパあ！」

私の愛する妻と娘が心配そうに抱き付いてくる。私は二人の髪をそつと撫でながらも、疲労で今すぐ眠りそうだ。

「心配しなくても、私は大丈夫だよ。だから、今はちよつとだけ眠らせてくれ」

私はそう言うと、シエルファイアの膝に頭を寄せた。

次に目覚めたら、獄界の植物を切り倒して世界中の人間を目覚めさせる。その次は、半年後に備えなければ。

シエルファイアもリルフィも良くやってくれた。まさか、リルフィがあれ程の力を發揮するとは……。

「おやすみ」

私の意識が眠りに溶けて行く中、澄んだ優しい声で二人は私にそう言った。

#### 第四節 目覚めと約束

「ただいま！」

私達は、心配するセルフアス達の所へと戻ってきた。そこには、先程まで居なかったノレッジと恋人のレンダーの姿も在る。

彼は、戦いの衝撃の大きさを感じ取り、眠っているレンダーを連れて駆けつけたのだろう。本来ならノレッジはリウオルを離れるべきでは無いが、緊急事態だから仕方ないと言える。

「まずは、何が起こったかを説明しよう」

私はそう切り出した。シエルファイアとリルフィの説明も交えながら、簡潔に事実を皆に伝える。

動揺が走った。獄王ファイアレスが、この世界に現れた事。そして、壮絶な戦いの末に半年後を約束せざるを得なかった事に対してだ。暫しの沈黙の後、デイクト達学者が口を開く。

「……我々人間は、10年前戦わずして平和を享受出来ました」

「先代皇帝と、リバレス様の尊い犠牲によって」

「私達はいつでも戦う覚悟は出来ています。武器の研究と進歩に尽力してきたのは、いざという時に平和を守る為です」

そうだ。10年前私とシエルファイア、兄さんとリバレスで天界との戦いを決意した時、人間達も戦う覚悟は出来ていた。兄さんが獄界からの侵攻を一人で完全に防いだ為、人間は戦う必要が無かったのだ。

「すまない、それが最も血を流さずに済む方法だったんだ」

私が申し訳無さそうにそう言うと、セルフアスが力強く私の肩を叩く。

「気にすんなって！半年後、お前がもう一度獄王に勝って、俺達も魔の大群を倒す。それで済むさ」

「そうですね、ルナリート君。人間界には、強い結束と高い科学技術があります。昔のように、人間が一方的に魔からの攻撃を受ける事は無いでしょう」

「そうだな、決めた事を悩んでも仕方が無い。今の現実を見据えて、最善の策を講じるだけだ。

「パパ、皆さん半年後の事より、今すぐに取り掛かるべき最も大切な事があります！」

声を上げるリルフィを皆が驚きの眼差しで見る。



「眠っている人々を早く起こさない！」

ハツとした。多分此処にいる全員が。

眠りの原因である獄界の植物は、さつき焼き払った。だが、レンダーも含め街の人間は一向に目覚めないようだ。

「その植物のサンプルはありませんか!？」

一人の学者が何かを閃いたらしい。その声には、学術的探究心から来る喜びが含まれていた。しかし、植物はもうこの世界に存在しない。どうするべきか……

「私がついているわ」

驚いた！私の妻と娘ながら恐ろしい……

植物のサンプルを持った学者は、研究室に走り去った。成分分析を行い特効薬を作らなければ、眠っている人間を目覚めさせる事は出来ない。だが、研究対象は闇エネルギーを内包した獄界の植物の為、化学的見地からだけではなく、神術、魔術を含めて総合的に解析しなければならぬだろう。

人間界で最高の頭脳を持つ面々が、夜を徹して眠りを呼ぶ植物の解析に集中した結果、二日後には特効薬が完成した。

更にそれは世界中に届き、各地で量産され、眠っている人々は次々と目覚める。全ての人間が目覚めるのに、一週間は必要無かった。

その連携の巧みさと強固な絆を見て私は、半年後人間が魔に屈する姿を想像する事は出来なかった。

くある夜く

全ての人々は眠りの淵から目覚め、起こった事実と半年後の現実を知った。

皆、最初は驚いていたが直ぐに手を取り合って戦う覚悟がある事を私に示す。

そして、私は二週間後に世界の要人を一堂に集め、来たるべき半年後に向けての会議を行う事を決めた。

そんなある日の夜だった。

「こんな夜は久しぶりね」

フィグルル城の屋上、天を埋め尽くす星明かりの下に私達家族3人は居る。夏の夜の涼しい風が頬を掠めた。

「そうだな、平和と安息を求めて戦った日々を思い出してしまう」

私とシェルフィアは、グラスに注がれたワインを一口飲んだ。そこでリルフィが話し始めた。「わたしが生まれる前、パパとママは戦っていた。皆が安心して暮らせる世界にする為に」

私達は黙って頷いた。星々の中央に浮かび上がる柔らかな月光を見つめながら。

200年以上も前から夢見続けた「現在」は、再び脅威に晒されている。掛け替えの無い大切な者を犠牲に築き上げられた「現在」が。

「わたし……争いが嫌い。同じ星で生まれて、同じように夢を抱いて生きているのに、どうして争わなければいけないの？信じるものが違うから？大切にしているものが違うから？」

リルフィの問いかけに、私は即答する事が出来なかった。そこで、穏やかな顔をしたシェルフィアが答える。

「リルフィ、私も同じ事を思うわ。ずっと、ずっと……。一番素晴らしいのは、人間も魔も仲良く暮らせる事よ。でも、そうなるにはとても長い時間がかかる」

シェルフィアはそこで一息ついた。彼女の考えは長年傍にいたので、良くわかる。続きは私が話そう。

「そうだよ、パパもファイアレスも頑固だ。そして、人間と魔もそれぞれに価値観を持っている。でも皆、多かれ少なかれ争いの無意味さには気付いている筈なんだ。それでも、上手くないかないのは」

「代々受け継がれた意思を変えるのは難しく、「理想の世界」というのは人間と魔で異なるから」

「そうだ。リルファイはよく解っている。エファロードとしての力を早くも発現させ、多くの本を読んできた彼女は」

「その通り。でも、パパ達はこの戦いを最後にするつもりだ」

隣のシエルファイアが強く頷く。

「どうやって？人間にも魔にとっても幸せな世界を創るの？」

「究極的には、人間も魔も分け隔て無く暮らせる世界を創る事。人間界、獄界なんて区別も必要の無い世界」

私達は同様の事を口にした。これが今すぐ実行出来たら如何に素晴らしい事か。

「それをファイアレス、獄界に理解してもらおう為に戦うんだ。否、ファイアレスは解っているだろう。解っているが、獄王として「人間界との融和」は認められないんだ。だから、半年後の戦いで私達が勝利して考えを認めさせるしかない」

リルファイは不安げに頷いた。

仮に私達がファイアレスと魔を打ち破り、「隔ての無い世界」の実現を目指すよう約束させるでしょう。しかし、その後が理想通りに行くかどうかは解らない。否、困難を極める事だろう。それを見越して、リルファイは安心する事が出来ないのだ。

「リルファイ、大丈夫よ」

その時、最愛の妻が娘の頭をそっと撫でる。娘は、母の穏やかで強い表情を見上げた。そして、母は語る。

「ずっと昔、ママが生まれ変わる前……世界に平和なんて無かった。でも、パパが空から降ってきて人間の為に戦ってくれた。そして、平和が訪れたの」

「(……私は、『人間の為に』ではなく『君の為に』戦ったんだ。それが結果として人間の為になっただけだ。)」

私は心の中で呟いた。

「パパもママも……リルファイの為なら、命だって惜しく無い。そして、心から愛する人の為なら幾らでも強くなれるのよ」

「そう、私達にとって一番大切なリルファイの為なら……リルファイが幸せに暮らせる世界を創る為なら、半年後、もっと未来の困難さえも乗り越える事が出来るんだ」

「そう言って、私は二人の肩を抱いた。この手で生涯、何度生まれ変わっても守らなければならない大事な二人を。」

「約束するよ。次の戦いを最後に、争いの無い世界を。この星に住む者が血を流さずに済む世界を」

「未来の幸せを皆が夢見て暮らせるようにね」

私達がそう言うと、リルファイは涙を浮かべて首元に抱き付いた。

「何処にも行かないでね。ずっと傍にいてね！わたしは、パパとママが居ないと生きていけない！」

不安で仕方無いのだろう。先日の戦いで、私は死と隣り合わせの戦いをした。リルファイはそれまで、生死を懸けた戦いを見た事が無かった。そして、半年後に再び大きな戦いがある。全員が無傷という訳にはいかない。

「大丈夫、ずっとずっと一緒にいるよ」

「ママがパパと『永遠』を約束したように、私達家族は『永遠』に離れないわ」

「そう言うと、リルファイの目に溜まった涙は勢い良く流れ落ちた。」

「うわぁーん……！わたし、怖かったの！パパとママが消えてしまうんじゃないかって！」

私達は彼女をギュッと抱き締めながら、髪と背中を撫で続ける。そしてふと見上げると、全てを見透かしているかのような、星を散りばめた天空が私達を包みこんでいた。

この夜は、リルファイが眠るまで3人でベッドで寄り添った。その後、私とシエルファイは夫婦用の寝室に移動する。

高く昇った月明かりが窓から射し込み、シエルファイの美しい顔を薄っすらと照らす。「ルナさん」

私達は強く抱き合い指を絡ませながら、悠久とも思える程長い時間口付けを交わした。「……何も心配いらさないよ。来年の今頃には、何事も無かったかのように暮らしてるさ」

彼女は私の胸に額を寄せる。私はそつと髪を撫でた。

「私も、あなたが傷付く所は見たくない」

母親としてシエルファイは強い自分を演じているが、彼女だって一人の女性だ。

「フィアレスと私の力はほぼ五角。強い心を持っている方が勝つだろう。でも、『永遠の心』を胸に刻んでいる私は負けないよ。傷は負うだろうけど、死なない。私には生きて帰るべき場所があるから。まだまだ幸せな未来を創っていきたいから」

彼女の額が更に深く胸に押し付けられる。

「……大好きだから、絶対に死なないで。何があっても、ルナさんの命を大切にしてくれ。私にはあなたが必要なの。勿論、リルファイにも」

シエルファイは私の手を強く握り、話を続ける。

「『永遠の心』で私達は離れないけど、次に生まれ変わる時はいつになるか解らないわ。私は生まれ変わって、普通の人間よりもずっと長い命を与えられた。でも、エファロードであるあなたよりはずっと短く儂い。だから、私の命の一秒一秒を全てあなたと過ごしたいの」

その通りだ。私の命は30万年は続くだろう。きっとその間にシエルファイは何度も生まれ変わる。否、もっと先になるかもしれない。

魂が不滅でも『永遠』の中で、一緒にいられる時間はごく僅かなんだ。

「……解った。自分の命を大切にする。愛してるよ、シエルファイ」

私がそう言うと、彼女はようやく顔を上げて微笑んだ。それを見た私も思わず笑みが零れて、唇に軽くキスをする。

そして、ベッドという狭い空間の中で二人、刹那と永遠を噛み締めながら深く愛し合った。

……その後夢の中で、全く知らない声が私に語りかける。

……ゆっくり近付いている。誰も予期せぬ時の奔流が。

## 第五節 未来を生きる為に

此処は、フィグリル中央学校の大講堂。今日から会議が終わるまで、学校は休みにしてある。大講堂以外は、世界各地から集まる代表者の宿舍として利用するからだ。集まった人間、元天使は数千人。実際に会議に参加するのは数百人だが、会議の終了後、意思の伝達をスムーズに、また迅速に行動が起こせるように主要な人物が集結している。

「それでは、皆様私ダイクト・リナンが今回の会議の司会を務めさせて頂きます」  
司会を頼んだダイクトは、教壇に立ち本日論議する内容を黒板に書いた。それは、次のようなものだ。

### 1. 理想と方針

2. 理想と方針に基づく具体的な対処
3. 半年間で為すべき事

たった三つだが、これらは深い内容を求められる。主要なテーマを三つに絞ったのだ。

「皆様、1. 理想と方針について論議致します。それでは最初に、皇帝の意見を伺いたいと思います。どうぞ」

デイクトに促され、私は教壇に立った。理想と方針については、私の中では決まっている。だが、その前に……

「皆、よく集まってくれた。論題に入る前に一言言わせて欲しい。既に承知の事だと思うが、今人間界は脅威に晒されている。10年前、我々が平和を勝ち取って以来の脅威だ。だが、私は知っている。聡明さと強固な結束力を兼ね備えた皆が協力すれば、どんな苦難も乗り越えられるという事を！」

私は、本題に入る前に皆の士気を上げる言葉を発した。講堂が熱気に溢れて来るのを感じる。「人間は、かつて天界から蔑視され、獄界からの侵攻を黙って耐え忍んでいた。だが今は、人間を軽んじる者など誰もいない。そして、何者にも脅かされる事は無くなった。この平和を……我々の未来、子供達の未来を守る為に、今こそ皆の力を私に貸して欲しい！」

「うおおお！」

歓声が上がった。皆、思いは一つだ。大切な者の為に戦う覚悟は出来ている。

「私が思う理想と方針を話そう」

皆が静まる。だが、瞳には熱き思いが宿ったままだ。

「理想は、二度と争いが起こらない平和な世界の実現だ」

講堂に居る者全てが一様に頷く。

「その理想の実現には二つ方法がある。一つは、獄王を含む獄界の者を根絶やしにする事。そして、もう一つが人間、魔にとって互いに理想と言える世界を創る事だ」

私は水を一口飲み、話を続ける。

「前者はほぼ不可能だろう。仮に可能だとしても、血塗られた歴史の上に築かれる世界が果たして平和だと言えるだろうか？ 私はそうは思わない。獄界の魔を根絶やしにするような戦いを繰り返せば、人間も絶滅に瀕する程の犠牲が出るだろう。生き残った人間が、血に染まった世界を見て平和だと言える筈も無いからだ」

一部の者が考え込む仕草を見せた。恐らく、それしか平和の道は無いと思っていたのだろう。

「後者の、人間と魔にとって理想の世界を創る事。これは非常に困難だが、真の意味で平和と言えるのはこの方法しか無い。率直に言おう。『人間と魔が区別無く共存する世界』だ」

私がそう言った瞬間、多くの者が立ち上がり首を振った。「無理だ！」という叫びも聞こえる。当然だ、10年前まで人間は魔に虐げられる日常を送っていたのだから。

「もう少し私の話を聞いてくれ。短い視点で考えて、それは不可能だろう。魔を憎む人間が多く居る事は承知している。また、魔も人間を滅ぼす事を最重要と考えているのも事実だ」

立ち上がった者も座っている者も私を訝しげな目で見ている。現時点では論理に矛盾があるからだ。

「だが、二度と争いが起こらないようにするには、争いの原因を断たねばならない。根本的な原因は、私と獄王フィアレス、人間と魔は相容れない事だ」

場が静まり返る。その事実誰もが認めざるを得ない事だからだ。暫くして、私は再び口を開いた。

「魂は……この星に生まれ来る魂に優劣は無い。神も獄王も、天使、人間、魔も。星に生きる者同士が争うのは次で最後にしたいんだ！」

一部から拍手が沸いた。だが、大多数は納得しないままだ。理論では理解出来ても、感情がそれを許さないのだろう。

「方針としては、半年後の戦いに必ず勝ち我々の理想をフィアレス、獄界に認めさせる。そして、その理想を実現させる為にこの星に生きる者全てが力を尽くす。その結果、少しずつ真の平和が訪れると思うんだ」



そこで、一人の人間が呟いた。

「もし負ければ」

「負けるというのは、私が死ぬという事を意味する。そうなれば、この世界は魔の物になるだろう。しかし、私は負けない。私には、永遠を約束した妻と子がいる。そして、大切な皆がいる。侵略だけを目的に来るフィアレスとは背負うものの大きさが違うからな」

立っていた者の殆どが座った。まだ納得出来ない者は更に厳しい視線を私に送る。

「私は、10年前に家族を魔に殺されました。それでも……皇帝の仰る通り、半年後に私達が勝利し、魔と争う事を止めて共存を考えて行動するとうましよう。しかし、魔が我々への憎しみを抑えられるとは思えません。再び危害を加えられると思うのです」

もつともな意見だ。だがそれは……

「それは、フィアレスに指導させる。獄王の指示は絶対だ。最初は、互いの憎しみが衝突する事はあると思う。それを抑えて、世界を正しい方向に導くのが私とフィアレスの責務なんだよ」

全員が座った。そして、一呼吸置いて私は剣を掲げて声を上げた。

「必ず勝利しよう！未来を生きる為に！生きる者は等しく幸せを享受出来るように！」

講堂が熱狂に包まれる。人間界の代表者達の同意を得られて良かった。だが、本当に大変なのは半年後からだ。

「皆様、皇帝の主旨に同意されたようなので次に進めたいと思います」

次は、理想と方針に基づく具体的な対処だ。

これには、先程私が言った事も含まれるので皆から次々と意見が出て、次のように決まった。

- ① 半年後、必ず勝つ事
- ② フィアレスには魔を統制する役割があるので、殺さずに敗北を認めさせる事
- ③ 魔を殺さない事。平和と共存を目指す上で、殺戮は憎しみを生む。しかし、身を守る上で止むを得ない場合はこの限りではない
- ④ 戦うのは成人した男性で、子供と老人を戦いに参加させない事。女性は無条件
- ⑤ 勝利後、獄王と協議して人間界の一部を獄界に譲る事。これは、共存への第一歩である

これらが、黒板に書き出されたのはもう夜中だった。議論が白熱し、時間を忘れていたのだ。朝から始まった会議は、ここで一旦中断して明日引き続き行う事となる。

この調子だと、もっと具体的に話し合わなければならぬ『半年間で為すべき事』はどれ程時間がかかるのだろうか？

各々が宿舎に向かう中、私達家族は城への帰路に就いた。三人で手を繋ぎ、真ん中のリルフィが私に言う。

「パパ、ありがとう。皆が幸せになる方法を考えてくれて！」

私は首を振って、繋いでいない手でリルフィの頭を撫でた。

「パパがこんな考えを持てたのは、リルフィとママのお陰だよ」

そう言うと、彼女はニッコリ微笑んだ。

今日は三人でグッスリ眠れそうだ。

翌日

翌日も朝から、会議が開催された。議題は『半年間で為すべき事』だ。

各街の代表、学者や科学者、市民らの意見が活発に飛び交う。結局、この日の内にはまとまらず三日間かけて策定を行った。主要なものを抜粋すれば下の通りだ。これを各街で行う事となる。

- ① 適切な武装の強化（専門家を派遣）
- ② 戦闘員となる者の訓練（元天使達が指揮する）
- ③ 防壁の強化と避難経路の確保、避難訓練

④ 世界規模の連絡網を作成し、街に住む者全てに知識を共有させる  
⑤ 魔の集中攻撃に遭った場合などに、他の街が支援する手段の確保（『転送』が込められた聖石を必要数私が作成）

⑥ 倒した魔を捕らえる手段の確保（『拘束』が込められた聖石を出来るだけ多く、シエルフィアとジュディアが作成）

⑦ これらの進捗を、毎週皇帝ルナリートに提出する事

⑧ これらが完了次第、皇帝ルナリートが街全体に魔除けの結界を張る事（人間は通過出来る結界）

参加者は、決定した内容を所持したノートに記した。

私は教壇に立ち、決意に満ち溢れた面々を見渡した。そして静寂の中、声を張り上げる。

「我々は、正しい未来を切り拓く為に生まれた！約束しよう。来年の今頃には、この星に生きる者が一つの崇高な目的の為に生きている事を！二度と……争いが起こらない事を！」

「わあああ」

今や講堂は、溢れんばかりの人間と元天使に埋め尽くされている。私の声を直に聞く為だ。

「半年後戦いの集結と共に、この星の生まれ変わりを記念して祝杯をあげようではないか！その時は、一人も欠ける事無く出席するようにな」

私は微笑んだ。皆が拳を力強く突き上げた。

「（明日からは忙しい日々が始まるな。）」

私は教壇を降りて、家族で帰路に就いた。

この日、瞬く星空に真紅の流れ星が直線を描いたのは印象的だった。

まるで、私達が存せぬ領域で何かの前触れを示唆しているかのよう……

## 第六節 此処にいるという奇蹟

会議終了から二週間が経過した。

晴れ渡る空の下、私はシエルフィアを抱えて世界を飛び回っている。人間界の現状をこの目で把握し、空から襲来するかもしれない魔の飛行ルートを予測する為だ。

飛行中どの街を通りかかっても、男は武器を用いた戦闘トレーニングを行い、女と老人は防壁と避難経路を懸命に造っている。そして、子供達は学校で勉学に励んでいるのが見える。

私が今すべき事は、全体の進捗管理と『転送』の聖石作成だ。それ以外には自分自身の鍛錬や、魔の飛行ルートを予測し、適切な迎撃方法を立案しなければならない。

「次はリウォルね」

高度数百mで私の腕に抱えられたシエルフィアが、柔らかな金の髪を風になびかせながら言った。

現在地はルトネック。200年前に魔の襲撃で滅んだが、現在では復興している。漁業が盛んな街だ。

「そうだな。ここからだ、南西に500kmある。近くまで『転送』で移動しよう。しっかりと掴まってるんだぞ！」

「うん。大丈夫よ」

「転送！」

言葉と共に、目の前の景色が塗り替えられる。瞬き一つ終わるとそこはもうリウォルの上空だった。

「あつ、見つかったみたいよ」  
シエルフィアが微笑んだ。

「本当だ。最近はずぐに見つかってしまいうな」  
私も笑顔でリウオルの街に視線を送った。人々は私達を見つけて、嬉しそうに手を振っている。

「皆さん、頑張っして下さいね！」

シエルフィアが私の分まで手を振る。私は両手で彼女を支えているから手は振れない。

「大丈夫です！順調です！」

そんな頼もしい声が返ってきた。リウオルはフィグリル皇国に続いて、世界第二の都市だ。そして、科学技術の中核であり、今回の戦いの武器製造を殆ど一手に請け負っている。

また、半年後に私が使用する剣の開発も依頼した。オリハルコンの剣では、エファロードの力を支える事が出来ない。ノレッジなら、もっと耐久力の高い剣を造り出してくれる。それを見込んでのことだ。

リウオルでも、戦闘トレーニング、防壁及び避難経路の構築が急ピッチで行われている。それは他の街と同じだが、驚いた事に、リウオルでは高射砲と大砲までが街の至る所に設置され始めている。

「ルナリート君！」

眼下でノレッジが手を振っていたので、私達は街へと降り立った。光の翼を消す暇も与えず、ノレッジは興奮気味に言った。

「剣の強度を増す術を見つけました！」

「本当か！それは有難い」

ノレッジに案内され、私達は研究所の一室に辿り着いた。

「レンダー、説明を頼みます」

「わかりました」

ノレッジと恋人レンダー。仲はとても良さそうだが、人前では敬語で話すようだ。それより、病気だったレンダーが完治し、ノレッジと共に仕事が出来ているというのは素晴らしい事だ。

「皇帝、私達はオリハルコンの剣を一旦超高熱で融解させました。そして、新たな剣の原型を造り出したのです。これをご覧下さい」

まだ、刃は研がれていないが純粋なオリハルコンで出来た剣だ。だが、柄と刀身の数箇所、一直線上に小さな孔が開いている。

「この孔に秘密を仕掛けるのか？」

私がそう言うと、ノレッジとレンダーは顔を見合わせた。似た者同士だ。その様子に、私とシエルフィアも顔を見合わせて笑った。同様に、ノレッジ達も笑い出す。暫く笑った後、レンダーは再び話し始めた。

「思わず笑ってしまい申し訳ありません！はい、そうです」

「そこに、聖石を埋め込むんですよ！」

二人の目が輝いた。成程……考えたな。

「強力な神術を込めた聖石を埋め込む事により、剣の強度が上がるという事だな」

「その通りです！でも、通常の聖石にはルナリート君の強力な神術を込める事は出来ません。」

『虹の輝水晶』から造られた聖石でない……。何処にあるかはわかりませんが」

虹の輝水晶……

人間界で現存するのは、あの場所だけだ。

輝水晶の遺跡、最深部……。フィーネが胸を貫かれ、兄さんが命を捧げた場所。

「存在する場所は知ってる。私一人で行くから、シエルフィアはここで待っていてくれ」

私が真剣な眼差しで三人を見つめると、場の空気が凍て付いた。

「大丈夫、心配しないで。私も行く」

覚悟を湛えた瞳でシエルフィアは言う。こうなったら仕方無い。二人で行くしかないだろう。

「一体何処へ？」

レンダーが申し訳なさそうに訊いた。

「……悲しみの聖地へ」

私はそれだけ告げると、シエルフィアと共に『転送』で遺跡に向かった。

「此処にいる」  
遺跡最深部へと向かう階段……。冷たい空気が流れている。輝水晶の微かな光以外には、一寸の光すら差し込まない遺跡だ。

神術で、内部を照らした時私は思わず声を上げた。

「血だ」

黒く変色した血の跡が、階段の中央を伝っていた。210年前、こんな跡は無かった。だがたった一人、その主が思い浮かぶ。

「……兄さん！」

「……ハルメス皇帝！」

10年前、こんなにも大量の血を流しながら兄さんは一人遺跡の最深部を目指した。自分の命を捧げて私達を守る為に……

210年前、フィーネがこの遺跡で命を落としてから遺跡には一度も足を運ばなかった。悲しみが余りに深かったからだ。

「……行こう」

私はそう言って、シエルファイアの手を引いた。私達の頬を涙が伝う。

今、二人が生きているという事にはどれだけ重い意味があるのか？それを考えながら歩を進める。

そして、最深部への階段を下り切った。

「心が張り裂けそうだ」

210年前、私の神術で抉れた壁。至る所に血の跡……。何より、痛ましい思いが鮮明に蘇る祭壇……！

「……ハルメス皇帝も、此処で亡くなった」

シエルファイアは、祭壇を直視している。

だが私は……激しく感情が揺さぶられて、早くこの場を抜け出したい思いに駆られる！

『『虹の輝水晶』の一部を取って、早く帰ろう！』

私がそう叫ぶと、シエルファイアは私の目を見据えて強い口調でこう言った。

「私は此処にいるわ。悲しまないで。皇帝も、魂は消えていない」

錯綜する思考が停止し、私はシエルファイアに手を引かれた。彼女が指差す方向を見ると、そこには……

「俺は、いつでも見守っている。魂は不滅だ。泣くな、弟よ」

血で書いた文字が、祭壇の端に残っていたのだ！死の淵に在りながらも、最後まで私の事を想っていてくれた！

泣くなど言われても、涙が止まらなかつた。

だが、意を決して涙を拭いた。すると、自然に言葉が零れた。

「……私は貴方に比べればまだまだ子供ですね」

悲しんでばかりいたら、前に進めないのだ。私は右手を力強く握った。

「フィーネはシエルファイアになり、私の傍にいる。兄さんも、不滅の魂で見守ってくれている」

私が祈るように発した言葉の後に、最愛の人も続ける。

「悲しむ必要は無い。此処は永遠が生まれた場所だから」

その通りだ。此処は永遠が始まった場所だ。シエルファイアは……フィーネは強い心の持ち主だ。それに何度助けられた事か。

「私がフィーネだった時の最後の言葉、『おやすみなさい、ルナさん大好き』。今はそれを毎日言える。そして、朝目覚めたらルナさんがおはようって言ってくれる。何も怖く無いわ」



仄かな輝水晶に照らされたシェルファイアの表情は温かい。悲しみも怖れも、彼女が傍にいてくれるだけで消えていく。

「ありがとう。シェルファイア、フィーネ、兄さん」

私は心から感謝の言葉を送った。そして、私は祭壇の一部を削り取り持参した袋に詰めた。後はこれを持ち帰るだけだ。

「ルナさん、寄りたい場所があるの」

「何処だい？」

私が訊くと、彼女は難しそうな顔をして答えた。

「フィーネのお墓よ」

「解った」

過去の自分の墓だ。不思議な感覚がするのは無理も無い。

島の西にある断崖。その上に、白い大理石で出来たフィーネの墓標はある。『永遠岬』、人々にはそう呼ばれている。

輝水晶の遺跡は立ち入り禁止だが、フィーネの墓標は人々に大切に保護されており、墓標には多くの花が捧げられていた。それだけでなく、周りをとり囲むように一面の花畑が広がっている。

この場所は聖地とされているが、私達が訪れた事は一度も無かった。

「此処に、フィーネの肉体が眠っているのね」

潤んだ目で私を見つめる。しゃがむシェルファイアの頭を優しく撫でて、私も腰を落とした。

「そうだよ。墓造ったのはリバレスだ」

私がそう言うと、シェルファイアは驚いた表情を見せた。

「リバレスさんが!？」

「ああ、私は悲しみの余りフィーネを冷たい土の中に眠らせる事が出来なかったんだ」

その言葉を聞いて、シェルファイアは手を合わせた。リバレスを想っただろう。私も彼女を想った。

彼女は今どうしてるだろう? 望み通り人間に生まれ変わったら、真っ先に見つけてやらないとな。でも、あいつはいつも目覚めるのが遅かったから、転生するのはまだ先のような気がする。

私達は祈りを捧げた。

フィーネ、リバレス、兄さん、そして父さんに……

その後、私達は誓いの言葉を立てる。

「私達は永遠の心を信じ……私達を愛してくれた、貴方達のお陰で此処にいます」

「此処にいるという奇蹟を決して忘れません。そして、愛するリルフィ、人間を守る事を誓います」

210年前と同じように岬は夕陽に包まれたが、あの時のような悲しみは一片も無い。

私達は強く手を握り合った。決して離れない魂を確かめるように。

長い時間口付けを交わした。魂の絆をより深く心に銘じる為に。

抗えぬ運命、時の奔流、終焉への狂奏……。

そんなものは関係無い。愛する者と、その未来を守る。

それが、私の存在する意味だ。

『Luna』……

永遠の心の為ならぬ。

## 第七節 深愛

此処は僕の宮殿。ルナリートとの戦いの後、僕は獄界に戻った。凱旋では無く、敗走……。そう思うと痛い、精神が……

「ポタッ……ポタッ」

貫かれた胸と、溶かされた左腕の付け根から止め処なく血が滴り落ちる。肉体の痛みも耐え難い……

血が足元に赤い水溜りを作り、僕は一步も動けず横になった。朦朧とする意識の中で、叫びに似た声が遠くから聞こえる。

「……ファイアレス様っ！どうして……！？お願いだからもう傷付かないで」

自分の体が僕の血に染まるのも意に介さず、キュアは僕の背骨が軋むぐらいに激しく抱き締めた。

「私は……私は……貴方様がこんなに傷付かなければならない世界なんて要らない！」

深い悲しみが彼女の美しい顔を歪ませている。そんな風にしたのは僕だ。だから……

「キュア……心配しなくて良いよ。次は……絶対勝っ」

それが獄王としての僕の意味だから。

「うう……。ファイアレス様あ……。私は、私には貴方が何よりも大切なんです！」

彼女には、世界よりも何よりも僕が大事か……。僕は……僕の心は……？考えが纏まらない。

「……キュア」

僕はそれだけを口に出し、完全に意識を失った。最後に見たのは、キュアの目から零れ落ちた涙の光だった。憎しみも苦しみも包み込むような穏やかで強い光……

〜結び合う魂〜

一日、一週間、一ヶ月……？一体僕はどの位眠っていただろう。左腕は……ほぼ修復している。胸は……痛むけど大丈夫だ。

「うっ」

目を開きベッドから起き上がろうとすると、声が漏れた。するとすぐに足音が僕の元に駆け寄る。

「ファイアレス様！良かった！」

足音の主はキュア。以前と同じように、僕をずっと看病してくれたのだろう。それにしても……

「キュア。僕の所為でごめん……。やつれたね」

僕が微笑むと、彼女は僕に背を向けた。肩が震えているのがはっきり解る。だが、暫くの沈黙の後、意を決したのか震えが止まった。

「……私は……貴方が元気になってくれるなら、何度だって看病します。でも貴方は……傷付いて、苦しんで……自分に課せられた重い責任の為だけに生きようとしています！」

何も言えない。その通りだからだ。

「……嫌なんです！このままじゃ、いつか貴方はこの世界から失われてしまう！……そうならば、私が生きる意味なんて無いわ！」

礼儀を重んじる普段の彼女じゃない。まるで、僕達が子供の頃のような遠慮の無い口調……。僕への思いが一杯で、溢れる感情が抑えられないんだ。

「ずっと、ずっと……私は貴方が……本当は誰よりも優しい心を持った貴方が」

彼女がそこまで言った時、僕は立ち上がり背中から包み込むようにそっと抱き締めていた。

「それ以上、言わなくていい」

僕は、はっきりそう言ってキュアの正面に向き直り再び抱き締めた。

「キュア、愛してるよ。だから、泣かないで」

「フィアレス様」

自分が言おうとした言葉を僕に言われて驚いたのだろう。

キュアは僕をこんなに想ってくれて、僕が苦しい時はいつも傍に居てくれた。僕は、獄王で皆に畏られる存在。孤独に、獄界の為に生涯を終えるべき存在。獄界の魔はそれを獄王として当然の事と受け止め、僕を一人の男として見る事は無い。

なのに、彼女は僕の願いと幸せを第一に考えてくれた！獄界よりも、自分自身よりも僕を想ってくれる。

まるで闇に射す一筋の光のように、彼女の心は僕を優しく……力強く包み込んだ。

僕もキュアが大切に仕方が無い。獄界の為……否、彼女と共に幸せに生きたい！

そう想った時、僕の口から自然と言葉が零れたのだ。そして……

「ん!？」

呆然とするキュアに僕は優しく口付けをした。彼女の顔が見る見るうちに朱に染まる。

嬉しい……こんなに心の中が一杯の幸せに満たされるのは生まれて初めてです」

「私も……ずっと貴方を、永遠に愛し続けます！」

今度は恋人となったキュアが、僕にキスをした。長く……そして、深く。

魂が絡み合い、結び付く。二つの異なる心が解けて一つのものとなるような感覚だ……

僕は独りじゃない。此処に……誰かに必要とされて生きている。それを深く実感出来た。

何と幸せな事だろう。確かに、僕達の心は一つになり此処に存在しているのだ。

「僕は考えを間違っていたんだね」

蕩ける程の甘い口付けの後、僕は囁いた。

「……えっ、何をですか？」

火照った顔が僕を見上げる。

「……強固な使命感を持つ僕は、安穩と暮らしているルナリートに負ける筈が無いと思っていた。それは誤りだ」

急に戦いの話を始めた僕を、彼女は不安気に見つめる。

「愛する者がいて、それを守る為なら……何処までも強くなれるんだ」

ルナリートがたった一人で獄界に乗り込み、僕達に屈する事が無かったのも、ヘルメスが人間界を守る為に自分の命を代償に出来たのも、「愛」する者を守るといふ、魂に刻まれた強固な思いがあったからだ。

「フィアレス様……私は」

彼女は、僕の胸に額を埋めた。同時に強く僕を抱き締める。僕を行かせたくないのだ。戦いが待つ人間界へ。

「キュアの気持ちは解る。僕も自分の心を理解した。だからこそ戦うんだ。僕達二人、そして獄界に「光」溢れる未来を創り出す為に！」

僕は生まれてから今までずっと、自分がエファサタンと言う事に囚われていた。自分が生きる意味は、獄王としての責務を果たす事であり、自由を求めたとしてもそれは、自己が獄王であるという認識の上での自由だった。

だが、今は違う。

愛する者を守り、幸せになるという不動の意思を持ち行動する結果が、獄界全体の幸せに繋がるのだ。今までのように、「重い責務」とは感じない。自分の意思で未来を切り拓く事が出来るという希望に溢れている。

「ルナリート、人間界と戦う」、それは変わらない。変わらないのに、愛という希望を知る事により心の芯の強さが増した。

「ならば、私も共に行きます！私の未来は貴方がいなければ何の意味も持たない。幸せな未来は、これから長い時間をかけて創るもの。その為に、私が出るのは貴方を守る事だから」  
幼馴染で、今まで幾度となく見てきたキュアの目。その目がこの言葉を発した時、最も強い光を帯びていた。

僕は言葉に出さずとも、共に生き共に死ぬ覚悟がある。そして、永遠の魂の結び付きを信じている。

僕がキュアの立場でも、同じ事を言うだろう。

「わかった。但し、僕の目の届かない所で独りで戦ったりしては駄目だよ」

その言葉に、彼女は深く頷く。

「僕は今から、獄界全体に今後の方針を伝えないとイケないね。そして、僕とキュアの結婚について……エファサタンが初めての配偶者を持つ事についても知って貰おう」

僕が微笑みながらそう言うと、キュアは再び頬を赤らめた。

「はいっ！」

ずっと守っていいこう。傍で微笑んでくれる彼女を。そして、永遠の幸せを創っていいこう。それが、一つの生命としての僕の意味だから。キュアのお陰で魂に刻まれた、温かく力に溢れた生きる意味だから。

半年間、

ルナリートとの約束の半年間、僕は忙しかった。

僕とキュアの婚姻の儀を執り行い、その後は獄界全体の戦力向上を図った。僕達が模範となり、皆自分の大切な者の為に戦う誓いを交わしたのだ。

必死だった。恋人の為、子供の為、死んでいった友の為……。皆それぞれに大切な者は違う。だが、平和で光溢れる未来を創る為には勝利する他に道は無い。半年後、僕達が負ければ未来永劫僕達の子孫は光を浴びて生きる事は無いだろう。

ルナリート達に負けを突き付け、人間界を僕達の世界にする。人間達は死にたくないなら、獄界に移り住めばいいだろう。光が届かず、闇の海と溶岩に囲まれた暗き世界に。

ルナリート、人間達が強い理由が解った今、僕達に負ける要素は無い。

「フィアレス様」

決戦前夜、僕とキュアは宮殿の屋上で薄紅く染まった暗黒の海を眺めていた。

「もういい加減、『様』は止してくれよ。僕は夫婦なんだ」

そう言って、僕は彼女の短めの黒髪を撫でる。この半年で、幾度撫でた事だろう？

「はい、でも幼馴染の頃から私は貴方を『フィアレス様』と呼んでいたから、なかなか直らなくて」

照れくさそうに笑った。その一つ一つの仕草が愛しい。

「まあいいや。先は長いんだし。ところで、何を言おうとしたの？」

僕が首を傾げると、彼女は無言で自分のお腹を優しく擦った。

「ううん、何でも無いわ。早く戦いが終わって、平和に暮らせる事を祈ってるだけ」

明日から熾烈な戦いが始まるというのに、彼女の顔には無限に零れ落ちる程の幸せが満ちていた。

この日も僕は、キュアと共に眠った。眠りというのは、全ての者が最も無防備になる時。そして、最も心が解き放たれる時。その時に、愛する者が傍で一緒に眠ってくれる。それは、この世界でようやく見つけた魂の安住の場所。飛び疲れた翼を休められる唯一の場所なんだ。これは、自分の命よりも尊い。

獄界に住む全ての者は、この夜を各々自由に過ごした。

この夜は二度と訪れない。大切な夜を、掛け替えの無い者と共に……

深夜、

獄界の全てが寝静まった深夜、僕はふと目を覚ました。全身にびっしょり汗を掻いて……



「ん……どうしたの？ 凄い汗!？」

僕の腕の中で眠っていたキュアが驚いて声を上げる。

「いや……何でも無いよ。起きたら戦いが始まる、だから緊張していたのかもしいない」

僕は、キュアに答えながらも焦点が定まっていなかった。長年の付き合いのキュアがそんな嘘に騙される筈も無い。

「フィアレス様、本当の事を言っていて……。隠し事をされるのは悲しいわ。貴方一人で背負う必要は無い、私がいるから」

彼女は僕の頭をそっと撫でた。少し安心して、僕はゆっくり話した。

「夢を見たんだ。恐ろしい夢を。最初に」

冷たい声が出た。感情の籠らない、唯冷たい声。そして言った。

「……生きる事に意味など無いでしょう。何も感じる必要はありません」

その後、僕は死んだ。僕だけじゃない！ その場に居た者全てだ！

キュアも、魔も……ルナリートも、人間も！

「……考え過ぎよ。私は此処にいるから。貴方は未来の為に気負い過ぎてる」

彼女はそう言って僕を抱き寄せた。すると、段々気分が和らいでいく……。僕が眠りに落ちるまで、彼女は僕の背中を擦り続けてくれた。

「愛してるよ」

僕達はこの夜、何度も何度も耳元で囁き合った。そして、生きている幸せを噛み締めた。

この瞬間の積み重ねを永遠だと信じて。

この時は、誰も知らなかった。深淵なる時の闇で激しく蠢く『存在』を……その『存在』が今、扉を開こうとしている事を……

ルナリート……抗えぬ運命を創り出したのは僕達だ。

だから、その運命を変えるのも僕達の役目。

死してもなお、消えない愛……信じてるよ。

永遠に君を守る為に……

『Luna』……

其処で心は悠久の時を超え、永遠を歌う。

## 第八節 歴史の闇

これは、決して語られぬ歴史……。そして、隠された真実である。

『存在』……。それは、全ての始まり。形容するならば、永劫の狂気。否……深淵なる久遠の闇。

光も物質も、時も……あらゆるものは其処から生まれた。

それまでは、何もかもが『無』であり、久遠の闇に光が射す事は無かった。

だが『存在』は静かに……内包する無限のエネルギーの胎動を堪えながら、動き出す『時』を確実に待っていた。

そして『時』が始まった。

100億年前……

『存在』に亀裂が入り、『光』と『物質』が止まっていた『時』を取り戻すかのような勢いで、また闇を拭い去る為に……何者も超越するスピードで無限に加速し『存在』から広がっていった。

その際限なく拡大する領域は留まる事を知らず、たった今でもそれは変わる事はない。『時』の始まりは此処からで、全ての『モノ』の原点が生み出される事となった。

Lunaへと続く道も同じように……

10億年後（90億年前）……

『存在』の一部である『モノ』は宇宙を形成し、その破片の物質は眩いばかりの星々になったが、まだ激しく熱を帯びており、物質は常に超高温の炎に覆われていた。

その炎は収まる事を知らず燃え盛り、星を包む空間をも焦がし、暗黒だった宇宙を照らし続けている。

まるで、暗闇を恐れるかのように唯、光と熱を放ち……悲しき『無』の世界を忘れる為に熱き炎をもって叫び続けているのだ。

拡大する宇宙の涯では、今も焔が消える事は無い。

そんな焔の一つに抱かれて、『惑星シエファ』も誕生した。

誕生したシエファもまた、『存在』の一部である事は言うまでも無い。

シエファは、原形を象るまでの20億年……真紅の大气に取り囲まれ、無数の星屑の隕石を呼び込み巨大化していった。

隕石は激しい悲鳴を上げてシエファに衝突し、シエファもそれに呼応するかのように灼熱の溶岩の涙を流してそれを受け止めた。

その繰り返しは、途方も無い時間続いたが、徐々に収束の方向に向かっていった。

30億年後（70億年前）……

シエファは誕生して20億年が経過し、厚い大気に覆われ表面温度を下げていった。

星には大地の原形が完成し、高温の液体……それでも海と呼ぶ事ができる広大な海原も完成した。

海は液体であったが、常に沸騰でポコポコと海面を揺らして蒸発し、それが雲となりまた雨が降る繰り返しだった。

そうして出来た空は、惑星シエファが属する銀河の中央に位置する高エネルギー体の星である『S. U. N』からのエネルギー放射を遮り、星の表面温度を下降させていく。

だが、この時点では無論生ける者が存在し得なかったのは言うまでも無い。しかし、この5億年後に奇跡は起こる。

35億年後（65億年前）……

時が満ち、今日まで続く世界の発端とも言える『運命』が始まった。

惑星が生まれてから25億年が経過し、強大な二つの生命体が誕生したのだ。

不毛の大地からは後に『神』と呼ばれる者が、暗黒の海からは後に『獄王』と呼ばれる者が同時に生まれた。

時に生まれた。

それは、奇跡には違い無いが、この星が出来る前から定められていた事なのかもしれない。

否、シエファという『存在』が『生命』を創り出す選択をしたからだ。

『神』は周りの物質を取り込みまた、『光』を放ちながら驚くべき速度で成長と突然変異を繰

り返し、やがては独自の意志を持つようにさえた。『獄王』も同じように、暗黒の海の成分を吸収していったが、『神』とは違い、『闇』を増幅させながら『神』にも匹敵する速度で進化し、やはり独自の意志を持ったのだ。意思を持つ二人は、自らに名を付けた。それが、『エファロード』と『エファサタン』である。

それでも、この時点では両者はお互いに干渉される事もなく『支配』などという知能まで発達させるには至らなかった。だが過剰な進化は、敵対を招くようになる。

80億年後(20億年前)……

神と獄王は究極ともいえる進化を遂げ、互いに異なる意志を持つようになった。その意志は支配欲も生み出し、対立は此処から始まることとなる。

世界は、神の支配する大地と獄王の支配する海とに分かれた。

星は温度を更に下げ、神と獄王以外の生命体も次々と誕生していく。大地には植物が生い茂り、海には多種多様な生物が生まれた。空は青く澄み渡り、海は美しく透明で空と同化するかのようだった。

だが、知能を持っていたのは神と獄王だけだった。神も獄王も、単体で子を作ることが可能で、誕生してからの45億年間、他の生物に全く干渉されず20000回にも及ぶ世代交代と突然変異で、他の生物を遥かに凌ぐ知能と力を身に付けていたのだった。

神と獄王は争った。

その波紋は大地を裂き、海を割り、犠牲となった生物が世界を血で染め上げた……

そして、数万年にも及ぶ戦いで神と獄王は力を削られ、その無意味さを知り争う事をやめた。その後、神と獄王は力のほぼ全てを用いて、星を……惑星シェファを3つの小惑星へと分割する。

小惑星はそれぞれ『天界』、『中界』、『獄界』と区分され、『天界』は神が、『獄界』は獄王が統治する事となる。『中界』は『天界』と『獄界』の中間に位置し、緩衝帯としての役割を持つ不可侵領域とした。

こうする事によって、神と獄王は距離を置き平和に更なる進化を遂げていく。

その後、『天界』に『天使』が、『獄界』に『魔』が生まれ、長らく平和が続いたのは歴史に残されている通りである。そう、神が獄界に断り無く『中界』に『人間』を多量に創り出す迄は。

歴史に残っていない事がある。

神、獄王……即ち、エファロードとエファサタンの『継承される記憶』の中でさえ封印されている事が。神と獄王。それが知能及び力に於いて究極の存在となり、争いを始めた時の事だ。

ある『魂』が、肉体を求めて地上に現れた。その魂は、穢れ無く……透き通る程に無垢だった。そして、内に秘めた力は神を……獄王をも凌ぐ。

何の為に現れたのか？

それも『存在』の選択である。星を破壊する程に力を付けてしまった二人を止める為の……だが、二人はその魂が生まれる事を赦さなかった。生まれてしまえば、自分達の完全支配が失われるからだ。

『魂』は、生まれる前に……意思を持つ事すら認められず、神と獄王の力で『深獄』に封じ込められる事となる。そして今日まで、『魂』は虚ろな空間の中で命ある者を呪いながら、永遠

にも等しい『封印』という重苦を受けているのだ。

封印された『魂』はこれ迄に、12を数える。

罪の無い魂を生まれる前に封印する事。しかもそれが、自分達の地位を不動にする為という赦されざる恣意。

その罪悪感に苛まれ、ロードとサタンは『魂の封印』に関する記憶を封じ、再び『魂』が現れる時にのみ記憶を呼び覚ますようにした。

そして、歴史を捻じ曲げた。

『深獄』は、神、獄王の力でも滅する事の出来ない、強大な『悪魂』を封印する場所。

悪魂は肉体を持ち、星の中で凄まじい力を奮い……生命を破滅させようと目論んだ。だから、深獄へ堕とされて当然の魂。それを倒した神と獄王は、長きに渡って賞賛を集め続ける。無論、罵倒を受ける事は無い。

これが、代々継がれる歴史となる。

だが運命の歯車は軋み、狂気を生み出す。

ファイアレスはルナリートに対抗する為、深獄へ注ぐ力を弱めた。神と獄王が、自らの役割を完全に果たす事によって、辛うじて保たれていた秩序が崩壊していく……

そう……封印されし、12の魂に動く隙を与えたのだ。

魂は、深獄を抜ける事は出来なかつたが、更に深く深く潜っていく。

そして今……永遠と思われた夢と悲願の果てに、

魂は星(シエファ)の中心で自分達を収める『器』を見つけたのである。

## 第九節 信念の戦い

「カラーン……カラーン！」

ファイアレスが去ってから半年後の、真冬の深夜……。突如鐘の音が激しく鳴り響いた！

この鐘は城の最上部にあり、聖域ロードガーデンに侵入者が現れた時に鳴るよう神術を施している。つまり、これは開戦の合図だ！

今日は家族三人で眠っていたが、皆すぐに飛び起きた。私は新しい剣を持ち、オリハルコンの鎧を着る。シエルファイアも剣を携える。そして、彼女とリルフィは、聖石が埋め込まれた防御力の高い服を纏った。

準備は整った！

私は、各街にいる代表者達に意思を転送する。

「皆、目を覚ましてくれ。ルナリートだ。たった今、ファイアレスと魔の襲来を感知した。これより、戦いが始まるだろう。平和な未来を勝ち取る為に、各自の力を存分に発揮してくれ！高い理想と強固な意思を持つ我々は、決して負ける事は無い！」

これで、世界は目を覚ました。

城下町から地鳴りのような群集の声が聞こえてくる。皆、先刻の鐘に音で既に目を覚まして家の外に出ているのだ。

私達は、テラスへ立った。剣を翳し、大きく息を吸い込む……

「今から、神と獄王……。人間と魔の最後の戦いが始まる。私達が勝利すれば、未来永劫の平



和がこの星に訪れるんだ。愛する者の為に……大切な者を守る為に、皆で力を合わせよう！」  
「うおおお！」

人々の顔がガス灯に照らされ、決意と力に漲っているのがはっきり解る。私達は安心して城を飛び立った。二人は空を飛べないが、今は神術で私の近くに固定しているので落下はしない。

私達は城の上空から、聖域の上空まで『転送』によって移動した。

「パパッ！」

リルファイが私に抱き付く。それもその筈だ……。眼下には、聖域を埋め尽くす程の魔の集団。十方は軽く超えるだろう。

「大丈夫だ。それに、一箇所に固まっているなら手っ取り早い」

「聖域全体の魔に『不動』の神術をかけようとした、その時……！」

「(君の考えなど、お見通しだよ。)」

脳裏にファイアレスの声が響き、聖域の中心に強い力が集約されるのを感じた。そして、獄王ファイアレスの声が訝する！

「行け！魔に、光溢れる未来を！」

「パァー……ン！」

聖域の結界が破られ、次の瞬間には全ての魔……否、一人を除いた魔が消えていた！

私は、目の前の情報を理解する為に、頭を全速力で回転させる！

「そうか……手強いな」

「そうね。向こうも、私達と同じ理由で戦おうとしている」

「シェルファイアは領きながらそう言った。リルファイも理解したようだ。」

「魔は、人間界の各地に転送されて……獄王は、傍に連れている女の魔の為に戦おうとしているのね」

今度は三人共頷いた。

「降りて来い、ルナリート」

ファイアレスが魔剣を突き出し、空にいる私に切っ先を向けた。

「ああ。望む所だ」

私達は結界が破れた聖域へと降り立った。

「剣を抜け、ルナリート。僕が『人間界』を否定してやる」

「迷い無き信念を湛えた表情。勝利を確信した目……。そして、隣に居る『妻』と思しき魔。

ファイアレスは、エファサタンの血に従って此処に来たのでは無い。私達と同じ理由で此処に立っているのだ。

最愛の者と創る未来の為。

生温い事は言っていられない。勝った者が、理想を実現させられる。それがたった一つの真理。

私は……否、俺は剣を抜き力を全て解放した。同時にシェルファイアも剣を抜き、俺の横に並ぶ。だが……

「私の名はキュア。妻として、ファイアレス様の身を守る！」

キュアと名乗る彼女は、背中に差した大振りの剣を抜いた。彼女は魔にしては、肌の色が薄く容姿も人間に近い。だが、感じられる力の密度は魔の中でも間違い無く最高クラスだ。剣が風を裂き、シェルファイアに向けられた。

「私をご指名なのね。いいわ。あなたに、ルナさんの邪魔をされる訳にはいかないから」

「シェルファイアとキュアが睨み合う。だが、シェルファイアが幾ら強いとは言え心配だ。」

「(シェルファイア……！)」

「(大丈夫。無理はしないから。ルナさんは、自分の戦いだけに集中して！)」

「(解った。リルファイは、ママのサポートを頼む！)」

「(うんっ！。パパもママも自分の命を大事にしてね！)」

「ガキッ！」

剣と剣がぶつかり合い、火花が散る！

この星でそれぞれの戦いの火蓋が切られた！

「ルナリート対ファイアレス」

「行くぞ、ファイアレス！」

「今回の僕は負ける気がしない！」

俺達は共に聖域から離れ、星の上空……雲の上まで上昇していた。戦いの余波で周りの者を傷付けない為だ。

眼下には雲と海、上空には一面の星空。最後の戦いの場に相応しいだろう。夜明けと共に、この星は生まれ変わる。俺達の勝利と共に！

「ゴゴゴゴ」

ファイアレスの体を闇物質で出来た鎧が包む。

「シューウ」

俺の体が『滅』で出来た鎧で包まれる。そして……！

「始まりの神術……『光 (sunlight)』！」

「終わりの魔術……『闇海 (dark sea)』！」

各々の剣が、この星で最も強力な神術と魔術を宿す。これで、一振り毎の破壊力に究極の術の力が加算される！

無論、術を発動させ続ける事による精神力の消耗は著しい。だが、命を賭して戦うべきは今ののだ！

「ギンツ」

一閃……！互いの剣が交わった！途轍もなく重い一撃……！

目の前で光と闇が弾け、次に音が聞こえ……最後に衝撃が走った。衝撃は、空間を捻じ曲げ雲を裂く。そしてその波動は、星の表面を細動させる！

「剣が生まれ変わったね……。凄い技術だ。エファロードの力を支える程の物を人間が造り出すなんて予想外だよ！」

「人間は無限の可能性を秘めている。此处で滅びるような事があってはならない！」  
互いに不敵な薄笑みを浮かべた。次の瞬間には激しい攻防が始まる事を理解しているからだ。

「フツ」

「キキキキーン！」

転送と、繰り返される鏝迫り合い……！力もスピードにも優劣は無い。最後まで強い精神力を持ち続けた方が勝つだろう！

だが、このまま消耗戦が続けば二人とも精神力を使い果たして死ぬ。一瞬で決めてやる！  
「ファイアレス……終わりだ」

その言葉で彼は一步退く。俺は精神力を一気に燃焼させる！

「『光』よ……！今こそ我に真なる力を与え給え！」

体が『光』に包まれる！更に剣が『光』そのものと化す！

肉体も精神も……光に溶けて無くなりそうだが、この攻撃が決まれば戦いは終わる！

「その姿！？光そのものだね……初めて見たよ。それがエファロードの最終形態！」

ファイアレスは少し驚いた口調でそう言うと、魔剣の柄を両手で握り先端を真下に向けた。何をやる気だ……？

「受けて立つよ。君が全ての力を此处で出し切るんだ。僕も……見せない訳にはいくまい！」  
音が消えた。そして、私の光に照らされていた彼の姿が漆黒に飲まれる！

「『闇』よ……！我と同化し、偽りの光を消し去る力を！」

一瞬、何が起こったのか解らなかった！だが間違い無い。獄界の『闇の海』を召喚し、自身と周りの空間に取り込んでいるのだ！

「我らが誕生し、65億年の月日が流れた。その間、完全に勝敗が分かれた事は無かった。だが此处で、ロードが勝ち……因縁に終止符が打たれるのだ！」

「深獄の管理の押し付け、中界の侵略……。ロードの暴挙は枚挙に暇が無い。真なる正義はサ

タンであり、私の元にこそ統制された世界は実現される。それを証明する時が『今』である！」

「カッ」

この星の歴史上、最大の力同士が衝突した！

衝撃は見渡す限りの空間を消し去り、海を割る。その余波が宇宙空間に届くと共に、星が激しく揺れ始めた！

「うおおお」

「ぐおおお」

体が燃えるように熱い……！精神が筆り取り取られるように痛い……！実際に俺達の肉体と精神は一秒毎に尋常ならざるダメージを受けているだろう！

だが、構わない！生命力を燃焼させるのは今なんだ！

今にも消え去りそうな意識の中で、俺はシエルフィアとリルフィ……そして、人間達の事を思い浮かべた……

「シエルフィア対キュア」

ルナさんとフィアレス・ジ・エファサタンは聖域を離れたが、私はキュアと睨み合いを続けたままだった。

「さて……死ぬ準備は出来たかしら？」

彼女は不敵な笑みを浮かべて挑発してくる。乗ってはいけない。

「私は争いが嫌い。この戦いが終われば、この星には種族を越えた揺るぎ無い平和が訪れるわ。だから、出来る事ならばあなたも傷付けたくは無いの。獄王を争い以外で止められないのは解る。でもあなたは」

其処まで言った瞬間だった！

「キーンッ！」

「ブシュッ！」

不意打ちの攻撃！私は一撃は剣で受けたものの、二撃目は肩に浅い傷を負ってしまった！

「ママッ！」

離れた聖域の瓦礫の陰からリルフィが叫ぶ！話し合いで解決すると思った私は間違っていた。「シエルフィア、お前は私を愚弄するのね。私はフィアレス様の妻として、魔として此処に何をしに来たか解っているでしょう！？」

言う通りだ……。彼女の言葉で私は迷いを捨てた。戦おう。

「キュア、本気で行かせて貰うわ」

私は内に秘めたる力を解放した。私は、転生する時に多くの力に助けられた。人間の力、天使の力、魔の力……そして、神と獄王の力！それらの力の一部は、私の中に宿っているのだ。

「究極神術『光膜』！そして、究極魔術『暗幕』！」

光の膜が私を包み、闇のカーテンがその周囲を覆った。

「それでいいわ。お前が、神術も魔術も使いこなすのは知っている。でも関係無い！それ以上の力を剣に乗せて、攻撃するだけよ！」

彼女が高速で私に向かう！目で追うのがやつとの斬撃！

「キキキキーンッ！」

剣で防ぐが、一撃一撃が重い！このままでは押し負ける！

「ヒュッ！」

咄嗟に私はバック転を繰り返して剣を避けた！その瞬間、彼女に隙が出来る！

「えいっ！」

私は渾身の力を込めて、足払いを炸裂させる！するとキュアは転倒した！

「くっ！」

「終わりよ！」

私は転倒しているキュアに剣を振り下ろす！

「ザクッ……！ザクッ！」

地面が抉れる！

彼女は転がりながら巧みにそれを避けたのだ。

「フィアレス様の為にも負ける訳にはいかないっ！」

「ブシュッ」

彼女は私の剣を捌き、一閃が私の腕を掠めた！傷は浅いが、光と闇の防御膜が無ければ腕を切り落とされていただろう。

「ルナさんとリルフイ、そして皆の為に私も負けない！」

私は剣と共に、禁断神術『滅』を連続で発動させる。

「シュウウウウ」

「ザシュッ！」

私の攻撃がキュアに届く！だが、彼女はそれを気にも留めず立ち上がった！

「お前の剣は大した事無いけど、強力な神術が厄介ね」

ならばどうする気だ？私は彼女の次の手を考えた。

「神術を使わせる隙を与えない！」

私が思い付くのと同時に彼女はそう叫んだ！彼女の動きが加速する！

「キキキーンッ！」

「ザクッ！」

私の攻撃は殆ど当たらず、彼女の攻撃ばかりが私の体を捉える。このままでは！？

「（ママ！今から2秒後に出来るだけ敵から離れて！）」

「（ん……？解った！）」

リルフイの言う通り、私はキュアの剣に一撃を放った後唐突に離れた。

「逃げるつもり？え」

彼女が力の気配に気付いて振り向いた時にはもう遅い！

「カッ！」

リルフイの指から、神のみが使える『光（sunlight）』が発せられていたのだ！その威力は、ルナさんには遠く及ばないが私の術よりも遥かに強力だ。幼くしてこの力……。一体リルフイは何処まで成長するのだろうか？

「キヤアアア」

その場にキュアは倒れた。鋭い光が彼女を貫通した筈だ……

「あなたの負けよ。負けを認めてくれたら、傷を回復」

私が無駄まで言った時だった。

「フフフ……やっぱりね。娘の攻撃が来ると思ったわ」

彼女は立ち上がる。無傷だ！

「フィアレス様に言われていたから。娘に注意しろって」

そうか、予め攻撃が来る事を想定していれば避ける事は出来る。

「でも、凄いい攻撃ね……。剣が粉々よ」

彼女は唯の鉄粉と化した剣を指差す。そして、不気味な笑みを浮かべた。私とリルフイの力を併せれば、決して彼女の力に負けはしない。なのに何故余裕の笑みを浮かべる事が出来る？

「第二部といきましょうか」

その言葉の直後、彼女は翼を開き空へと飛び立った。遠くから彼女の声が訝する！

「雲の上からの攻撃、目に見えない闇の攻撃を受けてみるがいいわ！」

しまった！今は夜……。しかも雲の上に隠られれば視認は不可能だ。どうする！？

「ママー！危ない！」

一体何が起きた！？

「ゴゴゴゴ」

リルフイと私を含む半径数百mが闇の螺旋に飲み込まれている！？これは、禁断魔術『死闇』！

「ママ！助けてっ！このままじゃ螺旋に食べられちゃうわ！」

「リルフイ！心配要らない、今助けるわ！」

仕方無い。今迄試した事は無いけど、嚴重に制御されている内なる力を全て解放しよう！

「シユウウ」

体が炎のように熱い……！皮膚が発熱で赤く変色してゆく！1分……否、30秒以上は持たない！

「禁断神術『滅』！」

普段私が使用可能な『滅』の数十倍も巨大な『滅』が発動した！死の螺旋は音も無く消えて行く。

「リルファイ、パパには内緒よ」

私はそう言って、螺旋の消えた聖域に立つリルファイの頭を撫でた。彼女は言葉の意味が解らずに首を傾げる。

だって内緒じゃないと困る。私が『空を飛べる』事をルナさんに知られたら、甘えられないから。

神術で編んだ翼。ルナさんの『光の翼』程じゃないけど、輝いている。

私は『転送』で雲の上まで移動し、『翼』でキュアにそっと近付いた。

「加減は出来無いからごめんね」

私はそう言うと、オリハルコンの剣に『光 (sunlight)』を込めてキュアに振り下ろした！

「ピカッ」

「ドゴオオオ……ン！」

光が、空諸共彼女を裂き、衝撃波が聖域を激しく揺らしたのを感じた直後、私は力が空っぽになり聖域へ落ちていった。

「ママー！」

私を心配する優しい娘の声……

「フワッ」

あれ？落ちたのに何の衝撃も無い。一体？

「もう、ママ！自分の命を大事にしてって言ったでしょー！」

私はリルファイの『保護』と『治癒』に包まれていた。

「はあい……。ごめんね」

聖域に叩き付けられ気を失っているキュアを確認して、私は目を閉じる。その時だった。

「カッ」

遠くで、これ迄感じた事の無い強大な光が発現した。同時に、夜空を全て吸い込むような完全なる闇も顕れる！

刹那の後、星が激しく振動を始めた！

「ルナさん……、皆」

私とリルファイは手を合わせて祈った。

「人間対魔」

ルナからの連絡後30分以内に、俺達は戦闘準備を終えていた。

「来るなら来い！」

俺は『聖剣』を強く握る。この剣は、かつての『力の司官』であった証。

そう、俺とジュディアはミルドの最前線で戦うのだ。俺は街の中心部の高台に立ち、何処で



戦闘が始まってすぐに駆けつけられるようにしている。また、ジュディアはミルド上空を巡回している。殆どの天使は空を飛べなくなったが、俺とジュディア、ノレッジがまだ飛べるのは有難い事だ。

街全体はルナの『結界』で覆われ、魔の攻撃を受け付けけない。だが、一点集中攻撃には脆い。結界の一部が破損するのに、大した時間はかからないだろう。

だから、俺とジュディアは見張っている。結界を守る為には、誰よりも早く敵を見つける事が肝要だからだ。

ウィッシュには、非戦闘員である女、子供達を守る皆の役目を与えている。ミルドの地下に建設した、避難施設の入り口を見張っているのだ。無論、俺達が水際で食い止めるので、其処まで敵が侵入する事はまず無いだろう。だが、俺達の攻撃を掻い潜る事は有り得る。

この半年間、ウィッシュは俺の下で剣の使い方を覚えた。その上達は目を見張るものだった。大丈夫、あいつは俺の息子だ。いざ戦闘になっても、軽く魔を倒してくれるだろう。その時、ジュディアの意思が転送されてきた！

「（セルフアス！東南東から敵の襲来よ！数は……数万！？）」

「（数万！手加減無しだな。それだけの数だと、結界の外から遠隔攻撃だけじゃ足りねえだろう。俺は結界の外で戦う。援護は頼んだぜ！）」

「（解った。死なないでね！）」  
「（大丈夫だ。俺はお前の夫で、ウィッシュの父親だぜ。）」

俺は上空に向かって拳を振り上げると、東南東に飛んだ。街の人間にも指示をする。

「敵は東南東から現れた！東ブロックと、南ブロックの者は俺が合図を送り次第攻撃を行え！」

「了解！」  
頼もしい声を背に、俺は結界の外に出た。敵が目前に迫る！星空と雲の全てを覆い隠すかのような軍勢。背筋が寒くなるのと同時に、血が沸き立つのを感じた。

「行くぜ！」

俺は敵へと向かう！ジュディアの保護が俺を包むのを感じた！

「ガハハハハ！元天使風情が、我ら『選ばれし魔』に勝てると思うなよ！」

魔の軍団を率いる、先頭の魔が俺を嘲笑う。他の魔よりも一回り大きく、全身に鎖が格子上に巻かれている。恐らく、リーダーだろう。

「ギャギャギャ！」

リーダーの後に続いて、他の魔も不気味な笑い声を上げた。

だが、関係無い。俺は街へ侵入しようとする者を排除するのみだ！

「貴様……このケージ様を無視するとはいい度胸だ。行け！お前達！」

自己主張の強い魔だ。いいぜ、戦い甲斐があるってものだ！俺は剣を振り上げた。これは戦闘開始の合図！

「ドドドーンッ」

「ピキピキッ！」

無数の砲撃と共に、ジュディアの神術が魔の大軍に炸裂する！

「ギャアア」

爆音の後に墜落していく魔。俺は聖剣をケージに向けた。

「面白い……。俺様の力を思い知るがいい！究極魔術『獄閨』！」

奴の周囲が高密度の暗黒に覆われ、その闇が集約されて俺に襲い来る！

「ルナは……こんな化け物を相手に戦って来たんだな。たった一人の女の為に」

俺はルナの強さを身に染みて理解した。だが、今の俺も愛する者の為に命を懸ける覚悟は出て来ている。

「究極神術『雷光』を聖剣に集約し、闇を切り裂く！」

俺は雷光に包まれた剣を獄闇に振り下ろす！

「ピシッ！」

獄闇は呆気なく真つ二つに割れた。だが……！

「かかったな！」

さっきの獄闇よりも巨大なものが数十……！俺の周囲を取り囲んでいたのだ！さっきのは囲  
だった！避け切れない！

「うおおお！」

俺は精神を集中し、全身を『雷光』で覆った！

「ゴオオオ」

獄闇が俺に一つずつ炸裂しているのが解る！雷光と相殺し、辛うじて俺の体には届いていな  
いがこのままでは殺される！

「（セルフアス、痛いかもしれないけどちよっと我慢してね。）」

幻聴か……？ジュディアの声が聴こえた。だが、次の瞬間それが幻で無い事を思い知る！

「カッ！」

俺は突如、眩い光に包まれた！痛い！何て痛いんだ！？これは……究極神術『神光』が俺を  
直撃しているのだ！

「（敵の闇は消えたけど痛かったぜ！）」

「（だから最初に謝ったでしょ。細かい事は気にしないの。）」

「（おう、サンキュー！）」

「今度はこっちが行かせて貰うぜ！」

俺は宙を蹴り、ケージに斬撃を浴びせる！

「ガキキーンッ！」

ケージも漆黒の太刀で応戦する！

「ドドドオーンッ！」

「カッ！」

人間とジュディアの攻撃で魔の軍勢は次々に落ちて行く。

俺とケージは互いに切り傷を負いながらも一步も引きはしない。俺は更に聖剣の柄に力を込  
める！

その時だった。

「カッ」

聖域の方角で眩い光が走った。その後に、世界が激しく揺れ始めるのを感じる！

「ルナ……、決着を付けるつもりだな。俺も負けねえぜ！」

俺は咆哮と共に、ケージに強烈な一撃をお見舞いしてやった。

く夜明けと共に来たる者く

ルナリート君からの『転送』のメッセージを受けた後、僕達はあつという間に戦闘準備を終  
えた。日頃の訓練の賜物だ。

今僕は、すぐにでも飛び立てるようにリウォル城の屋上で待機している。冬の夜風が身に染  
みる。

此処にはレンダーもいて、僕を見送ろうとしている。

「僕はレンダーとこの街を必ず守って見せるよ」

隣に居る彼女の肩を抱き寄せた。彼女は今にも涙を流しそうな瞳で僕を見つめる。

「貴方が無事で帰ってきてくれるなら、私は何も要りません。だから」

僕は、祈るように囁くレンダーの頭をそっと撫でた。彼女の不安を消してあげたい。  
前々から決めていた事を今こそ口にする時だ。

「レンダー、この戦いが終わったら結婚しよう。その約束を果たす為、僕は絶対に死なない」

驚きと喜び、一瞬で彼女の表情に沢山の色が浮かんだ。

「ノレッジさん……！勿論、喜んで！」

僕は彼女を抱き締めてキスをした。

ずっとこのままでいたいけど、もう時間は無い。出発しなければ。

「ありがとう、レンダー。婚約指輪もちゃんと用意してある。後で渡すよ」

「うんっ……。ありがとう、凄く嬉しい」

僕は飛び立った。高く高く。その時だった！

「カツ」

遙か遠く、聖域の方角で強い光と闇の柱がぶつかるのを視認出来たのだ。これは、ルナリート君が全力を出して戦っている事を意味する。

それから数秒後、世界が激しく揺れ始めた！それと同時に僕に『転送』で伝達が入る！

「（魔の襲来です！真東です！）」

街の全方位に配置している見張り台の一つ、東の見張り台からだった！

「（解った、すぐに向かう！）」

僕は全速力で飛行した。見張り台まで数十秒程度かかったが、魔の攻撃はまだ始まっていない。

「何て数だ」

結界の外、数キロメートル先に巨大な黒い塊が見える。一人の魔が人間と同じ大きさだとするならば、この塊には数万の魔が含まれているだろう。リウォルは、人間界の主要都市。狙われて当然と言えば当然だが……

「ん？」

僕は不思議な違和感を覚えた。魔に向けられた投光機に、突然ひらひら舞う雪が映し出されたからだ。否、違う。この違和感は一体？

「まさか……！そんな馬鹿な！」

自分の目を疑う！空に浮かぶ月が、真紅に塗り替えられていたのだ！

100年に一度のレッドムーン……。今回は僅か10年前だ。僕が知る限りでは、レッドムーンの周期には例外が無かったのに！

レッドムーンに照らされる雪は、闇に溶けるような赤を呈している。

僕がレッドムーンの出現に混乱していると、もっと不可思議な事が起きた！

「夜明けが」

余りの出来事に言葉が出ない。

星空とレッドムーンが消え、S・U・N（太陽）が昇り始めたのだ！夜明けは数時間先の筈なのに！

そして……

「ピカツ」

失明しそうな程強力な光が、魔の中心に現れた！

さっきから、一体何が起こっているんだ！？魔術？否、月やS・U・Nを操作出来るような術がある筈が無い。

僕は恐る恐る目を開いた。

「うおおお」

地上の皆が歓喜の声を上げている！何故だ……！？魔の大軍が……いない！

そうか、皆が僕が魔を消したのだと思っ込んでる。違う、僕じゃない！

ルナリート君、セルフアス君、ジュディアさんは別の場所で戦っている。それ以外に、あれだけの魔を瞬時に消滅させられる者がいるのか？

その時だった。

S・U・Nの光を背に、ゆらゆら浮かぶ者がこちらに向かっている！

光に透けるような白い肌、腰の辺りまで伸びた銀の髪……。そして、全てを見透かした後の如く閉じられた瞳。

何者だ？

新雪のような純白のローブを纏った人間……にしてはおかしい。翼も無く、空を歩いている。神術を使っている様子も無い。

天使でも無い。天使の髪は金色だ。

何より、この者が人間でも天使でも無いと断言出来るのは、この世のものとは思えない美しさの所為だ。『完全』という言葉は彼女の為にあると言って良いだろう。彼女を見れば、自分達の姿が如何に不完全かを否応なく理解させられる。

同時に神聖さも兼ね備えていた。近付いてはならない、触れるなど以ての外だ。

だが一つだけ言える。魔を消滅させたのは『彼女』だ。

彼女を中心に、焼き尽くされた魔の灰が、時間差で地上に落下しているからだ。この者に近かったであろう魔の灰は、既に地上に全て落ちていているが、遠い者は未だ落下中だ……

更に彼女は近づく。音も無く……。

そして、結界に遮られる事も無く僕の目の前、皆の頭上で止まった。

結界を透過出来るという事は、魔でも無い。一体彼女は？

皆が沈黙し、彼女に視線を送る。無音が続く……

僕は、不意に急激な胸騒ぎを感じて全速で背後に飛ぶ！その時！？

「ピカッ」

彼女から、真つ白な光が放射されたのだ！

救われぬ、絶望を運ぶ『白』……

## 第十節 星の名を持つ存在

一体何が起きた！？僕は恐る恐る目を開く。其処には……

「何て事だ」

さっきまで僕が居た場所は跡形も無い。そうだ、建物も人々も灰燼と化している！人々が居た場所には血痕さえ残らず、地面に影が焼き付けられているだけだ。

だが、魔も人々も焼き尽くした彼女は、相変わらず無表情に僕に近付いて来る！

彼女からは、何の感情も感じられない。怒りも憎しみも悲しみも……。

彼女は唯、潔癖な迄の美しさを湛え、眠るように閉じた瞼を開こうとはしない。

余りの出来事に、僕の意識はついていけなかったが、ようやく此処で、僕の感情に怒りが溢れ出した！

こいつは、大事な街の人々を殺したのだ！

「貴様！」

僕は、究極神術『魂砕断』と『不動』を瞬時に発動させた！だが！？

「シユウウウ」

彼女に届くかと思われたその時、神術のエネルギーそのものが無効化されたのだ。

「ノレッジ・ワンダラーズ。私には如何なる物質、神術、魔術も届きません。ですので、私に

攻撃する事は無駄です」

透き通った、高く張りのある声。だが、抑揚が無く感情の籠らないその声は、まるで規則正しく音を奏でる楽器のようだ。この言葉の意味、僕は理解した。

彼女は僕達の事を知り尽くしている上に、この星で彼女に敵う者は存在しないのだ。彼女は神術、魔術、挙句の果てに僕のフルネーム迄も知っている。ならば当然、人間や魔を殺す事が何を意味するかも解っているだろう。そうだ、ルナリート君と獄王が怒る。彼女は、彼等を敵に回す事を何とも思っていない。

そして、もう一つ解る事がある。

僕は、数秒以内に殺される。そして、星に生きる者は等しく死を迎えるのだ。

僕達に、明日は訪れない。

「（レンダー、永遠に愛してるよ。約束守れなくて、ごめん……）」

意思をレンダーに転送した直後、僕は『白』に飲み込まれた。

（滅びの序章）

レンダーは一人、城の屋上でノレッジの無事を祈っていた。次に会う時には、婚約指輪を渡して貰える。心配しながらも、胸は弾んでいた。

毎日が人生で最高の幸せ。レンダーは、ノレッジと出会う全てが変わった。

生まれてから22年間、病気で家から出る事も出来ず、明日の命を祈る日々だった。

なのに今は元気になり、心から愛する人に愛されている。これ以上、他に何を望むと言うのだろうか？

だが、歯車が狂い始めた。

遙か遠くで、ルナリートとファイアレスが全力で激突し、世界が激しく揺れ始める。それはまだ良い。想定されていた事だ。

問題なのは、その後レッドムーンが現れて朝が訪れた事だ。

朝と共に、強烈な『白』が、リウォルに襲いかかる魔を瞬時に消し去った。

そして、ノレッジの最期の言葉がレンダーの頭に冪したのだ。

「（レンダー、永遠に愛してるよ。約束守れなくて、ごめん……）」

「ノレッジさんっ！」

ノレッジが死んだ。余りに突然の出来事に、レンダーの思考は混濁していた。さつき交わした約束が生々しく蘇る。

「（この戦いが終わったら結婚しよう。）」

レンダーは強く拳を握り締めていた。爪が掌に食い込み、血が流れ出す。更に、悲しみとも憎しみとも断定し難い涙が溢れた。

思考よりも、感情と肉体の反応は高速なのだ。彼女は全身を震わせて、この現実を受け入れるのを拒んでいる。

だが、現実には留まる事も容赦する事も無く冷酷な牙を剥く。

絶望の『白』を湛えた女が、レンダーの頭上を舞った。

レンダーは、五感の全てで理解した。否、誰であってもこの女の前では同じだろう。途方も



無い力の差。大きさを形容するならば、人間が砂粒で女は巨大な惑星だ。抵抗する気力も湧かない。殺される者と殺す者。自分達の命は、彼女の一存で全て決まるのだという事。そして、彼女は自分達を躊躇い無く殺すつもりであるという事。

レンダーは目を瞑り、両手を空に向かって広げる。そして、思考を止めた。

「ノレッジさん……、私は幸せです。この世界に生まれて良かった。今から……私も貴方の後について参ります。私も貴方を永遠に愛しているから、死でさえも二人を分かつ事は出来ない」

祈りの言葉を発し、レンダーが目を開いた時、街は全て『白』に包まれていた。

異様な光景。人も建物も、木々も一様に『白』に飲まれていく。

そして、彼女は痛みすら感じる事も無く、指先から『白』に包まれて消滅したのだった。

リウオルに粉雪が積もり始める。

街も人も消え去った大地の上を、慈しみで覆うかのように。

その光景を見ながらも、女は完璧に整った表情を変える事は無い。

「『私』か、『不要なもの』を消し去る業は、始まったばかり」

女は確認するように一人呟いた。その声には何の感情も浮かばない。当然である。彼女は感情を持たない。そして、生者にも死者にも属さない。

彼女にあるのは、たった一つの意味だけだ。

「生きる者全てを消し去る事」

この星に生きる者にとつての悪夢は、まだ始まったばかりだ。

「星の意思」

「うおお」

俺は肉体も精神も一つの光へ変換して、フィアレスにぶつける！フィアレスも、同様に闇の化身となり俺を飲み込もうとする！

俺達を中心に、星が激しく振動している！

何故、俺達の力には優劣が無い！？少しでも差があれば、此処まで肉体と精神を極限まで削って戦わずに済むのに！

否、そんな弱音は吐くな。力の差に関係無く、俺は勝たなければならないのだ！

その時だった。

「まさか」

光と闇の狭間に垣間見えるレッドムーン。見間違う筈も無い真紅の月。

フィアレスの魔術か？違う、フィアレスも空に目を遣っている。

次の瞬間……レッドムーンが消えて、代わりに夜明けが訪れた！

だが俺達は自分の力を緩めはしない。今、気を抜けば確実に相手の強大な力に飲まれる！しかし、数秒後……

「ゾクッ」

背中から全身に駆け巡る不快感で、俺達は同時に攻撃を止めた。この感覚、一番近い言葉で表すならば「耐え難い恐怖」だ。

俺は剣を下ろし、フィアレスの目を直視する。困惑の目。

「君も感じたんだね」  
「ああ。何だこの感覚は？」  
俺達は暫し呆然として、その場から動く事が出来なかった。

その時、そんな俺達の様子を見守っていたかのように、一人の女がS・U・Nの光を背に現れた。

穢れ無き純白のローブを身に纏い、完全な美を体現したかの様な容姿。だが、其処には何の心も宿っていない。異界の者……。俺達の想像ではとても及ばない潔癖な存在。

そして、どんな生物をも超越した力を内包する物体……  
感じられる意思は『殺意』のみ。

「僕の見た夢は現実だった訳だ……。ルナリート、僕は」  
普段は気丈なフィアレスの表情に、拭えない恐怖が張り付いている。  
「それ以上言うな。それを言葉に出せば、俺達は愛する者との約束は果たせなくなる」

「（抗う術も無く殺されるなんて言葉は、決して口に出すな。）」

「そうだね……。僕は戦わなければならない」  
「そうだ、ロードとサタンが今こそ協力する時だ」

俺達は弱々しく剣を握り締めた。体が震える。一刻も早く此処から逃げ出したい……！だが逃げる訳にはいかない！

二人で必死に女を睨み付ける。其処で女は口を開いた。

「エファロード。そしてエファサタン。この星を長く治めてきた二神。貴達私が私を認識するのは初めてでしょうね。しかし、私は貴方達の事は良く知っています」

淡々と話す言葉にはやはり感情が籠らない。事実を語っているだけなのだろう。  
閉じて開かない瞳の奥には一体何が見えているのか？

「65億年前の『最初の者』から、もう23265代目になるのですね。時の流れとは早いものです。勿論、『時』という概念は貴方達が考え出したものですが」

一体何を言っている？まるで、この星の全てを知っているかのような口振りじゃないか！  
「お前は……一体何者だ？」

俺と同じ感想を持ったであろうフィアレスが質問を投げかけた。この女に対して意思の疎通など出来るのだろうか？

だが、予想に反して質問に対して正確な回答が返って来た。

「私……私の名を付けろなむらびん」 『存在シエ・フア』

シエ・フア。古代語で、『美しき星』を意味する。現在では、『シエフア』という名称は俺達が生きるこの星の名だ。

だが、何故そんな言い回しをする？まるで自分に名前が無いような……

そして、何故名前が『シエ・フア』なんだ？  
困惑する俺達には構わず、シエ・フアは話を続ける。

「宇宙、光、闇、時。何も存在しなかった過去は、唯『無』でした。しかし、私は動き出した時と共に生まれた。そう、私は全ての始まりである『存在』の破片。そして、私はこの星そのものです」

この星！？星が人の姿を借りて俺達の前に現れたというのか？感情を伴わない殺意を秘めて？

理不尽な事態に憤りを感じ始めた俺とは裏腹に、フィアレスは顔面が蒼白になっている。何かを理解したようだ。

「ファイアレス・ジ・エファサタン、貴方は理解したようですね。そう、私達『存在』には意思も感情ありません。『存在』は器なのです。最初の『存在』が全てを内包し、無を彷徨っていたように」

シエ・ファは目を閉じていても、相手の心を読む事が出来る。神術も魔術も使っていない。彼女に対して、俺の基準で測れるものは何も無いと言う事だ。

「器が意思を持つのは、内部からの干渉によつてのみです。決して、外部から影響を受ける事は無い。この星が誕生してから、私がこの様に意思を持って現れた事はありませんでした。でも、今私は此処に居る。ルナリート・ジ・エファロード、解りませんか？貴方の基準の範囲内にその答はある筈です」

過去に現れた事は無く、今現れた。それを引き起こしたのは、過去と現在の相違。歴代の神と獄王と俺達の行動を較べる。

天界の放棄、魂界への不関与、獄界の維持と深獄封印への力の低減……深獄！

「気付いたようですね。そう、私を動かしているのは、深獄に封印されていた12の魂です。23265代目エファサタン、ファイアレス。貴方が深獄の封印を弱めた事によつて彼等の魂は動き出し、『シエ・ファ』の中心に辿り着いたのです。そして、私と同化した」

何も言えない。彼女が現れたのは必然……。この事態は俺達の選択が招いたのだ。深獄……。かつて強大な力を奮い、生命を破滅に追い遣ろうとした悪魂を封じた場所。

「違います。それは貴方達が捻じ曲げた歴史」

その一言にどれだけ重い意味があるのか……。俺達は、激しい頭痛を覚え記憶が揺さぶられるのを感じた。

「かつて、私が内包する一部が、『貴方達』の支配を止める選択をしました。選択により、地上に送り出された無垢な魂は、貴方達の恣意によつて生まれる事すら許されず深い闇に葬られた」

そうだ、その通りだ！ロードとサタンは、自分達の地位を守る為に……。強大な魂を生まれる前に封印したのだ。

それが、魂界への関与の理由だ。魂界へ送られる魂と、魂界から現れる魂。その二つを監視する事により、俺達は絶対の権力を維持してきた。俺達を脅かす可能性のある魂は、生まれる事を認めない。

全てを思い出し、論理が噛み合った瞬間、強い罪悪感が生まれて己を責める。

「止めろ！」

その痛みを堪え切れなくなったファイアレスが、魔剣をシエ・ファに振り下ろす！

「無駄です」

剣は彼女の体を透過し、虚しく風を切る音のみが響く……。このままではファイアレスが殺される！

「うおお」

俺は瞬時に、『光』を発動させシエ・ファに放つ！

「それも無駄です」

「シユウ」

神術の力が無効化され、彼女には届かない！

「何て事だ……。濟まない、ルナリート。僕が深獄をしっかりと封印しておけば！」

絶望的な状況の中、ファイアレスが後悔の叫びを上げた。

「お前の責任じゃない。しっかりとしろ！俺達は、自分にとつて最も大切な者の為に選択をしたに過ぎない。後悔するぐらいなら、前を見るんだ」

俺も考えがある訳じゃない。唯、心が折れば其処で全てが終わる。それだけは避けなければならぬ。

「流石だね。ロードは昔からずっとそうだった。常にサタンより冷静で、強靱な心を持っていた」

「貴方達は、互いを憎しみ、認め、高め合って来た。そうでなければ65億年の間、支配者でいられる事は無かったでしょう。でも、それも終わりです」

全く感情の揺らぎも無いのに、彼女の言葉は酷く冷徹に聞こえる。

そうだ、冷静に考えて俺達はどう足掻いても、彼女を止める事は出来ない。

だが、認めない。俺達は『永遠の心』を持っている。それを精神の軸にしている限り、決して絶望を認めたりしない！

「ルナリート、そしてフィアレス。貴方達が強靱な意思を持ち、私を止めようとしているのは解ります。しかし、それが不可能である事は理解しているでしょう？感情がそれを認められず、甘い幻想に縋っているだけ」

彼女はいちいち心を読み、それを否定する言葉を投げかける。俺はフィアレスの表情を窺った。彼の表情にも迷いは無い。

「エファロード、エファサタン。貴方達は私と戦うのに躊躇いは無いようですね。しかし、関係ありません。戦う意思の有無に関わらず、貴方達は確実に死にます」

その言葉の後、シェ・ファは両手を広げて天を仰いだ。

「時の変わり目が訪れた。『無』に浮かぶ『存在』から、宇宙の全てが生まれたように」

世界が暗黒と雷雨に包まれる。真っ白な雷がシェ・ファの体に集まる！

「私はこの星の意思」

大地も空気も、シェ・ファの力を受けて鳴動している。まるで、悲鳴を上げているかのようだ。

「悲しみ、苦しみ、束の間の喜び。生きている事に意味など無いでしょう？刹那の幸福の陰には、無限の不幸が隠蔽されている。俺達は……」

彼女は全ての生命を否定している。俺達は……  
「生きる事は、不幸を忘却へ押し遣り、幸福を夢見る事の繰り返し」

白い稲妻が海上を走り、その跡は無に帰していく。

「ならば真なる幸福は、何も感じず、心を捨て去る事」

「死して、私と同化する事が唯一の救いなのですよ」

「ふざけるな！」

俺達は同時に叫び、剣先をシェ・ファの首元に突き付ける！

同時に、『光』と『闇海』が各々の剣に宿った。

「貴方達は最後です。今は眠っていて下さい」

最後、眠る？その言葉を理解する前に、目の前が真っ白な雷に包まれ、意識が無に包まれた。

## 第十一節 終末の光

此処はリナン。世界の書物、知識が集まる街。そして、ディクトを筆頭に優秀な学者が集う街だ。

だが今は戦時。学者達も半年前から戦闘トレーニングを積み、今日の戦いに向けて準備を進めてきた。この街に住む者は、自分の大切な者だけでなく、貴重な書物を守る闘志を燃やしていた。

天界、人間界で蓄積されてきた叡智の結晶である無数の書物を、たった一度の戦争で失ってはならない。

深夜、ルナリートから開戦の合図を受けて30分後には、街の者は戦闘準備を完了させていた。魔の大軍はまだ来ない。人々の緊張が高まる。真冬にも関わらず、額から汗が流れる程だ。静寂を破ったのは、遙か北西にある聖域上空での、ルナリートとフィアレスの全力の衝突だった。

世界が激しく振動を始める。戦いが確かに始まっている事を感じ、人々の鼓動が激しくなる。

その時だった。

レッドムーンが現れ、ひらひらと雪が舞った後、真夜中の時間帯に陽が昇ったのは。そして、終焉を告げる者がリウオルに現れたのは。

感情を持たぬ白。何者も超越した力を有する、完全な存在。

その存在、シエ・ファはリウオルを滅ぼし、ルナリートとファイアレスを倒し……この街の中心の広場に音も無く現れた。

「何者だ!？」

広場を巡回していた兵が叫ぶ。だが、シエ・ファは瞳を閉じたまま表情を変える事無く口を開いた。

「私は、シエ・ファです」

兵の声に気付いた他の兵達が、すぐさまシエ・ファを取り囲んだ。場が騒然となる。

「この姿は明らかに人間だろう」

「それにしても、美し過ぎるな」

「何にせよ、突然何も無い空間から現れたんだ。捕らえておくしかあるまい」

兵達は、シエ・ファに手を伸ばす。だが、その手は空を切り彼女に触れる事は出来ない。

「この街にいる元天使を含む人間の位置は、全て特定しました。苦しくはありません。何も感じる事は無く、死へと誘われるでしょう」

その瞬間だった!

彼女の体が超高密度の白いエネルギーへ変換され、放射状に無数の光線を発する!

「うわああ!」

光線は人々の胸を貫き、貫かれた人間はその場で白い砂と化し消滅した。

「放射された私の刃は、10000。各刃の速度は、音速の倍。各刃は人間を貫いた後、最短ルートを通り次の人間を貫く。計算上、この街の人間は32秒で死滅する」

シエ・ファは抑揚の無い声で囁いた。彼女は生命体の数、位置、生命力を正確に把握している。32秒……。この時間に誤差は無い。

その頃……

「胸騒ぎがする」

中央図書館を守っていたディクト達は、図書館を飛び出した。そして、見た。

「人間が消え」

眼前の人間が白い砂と化し、消えていく!ディクトは持ち前の高速な思考で現状を瞬時に理解した。

この街の境界は破れていない。人間を瞬時に消し去る光線、魔では無い何かの圧倒的な力。恐らくは、人智を超えた力だ。敬愛するルナリートよりも強大な力……

其処まで理解した時白い刃、無情な光はディクトの胸を貫いていた。次に待つのは、肉体の崩壊……

「(これが……この星に生まれた全ての者の定めなら、全ての者が死に絶えるなら……誰も悲しむ者はいまい……)」

それが、彼の最後の思考だった。

↳最期の勇姿

ミルドでの戦いは、俺達が優勢だ。さっきの俺の一撃は、魔のリーダーであるケージを地面に激しく叩きつけて気絶させた。更に、ジュディアの連続神術により、魔の軍勢は続々と落ち



て行く。

気がかりなのは、まだ深夜の時間帯にも関わらず陽が昇った事だ。そして、束の間姿を見せたレッドムーン。何か不吉な事の前兆だろうか？

「このまま押し切るぜ！」

「おお！」

俺は、ジュディアと街の人々を鼓舞する。皆が、それに呼応して闘志が高まる。その時だった。

「ピカッ！」

眩い光、否、「白」の爆発！？ 目が眩む。辛うじて眼前の状況を把握する。其処には……「魔が全て消えた」

何故だ？あれだけの魔を瞬時に消滅させられるのは、ルナぐらいだ。そう言えば、世界の振動は止まっている。ルナは戦いに勝ち、ミルドを助けに来たのか？だが、それにしても可笑しい。ルナは例外を除いて、魔を殺す事を禁じている。

「初めまして、セルフアス・オーバーレイヤー」

「何者だ！？」

突如、見知らぬ女が俺の目の前に現れた。翼も無く、神術も魔術も使っていないのに空中に浮かんでいる！

「私の名は、シェ・ファです」

瞳を閉じ、何の感情も浮かばない透き通った声。完全としか形容出来ない美しさ。こいつは、俺の知っている何者にも属さない！俺は咄嗟に聖剣の切っ先を向けた。

「私を敵と認識出来た貴方は聡明ですが、その剣は無意味です」

こいつは危険な存在だ。俺は剣を振り下ろす！だが、剣は虚しく空を切るだけだった。

「」の街の総人口から、貴方が助ける人間を引けば丁度半分です」

何を言っている！？意味が解らない！

「意味を理解する必要はありません。『理解』とは、状況を把握して未来の行動に繋げる為のもの。未来が無ければ不必要です」

未来が無い。その言葉の裏に隠されているもの。それは……死！

「ふざけるな！人の命を何だと思ってやがる！？」

怒りに震える俺に影響される事も無く、女は口を開く。

「私の一存で決まる、不確かなものです」

何て奴だ……。命はこいつにとっては些細なもの。そんな事が赦されて良い筈が無い！

「うおお！」

俺は、滅茶苦茶に剣を振り回し神術を放った！だが、剣は敵に触れる事も出来ず、神術は届く前に掻き消されるだけだった。

「気は済みましたか？そろそろ始めましょう。83秒、それがこの街に残された時間です」

その言葉の直後、この女の体は白光に包まれ数え切れない程の光線が放射された！

「止める！」

俺は究極神術を込めた聖剣を突き立てる！だが、聖剣は抵抗も無く崩れ去った。

「助けて」

眼下で、人間達が光線に焼き尽くされるのが見える！ジュディアは……無事だ！

「セルフアス！」

青褪めた顔をしたジュディアがこつちに向かって飛んでくる。

「来るな！」

俺は力の限り叫んだ。だが、彼女は止まらない！

「逃げるのよ！」

彼女が半狂乱になって泣き叫ぶ。

「（俺が助ける人間を引けば……）」

見渡す限りの人間達が、燃え尽きていく……。この女の言った事を俺は理解した。そうだ、俺には選択肢が無い。シェ・ファは未来さえ予期している。この街の人間は、俺がこの後助ける者を除いて全員殺される！俺が助ける者、それはジュディアとウィツシュ。そして、避難所に居る女子供達だ。ルナから貰った『転送』の輝石と、俺の精神力を合わせて救えるのはそれが限界だからだ。

もし俺が逃げれば、本来助かる筈の一人が死ぬ。それは、ジュディアかもしれないし、ウィツシュかもしれない。それだけは絶対に駄目だ！愚図愚図するな。この命は、愛する者の為に捧げると誓ったんだ！

「ジュディア、お前は俺にとって勿体無い位最高の女だぜ。色々迷惑かけちゃったが、俺の人生は最高だった。後は、ウィツシュの傍で最高の……お母さんでい続けてやってくれ。元気だな！」

俺はジュディアの方は振り返らず、拳を空に突き上げた。振り返れば、俺が泣いているのがバレちまう。

「セルファスー」

俺は、輝石にありったけの精神力を込めて『転送』を発動させた。

ジュディアの姿が消える。ウィツシュも、避難所の人間もこの街から退避出来ただろう。

「貴方の死で、人間界の人間は丁度半分になります。私は次に獄界に向かい、魔を半分抹殺します。次に残りの人間と魔を抹殺します。最後にルナリート・ジ・エファロードとファイアス・ジ・エファサタンを同時に抹殺します」

「（ルナ……、後は頼んだぜ。）」

俺は微笑んだ。最後の刻は笑って死ぬって決めていたからだ。愛する女性と結ばれ、子も授かった。上出来な人生だぜ。

「時間です、セルファス・オーバーレイヤー。死を恐れる事はありません。『私という存在』があるのだから」

その声の後、俺は目を閉じた。

「ブシュッ」

胸を、冷たい刃で抉り取られた感触……。この世のものとは思えない程の低温……

ジュディア、ウィツシュ。必ず、再び巡り会えるさ……

またな。

## 第十二節 悲嘆と覚悟

世界が揺れる。否、私の身体が揺さぶられているのだ。遠くで声が聞こえる。懐かしい声、私は……

「起きて、ルナさん！」

間違えようも無い。シエルファイアだ。

「バ。パッ！」

リルファイ。二人とも、どうしてそんなに私を揺さぶるんだ？頭が痛い。意識が混濁して、さつきまで自分が何をしていたか思い出せない。

何か大切な事があった筈だ。思い出せ、意識を失う前に何があったか。頭が……割れそうだ。

ファイアレスとの戦い。その後……白い女が現れた。存在……シェ・ファ！

圧倒的な力。私とファイアレスは女を止める事が出来なかった。彼女が私達に最後に言った言葉……

「貴方達は最後です。今は眠っていて下さい」

私達は最後。眠るといふのは気絶の事だろう。最後という言葉の意味、彼女の目的は生命を死へ追い遣る事ならば、殺される順序の事だろう。私達が「最後」であるなら、他の皆は！？其処で、私は目を見開いた。此処は、聖域の一角のようだ。

「ルナさんっ！」

「パパ！」

最愛の妻と娘が私に縋り付く。母娘揃って目に涙を溜めている。こんな所まで、本当に良く似ているな。

「心配かけたな。二人共無事で良かった。他の皆は？」

私の言葉に、二人は首を振る。唯、嗚咽の音が漏れるだけだ。暫く私は二人を抱き締めながら背中を擦る。そして、リルファイが重い口を開いたのだった。

「リウォル、リナン、ミルドと連絡が取れないの！それだけじゃ無い、世界中から『転送』で助けを求める声が聞こえたわ。でも、その直後に声は消えたわ」

彼女はシエルファイアの目を見つめる。すると、シエルファイアも表情を歪めながら頷いた。

私は……、俺は何て無力なんだ！

俺は、世界の全ての街と重要人物に向けて『転送』で意識を送った。反応があったのは、ほぼ半数。という事は、最悪人間の半分が既に殺されているという事か！？そんな馬鹿げた事が赦される筈が無い！

「シエルファイア、リルファイは此処で待ってるんだ。俺は、人間界と獄界の様子を見てくる」

止められるのは解っていたが、一人で行くつもりだ。だが、俺を止めたのは別の人物だった。

「獄界に行く必要は無いよ、ルナリート。僕と、キュアが戻るからね。恐らく『奴』は今、獄界に居る」

足元が覚束無い二人は、そう言っただけで私達に背を向けた。私達に警戒はしていない。今は、ロードとサタン、人間と魔で噛み合っている場合で無い事を互いに理解しているからだ。

その時、ファイアレスが私以外の誰にも悟られぬように意識を転送して来た。

「（僕が獄界から戻る迄に、『覚悟』してくれ。他に『方法』が思い浮かばない。）」

「（……解った。）」

俺は顔をギョツと閉じた。まさか、こんな『時』が来ようとは。

ファイアレス達が去り、家族三人が無言の静寂に包まれた。その静寂も、束の間で破られる。

「（ルナ、シエルファイア！お願い、フィグリルに来て！）」

ジュディアの声、彼女は無事だったか。だが、彼女の声は金切り声に近く、切迫した状況に置かれているのは間違い無い。

「ルナさん、行きましよう！」

俺は頷き、自分達をフィグリルに『転送』させた。

↳ 遺された言葉

フィグリルに着いた瞬間、泣き叫ぶ声が俺達を迎えた。

「うわあああ……！セルフアスが、セルフアスが！」

ジュディアがシエルファイアに縋り付く。ウィツシュも泣き崩れていたので、リルファイが走り寄った。

ミルドでは地下避難施設に居た者以外は殺されたのだ。勿論セルフアスも……！

突然の不幸に皆、途方に暮れて泣く事しか出来ない。俺は、頬を涙が伝うのを感じたと同時に、叫んだ。

「うおおお」

シェ・ファに対する憎悪。不甲斐ない自分自身に対する怒り。そして、心がグチャグチャに掻き混ぜられるような痛み。俺は、両掌から血が滴る程に拳を握った。そして、冷静で無いの

も承知の上で言った。

「すぐ戻る！何かあったら、『転送』で伝えてくれ！」

「待って！」

俺はシエルフィアの静止も聞かず、フィグリルを飛び出した。

ミルドを見るのは恐ろしい。全ての人間が殺されたと聞いたからだ。俺は、まずリナンに向かった。

街に人影は無い。建物自体は、ついさっきまで使われていた形跡があるというのに。暖炉の火で暖かい部屋、テーブルの上に置かれた食器、床に散乱した剣と本。

だが、街を歩いて俺は悟った。兵の詰め所、家の中でまで見られる白砂。これが、住人の死骸だと……。大声で街を歩いても返事が無い。風によって舞い上がる白砂と、冬の冷たい空気が、この街には残っていないのだ。さっきまで、此処にいた人々はもうこの世界には存在しない。

俺は居た堪れない気持ちになり、リウォルへと向かった。

何処だ、此処は！？何も無い焼け野原に薄く積もる粉雪。城も街も、俺の知る何もかもが此処から失われている！酷過ぎる。シェ・ファはその気になれば、この星から生命の痕跡さえも消す事が可能なのだ。

焼け野原を見ていると、此処に街が存在していた事さえも疑わしくなる。だが、大地の上で煌く小さな物体を見つけて俺は走り寄った。これは……日記。

「僕は、ノレッジ・ワンダラーズ。この日記には、人間界に来てからの出来事を書く事にした」

「今日、僕は初めて人間と言葉を交わした。ルナリート君の言う通り、彼等は僕達と同じだ。姿も、知能にも相違は無い。魂は平等なのだから、当然だけれど驚きだった」

「今日から僕は、リウォルの街を治める事になった。僕には頼りない所があつて不安だけど頑張ろう！」

「本当に、皆の学問に対する意欲には舌を巻く。彼等のお陰でこの世界の技術進歩は成り立っているのだ」

「この街に、レンダーという少女がいる。彼女は生まれてから今迄、家から殆ど出た事が無いらしい。僕が力になれる事があれば、何でもしようと思つて決めた」

「レンダーは20歳になった。喜ばしい事だ。でも、彼女の健康状態は決して良いとは言えない。僕は毎晩祈っている。彼女が元気で幸せな人生を送れる事を」

「彼女の健康状態は極めて悪い。僕は、仕事の傍ら一人で病気の研究も始めた」

「僕は彼女が好きだ。彼女は、苦しい境遇の中でも懸命に生きている。死なないで欲しい。出来る事ならば、僕が代わってあげたい」

「レンダーが吐血したらしい。心配で他の事が何も考えられない」

「彼女を救う事が出来た！禁断神術の反動で時折、体が痛むけど、この幸せに較べればどうって事は無い！」

「毎日が幸せだ。この幸せの他に、僕は欲しいものなど何も無い」

「戦いが始まる。レンダーと結婚するのは、先延ばしだ。でも婚約指輪は既に用意してある」

「一旦、日記は中断する。戦いの準備が忙しいからだ。次に日記を書くのは、戦いが終わり世界に平和が訪れた時だ。言い換えれば、僕とレンダーの結婚記念日でもある」

涙で文字が霞んで見える。ノレッジも、レンダーも死んだ。苦勞してようやく挿んだ幸せだったのに！俺は、この世界を守ると誓いながら大切な人々を守れていないじゃないか！粉雪の上に座り込む。何がエファロードだ。何が神だ。俺は無力な『一人』じゃないか。

「覚悟」

どれぐらい呆然としていたのだろうか。ふと我に返ると、俺はミルドの上空にいた。意を決してミルドの街の様子を見る。

「酷過ぎる」

俺は、自分の瞳に映った光景が信じられず街に降り立った。遠目で見たものが偽りだと思ひ込みたかったからだ。だが、現実には現実として無感情に目に飛び込んでくる。厳然たる事実。

リナンでは人々は白い灰、リウォルは街そのものの完全なる消滅、そして此処では人々は『白い焼死体』だ！

リナンとリウォルでは、原型を留めた死者はいなかった。だが、此処では死者の全てが白く焦げて街を埋め尽くしている。

涙が溢れ、憎しみの炎が自身を焼き尽くそうとしている。

しかし、突如冷たい風が俺の中を吹き抜けた。平和な日常を余りにも逸脱した目の前の凄惨な光景が、逆に俺を冷静にさせたのだ。否、『覚悟』が出来たと言う方が正しいだろう。覚悟が出来た者は冷静でいられる。この先、『私』が『俺』になる事は無いだろう。今はまずセルフアスの下へ行かなければ。

ミルドの丘、約束の場所。其処でセルフアスは生き絶えていた。私がかつて墮天した場所から育った大樹の根元で、彼は安らかな微笑みを浮かべて眠るように。だが手には、刃先が溶けて崩れた聖剣が握られており、最期まで戦った事が明白だった。胸を貫かれ、白い彫像のような姿になった彼を、私はそっと抱き起こす。

幼い頃から共に育った親友。毎日学校で勉強に行った事、夜中に抜け出して遊んだ事、人間界での日々……。それらが胸を掠める。私はたった一日でその二人を失った。心は冷静なのに、涙が止め処なく頬を伝う。これ程涙を流したのは、フィーネを失って以来だ。

私は彼の手を取り、『蘇生』を試みる。だが、彼の魂は既に此処には無く手の施しようが無かった。

「（セルフアス、ノレッジ、皆、本当に済まない。だが、約束する。これ以上の犠牲は出さない。『覚悟』が出来たからだ。）」

シェ・ファが再来する前に、セルフアスと街の人々を埋葬しなければならぬ。そう決意した時だった。

「セルフアス！」

「パパああ！」

ジュディアとウィッシュュが『転送』によって現れ、セルフアスの亡骸に縋り付く。

「ルナさん、どうして一人で！」

続いて、シェルフィアが私を糾弾する声。だが、彼女は言葉を止めた。私が感情の濁流を胸に収め、悲壮な覚悟を纏っている事に気付いたからだ。

「もう一度約束して……。絶対に離れないって。私と、リルフィを置いて行かないで」

リルフィも目に涙を浮かべて頷く。私は……

「解った。心配しなくても大丈夫だ」

二人をギュッと抱き締める。この温かさを感じる度に、私は至上の幸福に包まれる。幾ら触れ合って、抱き締めても足りない程に愛しい。フィーネの魂を受け継いだシェルフィア、そし



てリルフィ。彼女達と共に生きているという事が、私にとってどれだけ大切か。彼女達がいな  
い世界など私には無意味に等しい。  
傲慢かもしれないが彼女達には生きていて欲しい。ママであるシェルフィア、最愛の一人娘  
リルフィ。例え私を失ったとしても。

私は、愛する人が幸せに生きてくれるならば、自らの命すら惜しくは無い。

それが『覚悟』だ。この覚悟は今に始まったものではない。フィーネを獄界に救いに行く時  
も、自分の身を案じはしなかった。シェルフィア、リルフィの為ならば喜んで身を差し出せる  
と、常日頃思っていた。

だが、この『覚悟』は『思い』では無い、『決定』だ。覚悟が現実になる。

シェルフィア、リルフィが私の胸で肩を震わせている。  
ごめん、私はたった一度約束を破る。

粉雪が、鎮魂歌を歌っているかのようにミルドを舞う。ほんの数時間で、半分の人間が消え  
た。シェ・ファを放置すれば、少なくとも今日中には全ての生命が消えるだろう。  
私はそれを止める。自分の命と引き換えに。

此処は約束の場所。永遠の約束があるから肉体が死んでも、何度でも巡り会える。魂は永遠  
に君と共に。

悲しまないで。私は君の元へ必ず帰るから……

### 第十三節 永遠への協奏曲

セルフィアスを丁寧に葬り、街の人々を神術により墓地に運び終えた。その間に、私は世界中  
の人々に対して避難場所に退避するよう指示を出す。これから始まる、『最後の戦い』の巻き  
添えにしない為だ。ジュディア、ウィツシュを始め多くの人々は悲しみに打ちひしがれて動け  
なかったが、リルフィの言葉で、今やるべき事に目を向けるようになった。

「今、悲しくてどうしようも無い事は解っています。でも……、これ以上悲しみを増やしたら  
ダメなんです。皆、愛する人の為に戦い、愛する人の為に命を落としました。今生きている人  
の命は、愛する人に守ってもらった命です」  
娘だから当然かもしれないが、まるでフィーネのような口振りだ。

愛する者に守られた命、掛け替えの無い者を守る為、耐え難い悲嘆と恐怖の中でも、人々は  
懸命に動く。一時間とかわからずに、全世界の人々の避難は完了した。

後は、シェ・ファと戦うだけだ。私と、フィアレスの二人で。

フィアレスが獄界から戻り、私を聖域に呼んだ。

聖域に居るのはたった五人。私とシェルフィア、リルフィ、フィアレスとキュアだ。

終焉へ向かう狂奏……

止めて見せる。私とフィアレスは互いの目を見て頷いた。

死してもなお、消えない愛を信じて戦う事。それが、私達二人が此処に存在する意味だ！

「第一章『極術』」

「（覚悟は出来たようだね。）」

「（ああ。）」

意思の交換はそれだけで十分だった。後は如何に戦うかだ。

シエルファイア、リルファイ、キュアは無言で私達を見詰めている。言葉を待っているのだ。「今から私とファイアレスで『極術』を用いて、聖域を除いた地上の全てに結界を張る」ファイアレスが頷き、言葉を繋ぐ。

「物理的な攻撃、神術、魔術を通さない結界だよ。シエ・ファに効果があるとは思えないけど、やらないよりはマシだ」

シエ・ファは物理攻撃、神術、魔術のどれも通用しない。だが、私達とシエ・ファの戦いの余波ぐらいは防げる筈だ。

「極術って？」

元々色白なシエルファイアが、一層顔を蒼白にして訊く。不安、心配、恐怖、それらが凝集された表情。

「極術は、神術と魔術を融合させた術だ。エファロードと、エファサタンが、同等の精神エネルギーを消費して作り出すもの。歴史上、極術が用いられた事は数える程しか無い」

「一番最近極術が使われたのは、20億年前。星を三界に分裂させた時だね」

その言葉を聞き、キュアが叫びながらファイアレスに縋る。

「ファイアレス様、そんな力を用いては貴方が」

同様に、今にも泣きそうな二人が私の目を食い入るように見る。

「大丈夫だよ、ね、ルナリート」

「ああ。極術で消費する精神エネルギーは、神術や魔術と変わらない。変わるのは、融合した結果だ。例えば、神術の炎と魔術の炎が融合した場合、その炎は単独の炎の数十倍になる」

多少疑っているようだが、とりあえず三人は少し落ち着いたように見える。

「時間が無い、早速結界だ」

「了解」

私とファイアレスは剣を交叉させた。この星全体を包む程の結界。いくら極術であっても消費する精神エネルギーは半端では無い。だが躊躇する暇も、他の選択肢もありはしない。もう覚悟は決めている。

「極術『結界』！」

無色透明の厚い硝子のような結界が、聖域を中心に急速に広がっていく。

十数秒。結界が完成したと同時に私達は剣を下ろし、地面に膝をついた。

「くっ、思ったよりも消耗が激しかったね」

「そうだな」

平時なら、このまま眠る必要がある程の消耗だ。だが、こんなものは序章に過ぎない。さあ、立ち上がろう。

「ルナさんっ！」

「パパ！」

シエルファイアとリルファイが私の体をしっかり支えてくれる。本当に二人は心配性だな。

私が心配をかけまいと二人を抱き締めると、無意識に自分が涙を流している事に気付いた。

二人の顔は私の胸の中だから、泣き顔は見られていないだろうが、正直驚いた。

何故私は泣いているのだろうか？答は明快だ。

この温かみを胸で感じられるのは、これで最後になるからだ。心が泣いている。愛する二人との離別を予期して……

大好きな二人。私の全て。

私がかつてファイネを失った時感じた喪失感、無限に引き裂かれ続けるかのような心の痛み。それが二人に訪れるのを思うと、更に涙が止まらない。出来れば、ずっとずっとこうしていたい。広い宇宙に、確かに存在する三人の温かみを感じていたい。

甘えるな。シエルファイアとリルファイにはもう会えなくても、生まれ変わった時必ず二人の魂と再会出来る。

私は、二人が元気で生きていさえすれば十分幸せだ。

「二人とも、心配いらないよ。ありがとう」

ありがとう、今まで本当に。

「うんっ」

二人の目も赤かった。家族三人共、良く似てる。

私が二人から離れると、ファイアレスもキュアから離れた。

その後、私とファイアレスは二人だけで作戦を練った。他の三人にはサポートを頼むと伝えただけだ。当然三人は、私達に食い下がったが、シェ・ファが心を読める以上、メインで戦う私達以外が作戦を知るのは危険だと言って納得させたのだ。

勿論、真意は他にある。

↳第二楽章『遮断』↳

作戦は全て決まった。此処にいる五人の一人一人を、極術で作った結界で覆う。後は、シェ・ファを待つのみだ。

数秒……、数十秒……、数分。無限に続くかと思われる静寂。こうしていると、さっきまでの出来事が唯の悪夢だったので無いかと思えてならない。だが、これは紛れもなく現実だ。

現れた！

聖域の上空100m程に、何の前触れも無く。

「（シエルファイア、リルファイ愛してるよ。永遠に。）」

私は二人を振り返らず、意識を転送する。その直後、私とファイアレスは無意識に飛び立っていた。

三人が状況を理解出来ず、戸惑っている。彼女達の叫びが遠くに聞こえる。だが、私達は戻れない。『作戦』は始まってしまったからだ。

作戦、それは「無意識と反射のみで戦う事」だ。予めシェ・ファの動きをイメージしておき、そのイメージに近い動きだったら無意識レベルに記憶させた攻撃を行う。イメージから離れた動きだったら、反射のみで戦うのだ。

無意識レベルに記憶させた攻撃の例としては、

シェ・ファが一人に対して物理的な攻撃を仕掛けた場合、仕掛けられた一人はギリギリで交わり、残りの一人が死角から物理攻撃を行う。

などがあり、数千のパターンを私とファイアレスは記憶している。解り易く言えば、現在の私とファイアレスは、『無意識の記憶』によってコントロールされる操り人形だ。

反射は、単純な動作だ。最優先で、シエルファイアとリルファイ、キュアを守り、その次に自分の身を守る。隙があれば攻撃する。

シェ・ファは心を読むし、動作も超高速だ。だから、私達の考えた対策はそれしか無かったのだ。

最初にシェ・ファの姿を認識したら、一秒後に意識を消して彼女に近付く。半径10mに到達時点で、極術「遮断」を発動する。

「ルナさん待って、お願い！」

「ババ、ダメー！」

「ファイアレス様ああ！」  
三人が、私達を追って来ていた。

「またな」  
「またね」

私とファイアレスは彼女達に微笑んだ。次に彼女達の声を聞けるのは……、新しい命で巡り会った時だ。

「キンッ！」  
剣を交叉させ、極術を発動させる。これが彼女達の見ると、私達の最後の姿になるだろう。

「ゴゴゴ」  
音と周りの景色が消えた。代わりに現れたのは、上が雲一つ無い晴天、下が星々の浮かぶ闇の海という異空間だ。

極術、『遮断』は、現在の世界から隔絶された空間を創りだし閉じ込める。閉じ込められた者は、自力では脱出不可能だ。脱出可能なケースは二つ。一つは、私とファイアレスが『接続』の極術を使い、『遮断』を解除する場合。もう一つは、私達が二人とも死んだ場合だ。

私とファイアレスに、『接続』を使用する記憶は無い。だから、この空間が消えるのは後者でしかあり得ない。

「極術で自分達ごと私を閉じ込めるとは、考えましたね。いいえ、考えた通り無意識に動きましたね」

白いローブを、ふわふわ靡かせ感情の籠らない声が響く。相変わらず鋭い洞察だ。

「心が読め、物理攻撃、神術、魔術による攻撃が無効だという貴重な情報を寄越したのはお前だからな」

私の言葉に動じる様子は無い。閉じた瞳は閉じたままで、ピクリとも動かない。

「そうですね。しかし、敢えてもう一度言います。何をしても無駄です。もし私が、この異空間の破壊に注力すれば、28秒で破壊可能です」

破壊可能という事は、すぐには脱出不可能と暗に示している。十分だ、28秒も隙は与えない。予定通り戦うのみ！

『第三楽章『封滅』』

私がシェ・ファに向かって剣を振り下ろす。同時に別角度から、ファイアレスが魔術を放つ。

だが、剣は感触無く空を切り、魔術は届く前に掻き消される。ファイアレスの剣も、神術も結果は同じだった。

それでも、彼女を『遮断』の破壊に注力させないという意味では、私達の攻撃は成功しているようだ。

「仕方無いですね。貴方達は『最後』にする予定でしたが、私が先に進むには此処で貴方達を消す方が効率的だと理解しました。貴方達は今までのエファロード、エファサタンよりも圧倒的に強い」

その言葉が終わるか終わらないかの刹那に、白い雷光が彼女の体から発せられる！

私とファイアレスは、反射的にそれを回避する為に『転送』を使用した。

「まさか避ける事が出来るとは。著しい進歩を認めます。しかし、この『白光』は攻撃対象を半永久的に追尾するので、避け続けても意味はありません」

それも想定済みだ。記憶・パターンの467番目、

敵の攻撃が自動追尾型の場合、剣に最高の神術又は魔術を込めて攻撃を弾く。

私達は各々、『光』と『闇海』を剣に込めて、シェ・ファの白光に一閃を放った！

「ギギギ」

白光と剣の衝突、衝撃で体がビリビリ震えている。白光は、シェ・ファにとって通常攻撃である筈だが、何と重い一撃なんだ！

だが、この程度なら押し勝てる！  
「バッシュ！」

私達は、白光を真つ二つに切り裂いた。攻撃を弾けると言うのは大きな前進だ。

「素晴らしい。ですが、これで貴方達を抹殺するのに必要な力の匙加減が解りました。次の私の攻撃で貴方達は死にます」

光剣と闇剣が発動している時に、敵に隙がある場合『転送』で近付き全力で斬りかかる。

私とフィアレスは記憶通り、転送の直後思いっきり剣を振り下ろした！

「ガッ！」

初めて手応えがあった！光剣と闇剣は擦り抜けず、攻撃可能なのか？

「まだ解らないのですか？」

私の剣は彼女の右掌、フィアレスの剣は左掌で止められていた。しかも、掌には傷一つ無い。そして次の瞬間、

「バキインツ」

彼女が軽く剣を掴むと、私達の剣は折れた。この星で最強であろう、二本の剣が。

「冥土の土産に良い事をお教えしましょう。私が一体『何』で構成されているのか」  
足が竦んで動けない。全身が震える。恐怖の奔流が体中を駆け巡る。

「私は、『精神体』です」

何だそれは？聞いた事が無い。

「生命には二種類のエネルギーが備わっている事は御存知でしょう。一つは物体エネルギー。もう一つが精神エネルギーです」

彼女は淡々と話す。この話は私達にとって有利なものだろうが、例え有利な情報を与えても彼女の絶対的優位性は崩れないに違いない。

「人間も、天使も、魔も貴方達も全て、物体エネルギーから成り立ち、精神エネルギーを内包しています。勿論、貴方達二人は人間の数億倍の物体エネルギーから成り立つ体を持ち、同様に全生命の中で最高の精神エネルギーを持っています」

それは解っている。だからこそ、私達は星を治める事が出来た。

「精神エネルギーは、物体エネルギーよりも高次なエネルギーです。精神エネルギーによる神術や魔術が、物体を攻撃するのは簡単ですが、その逆は限りなく大きな力を消耗します。只の剣が、神術そのものを掻き消す場合を考えればお解りでしょう」

大体言いたい事が解って来た。聞きたくないが、聞くしかない。

「『精神体』は、精神エネルギーの結晶です。この星に存在する精神体は私のみ。無論結晶である以上、内蔵しているエネルギーは貴方達の比ではありません。人間と貴方達の精神エネルギーの差など、私からすれば瑣末なものです」

要は、彼女が私達を攻撃するのは容易く、精神エネルギーにも歴然たる差がある以上、私達が彼女にダメージを与えられる可能性はゼロだと言う事か。

「その通りです」

状況は極めて絶望的だが、逆に吹っ切れた。やはり、私とフィアレスは此処で死ぬ。記憶パターンの1番目を実行して。

「貴方達が何を企てているのかは読めませんが、その企ては徒労に終わります。先程も言った通り、私の攻撃で貴方達は死ぬのですから」



その瞬間、彼女の体が『白い球体』に変貌する。そして……

「先程の白光を10万倍にして放ちます。これで、避ける事も掻き消す事も不可能」  
確かに不可能だ。私はフィアレスと目を合わせる。記憶パターンの2番目……

「さようなら。貴方達の時代は終わりです」

無数の光線が、私達を全方位から包む！私は目を閉じ折れた剣を突き上げた。

「キンッ！」

折れた二本の剣が交叉する。

「極術『光闇』！」

『光』と『闇』、神術と魔術の頂点。それを融合させた極術は、破壊力も究極のものとなる。

「ピカッ！」

「チヂチ」

私達を包み、焼き尽くそうとする白光。それを内側から突き崩す為に全力を込めた光闇。

体力と精神力の消耗が激しい……。そして、耐え難い激痛！体の内側から、無数の鋭い針で突き刺されているかのようにだ！

だが此処で諦めては、私達だけでは無く、愛する者達まで同様に死を迎える事になる！

「（本当に久し振りだね。こんな風に、同じ目的の為に力を尽くすのは。）」

「（ああ、こんな状況だがお前がいると心強いよ。）」

私達は、更に内から精神力を絞り出す。この白光を退けた時、私達は記憶パターンの1を実行する事になるだろう。

「うおおお！」

「うあああ！」

咆哮が銜する！臨界点を超えて肉体の崩壊が始まる！

その時、

「。バアアン」

光闇が白光を消し去った！

だが、私達の精神力は残り僅かだ。辛うじて精神の安定は保っているが、思考能力の低下は否めない。

「驚きで言葉もありません」

あれだけの攻撃を放ちながらも、彼女は悠然と浮かんでいる。そもそも精神体である彼女には、肉体的な疲労など無いのだろう。

「しかし、これで万策が尽きます」

彼女の姿が消えた！？

「ブシュッ」

四肢に痛みが走り、音が耳に届いた頃には彼女は再び目の前に現れていた。一体何が起きた！？

彼女の指だ。指が私達の四肢を刻んだのだ。攻撃を受けた四肢は、血を流す事も無く真っ白な大理石のように変化し、動かさない。セルフアスを殺した攻撃と同質のものだろう。

「キイーン」

耳障りな音だ。次は何だと言うのだ。

「剣と鎧の破壊です」  
砂のように剣が崩壊する。同時に、私達を守っていた極術による『結界』と、鎧も消滅した。  
「貴方は動く事が出来ず、武器も無い。それにより、私に対抗出来る唯一の手段である極術の使用も不可能となりました」  
私はフィアレスに視線を送る。二人、同時に声を上げた。

「『絶体絶命』だ」

その言葉を発した瞬間、私達の精神力が一気に増大する！肉体のエネルギーを全て精神力に変換しているのだ。

状況を理解するのに、ほんの一瞬の隙を見せたシェ・ファを極術の『不動』が捉えた。

「騙しましたね。貴方は、極術を發動させる際に『わざと』二本の剣を交叉させていた。しかも、『もしなければ發動出来ない』と意識しながら」

捉えられて尚、彼女の表情は変わらない。冷たく澄んだ無感情な声も。

「ああ、そうだ」

「シェ・ファ、君は再び深獄で眠れ」

記憶に焼き付けた、最も大事な使命。記憶パターンの1……

ルナリート、フィアレスのどちらかが死の淵に追い遣られ、尚且つ「絶体絶命」というキーワードを二人が発した時、二人の命を代償として極術『封滅』を發動させる。

「封滅！」

封滅。深獄を構成していた極術。時の流れを捻じ曲げ、時の進行を限りなく遅くした空間を創り出す。その外層は物理的な干渉を遮断し、外的な力では決して壊れない。

過去、私達は12回この極術を用いた。私達の力をも凌駕する資質を持った魂が現れた時に、シェ・ファは、それらの魂を全て受けた器。それを器ごと封じなのだ。私達二人の命ごとくでは、『永遠に』封じる事は出来ないだろう。

だが、構わない！

傲慢かもしれないが、愛する人が少しでも長く生きていてくれるなら。

フィーネ、シェルフィア、リルフィ、今までありがとう。私の人生は最高に輝いていたよ。  
兄さん、父さん、今からそっちへ行きます。

リバレス、こんな私を怒るだろうな。

自分を構成するエネルギーが全て、『封滅』に吸い取られていくのが解る。指先、爪先、四肢の感覚が無くなる。そして、視力も失われた。もう何も見えはしない。

「うおおお」

「これで終わりだ！」

激痛を伴っていた精神の消耗が、臨界点を超える！

精神が崩壊を始めた。私達が、代々受け継いできた『神と獄王』の記憶が砂のように消えてゆく。次に感情の大部分が消えた。もう、憎しみや悲しみを感じる心は、私達には存在しない。

更に記憶が崩れてゆく。自分が生まれた頃、天界での生活が目まぐるしく流れて消えた。死ぬ前は、記憶が巡るといいうのは本当のようだな。この世界に別れを告げて、魂の世界に行く為の通過儀礼なのかもしれない。否、この世界からの最後のプレゼント、最後の夢なのだ。

そして、私にはフィーネと出会った後の記憶と心を残して空っぽになった。  
永遠の心、それだけを残して。

「世界は、束の間の平穏な眠りを得る。終焉の無い夢を見て。醒めた時、それが真の『心』だよな」

シエ・ファの言葉が脳に直接響き、彼女は『新たな深獄』に封じられた。  
『遮断』によって創られたこの空間が消えて行くと共に、私の意識は闇に包まれた。

↳ 第四楽章『再離』

暗い、何も見えない。温度も感覚も失われている。私は何処だ？既に死んだのだろうか。だか、微かに意識の外側から声が聴こえる。

「ルナさんっ、起きて、お願い！」

シエルファイアか。何という僥倖……。生きている内にもう一度声が聞けるなんて。

「パパ、いやああ！死なないで！」

リルファイ……。私とシエルファイアの娘。心から人の痛みを理解し、労わる事が出来る子。

「良かった。二人とも無事で」

囁き程度かもしれないが、何とか声が出た。

「全然良くないわ！約束……したじゃない。私とリルファイを置いて行かないでっ！」

こんな小声でも二人に聞こえているという事は、私はきつと二人に抱きかかえられているのだろう。

シエルファイアは本気で怒っている。彼女のこんな怒声を聴いたのは初めてだ。

「ごめん……。でも、君がもし私の立場なら、きつと同じ事をしたと思う」

「パパ！『蘇生』を使うから、喋らないで」

蘇生か。彼女は蘇生まで使えるようになったんだ。飛躍的な成長だ。これなら、心配は要らない。この星の平和は、リルファイに託す事が出来る。だが……

「駄目だよ、リルファイ。私にはもう何も……効かない」

辛うじて保たれた意思が、崩れようとしている。・・・

これが全て崩れた時、私は本当の『死』を迎えるだろう。

「ふへ……聞こへ、二人とも」

一言喋る度に、声が出なくなっているのが解る。勿論、意思を転送して会話する余力など無い。

「私には……もう時間が無い。だから、大切な事を聞いて欲しいんだ」

悲泣の音が響く。私が失われる事が解ったのだろう。でも……

「フィーネは、自分の命が断たれようとした時……私に言ったよ。『笑って』って。私も……」

二人の笑顔が大好きだから、ずっと笑顔でいて欲しいんだ」

泣き声のボリュウムが下がる。二人で懸命に笑おうと努力している様が、脳裏に浮かぶ……。真っ直ぐで、自分よりも愛する人を大切に作る二人の優しい顔が。

時間は……あと僅か。

伝えられるのは、本当に大切な事だけ……

「シエルフィア、愛してるよ……。私は、フィーネの君から『心』を貰い……。シエルフィアの君から『リルフィ』と幸せな時間を貰った。今の私があるのは……。君のお陰なんだ。どんなに辛い壁でも乗り越えられたのは……。君が隣にいたから。君が私を信じていてくれたからなんだよ」

「ルナさん！ルナさああん！」

シエルフィアが、声を限りに私の名前を叫ぶ。その声も……。さっきより、どんどん遠ざかっている。

「リルフィ、大好きだよ。私達の宝物。生まれてくれて……。本当にありがとう。親として……余り傍にいてあげられなくて、ごめん」

「そんな事無いよ！パパは、いつだってわたし達の傍にいてくれた。だから……。わたしの我が儘かもしれないけど、行かないで……。ずっと一緒に……。仲良く暮らしたいの！」

我が儘なんかじゃないよ、リルフィ……。大切な人を失うのは……。身を切るより痛いんだ。でも……。私はもうすぐ行かなければならない。

「フィーネと出会い、恋に落ち……。一度の離別を経て、シエルフィアと再会……。そして、リルフィを授かった。共に暮らし、共に眠り……。過ごした日々を私は死んでも忘れないよ。手を繋ぎ、シルドの丘を三人で歩いた事……。リウォルの湖に沈む夕陽、映える月光……。共に過ごした時は永遠に色褪せはしない」

自分の声も、殆ど聞こえない。お願いだ……。もう少し……。時間を……

「だから何も……。心配は要らないよ……。フィーネと同じように、私も……。必ず……。戻るから。もし……。二人が生きてる間に……。戻れなくても……。その時は……。私が見つかるから」

「うん……。グッ……。解った。ずっとあの場所を待ってる。寂しいから、早く戻ってきてね……。何度巡り会っても、永遠に愛してるわ」

シエルフィアの唇が、私の唇に重ねられた。感覚は無いが、直感でそう感じたのだ。

「パパ……。今まで育ててくれてありがとう。わたしは、パパとママの間に生まれて幸せよ。グッ……。ママと一緒に待ってるね。もし、パパもママも見つけられない時は、わたしが二人とも見つけて……。また皆々家族になるの」

三人でまた家族か、最高だな。私達なら出来るさ……。何度でも、何度でも。

「私……。ちよ……。長く眠るけど……。二人共、体には……。気を付けて……。元気で……。暮らすんだよ」

「うん……。離れるのは、永遠の内の一瞬だから我慢するわ」

「パンも……自分を労わってあげてよ」

「さよならは必要無い。私達に、『終わり』など無いから……  
少しの間……離れて眠るだけ。だから……」

「おやすみ」

§第二章 今を生きて§

— 完 —



## 第一節 記憶の層

### 第三章 心を受けて

私は……『何』だ？

私とは『何』を意味する？

肉体と精神を兼ね合わせたものを『私』と呼ぶならば、『私』は『私』では無い。だが、精神は『ルナリート』のままではいらぬ。記憶は鮮明で、思考能力も平常通りだ。だから、『私』を『私』と称しても問題は無いだろう。

私は……完全に肉体を失っている。

動かすべき体が無いのは妙な感覚だ。無意識に行っていた呼吸、心臓を動かす事、意識的に動かす事の出来た体は何処にも無いのだ。

此処が何処かも解らない。否、視覚も聴覚も、触覚さえも持ち合わせていない私が場所を認識するのは不可能だ。

残されているのは、『心』と『記憶』のみ。

痛みや苦しみ、悲しみによって顫れる体の反応（震えたり涙を流したりする反応）は最早私には存在しない。

フィーネ、シエルフィア、リルフィの温かさを記憶の底から呼び覚ます事は出来ても、その温かみを腕や胸に感じる事は無いのだ。

これが『死』か……

『私』という精神が、たった一人揺ら揺らと、真っ黒で何も見えない水の底に沈んでいるようなイメージ。遙か上、無限に広がる水面……。決して浮かび上がる事出来ない、深い深い水底。

だが不思議と孤独感はない。水底でたった一人なのに、愛する人々に囲まれて温かな毛布で眠るかのような安堵を覚えるからだ。

私が死に、この『温かな毛布のような世界』に来てどれぐらいの時間が流れたのだろう。その前に、この世界で時間は流れるのか？

解らない。問いかけに答えてくれる者もいない。如何に私は肉体的なもの、物質的なものに頼ってきたのだろう。

考えるのに必要な時間が生前の世界と同一だとするならば、私がこの世界に来てから1ヶ月が経過した事になる。

この1ヶ月で様々な事が解った。まずこの世界にいるのは、私一人では無い。この世界で、何か行うのに必要なのはたった一つ。『実現したい事を心に強く念じる事』だ。見たいと思えば、『見たい』と念じる。そうすれば、見たいイメージが精神の中に展開されるのだ。

私は最初に、この世界を見たいと何度も念じた。すると、漆黒の闇の中から無数の小さな光が浮かび上がり、その一つ一つの光は、『魂』だという事も解った。

光に対して『貴方は此処で何をしていますか？』と念じると、『解りません。私は死んでしまつて、此処にいるようです』と返答が返つて来たからだ。

無数の光は、私と同じくシェ・ファに殺された者。

次に解つたのは、この世界は『記憶の層』と呼ばれている事だ。多くの魂が、同一の認識を持っていた。

「此処は『記憶の層』で、暫く此処にいれば『次の世界』へと誘われるらしい。何故そのような認識を持つているのか、私には解らない。だが彼等はそれを信じて疑っておらず、はつきりと断言するので、他者に納得させるだけの迫力を持っている。

この世界を一言で形容すると『停滞』だ。唯、己と向き合うのみで、変化は無い。だが束の間の時を経て、その認識が誤っていた事を知る。

**『停滞』では無く、『溶解』が最も適切だったのだ。**

私がいいつも通り周りを見渡していると、突如数千から数万の魂が消えた。今の所、消えた魂は戻ってきていない。彼等は、『次の世界へ誘われる』事を認識していた者達だった。私は……この先一体どうなるんだ？

何時の間にか眠っているような精神状態に陥り、記憶が次々と蘇ってきた。死ぬ前に崩れた記憶までもはつきりと。天界での暮らし、リバレスとの出会い。随天、フィーネと愛し合い……彼女は死んでしまった。涙など出はしないのに、心がギュッとと抓まれて、泣いているように感じてしまう。

フィーネ。死んだ彼女もこの世界に来たのだ。私との約束を信じて。

孤独感も無く、安堵を感じるこの世界。だが、停滞した時と突然消える魂。さぞ不安だっただろう。今の私と同じように。

「シエルファイア……リルファイ、寂しいよ」

声も出ないが、私の精神はそう呟いていた。二人は今頃どうしているだろう？

私の為に、泣いてくれていているんだろう……。肉体は主である魂を失っても、そのまま其処に残る。私の亡骸に縋る二人を想像するだけで、胸が締め付けられるような思いがする。

だがそれよりも……それよりも二人は心を抉られて傷付いているのだ！

「本当にごめん」

届けたくても決して届かない。声にならない言葉。流したくとも流せない涙。

その時だった。どんな魂とも異なる、異質な声が私の意識に響いたのは。

「此処は『記憶の層』。魂に刻まれた記憶を洗い流し、生前の柵から解き放つ為の層」

荘厳な声、疑惑を挟む隙など微塵も無い整った声。一体私に何が起こったのだ？

「記憶は解放の妨げ。流れた記憶は層に蓄積され永遠となる。何も心配は要らない。魂が記憶の呪縛から解放された時、次なる世界への飛翔が可能になるのだから」

声は其処で終わった。だが、何度も何度も私の精神の中で言葉が繰り返される。

「記憶を洗い流し……呪縛から解放された時、次なる世界へ」

皆、生きてても死んでも記憶の中で葛藤しているのだ。

幸せな記憶、悲しい記憶……。いつも記憶は、精神の中心にある。記憶があるから人は苦しみ、記憶があるから人は強く生きていける。

此処に来てから、何度記憶を巡らせた事だろうか？その度に、私の精神は大きく揺れ動く。無限の静寂、流れているかどうかとも解らない時。自分の知識では何一つ読めない先。その中

に浮かぶ、『私』という脆弱な精神。

「記憶を洗い流せばどれだけ楽だろう」

ふとそんな考えが過ぎったのを必死で打ち消す。

「フィーネは記憶を失わずに戻ってきた！ちゃんと永遠の約束を寸分も忘れずに」

「だが、このまままで転生する事が可能なのか」  
「黙れ！」

「フィーネとお前は違う。彼女を愛したのは、彼女の強さがお前に無かったからだ」  
「……そうかもしれない。でも！」

「お前は、シエルフィアとリルフィとの約束を破った。自ら死を選ぶ事で、二人にどれ程の苦痛を与えるか知りながら」

「二人を守る為にはそうするしか無かったんだ！」

「記憶を失っても誰も咎めはしない。次に生まれ変わる時、彼女達が再び記憶を持って現れるかも知れないのだから」

「そんな事は無い、何度でも思いだせる筈だ！」

自己の記憶、精神の衝突……。このままでは、私は私で無くなってしまう！

だがその時、凧いだ水面のように微笑むフィーネがはっきりと私の前に『現れた』。精神の中に像を結んだのでは無く、目の前に現れたとしか思えない！

「ルナさんは決して弱くないわ。怖がらないで、いつもの靱さを取り戻して」

彼女の手が私に触れる。否、私の魂に……  
何と温かい、そして優しい感触。

「ルナー、しっかりしてよねー」

リ……リバレス！？

私の周りを嬉しそうに飛びまわるその姿は、見間違えようも無い！  
やがて彼女は私の肩、私の魂に留まった。懐かしく愛しい存在。

二人が私と溶け合ったと思った瞬間、私は別の風景の中にいた。

柔らかなベッドの上……。リルフィを挟んで、シエルフィアと共に。

「ルナさん、未来を信じて。必ず、また三人で会える」

「パパは何でも一人で抱え込もうとするのが悪い癖よ。パパは一人ぼっちじゃない」

私は微笑んだ。そうだ、何を恐れる必要がある？

永遠を誓った約束を信じ、二人を想うだけじゃないか。

待つ必要も無い。このまま行こう、次の世界へ。

## 第二節 心の層

白。

意識が、滲み一つ無い潔癖なまでの白に包まれている。真っ暗な水底をイメージさせる『記憶の層』とは対照的だ。此処も何らかの『層』なのだろうか？

周りを『見よう』と念じてみても、意識に映るのは唯、『白』。私の他に魂は居ないようだ。だが、この白には暖かな春の光と、穏やかな海辺の風を連想させるような心地良さを感じる。苦しみも悲しみも何処かに置いて、この心地良さにいつまでも浸っていたい。そう感じさせるような、この世界。

不変の白、永遠の優しさを感じるこの世界に比べ、私は如何に揺らぎやすいのだろう。

私が生まれて、物心が付いた頃に感じたのは、『自分が他者とは違う』という悲しみと恐怖。親も不在で、自分が何者か解らないというのは、足場の無い中空を一人彷徨っているのと同じだ。認めたく無かった、自分だけが特別だという事を。そのような状態で、ずっと一人でいたならば私は恐らく自暴自棄になっていただろう。だが、私を支えてくれた大切な仲間がいる。ジュディア、セルファス、ノレッジは私の友達になってくれた。他者とは違う私を受け入れ、同じ目線で一緒にいてくれた仲間。そして、ハルメス兄さん。兄さんも他の天使達とは異なっており、私と同じような境遇だった。彼は、私に様々な事を教えてくれた。生きる事、自由の尊さ、そして大切なものを守るといふ『慈愛』。私は仲間のお陰で、希望を持って生きる事が出来たのだ。

慈愛を自分が他者に向けられる事に気付いたのは、リバレスと出会ったお陰だ。親を失い、泣いてばかりいた彼女。彼女の親代わりとなり、彼女を育てているつもりが、私自身の成長に繋がっている事を後で知る。

怒り、それを生まれて初めて爆発させたのは、神官ハーツの暴虐によってだった。全身の毛が逆立ち、高まる鼓動。そして、際限無く溢れる破壊の力。あの時、父である神に止められないければ、私の暴走は何処まで続いたか解らない。

そして人間界へ落ち、フィーネと出会った。彼女の心は悲しみを経ても靱く、光に満ち溢れ、私の心までも照らしてくれた。彼女と共にいるだけで幸せで、触れ合うだけで愛しさが全身を駆け抜けた。愛する事、とても尊く強い気持ち。永遠を願い、それを誓う約束。私はこの約束を何度生まれ変わっても忘れはしない。死しても尚、この魂にしつかり刻まれているのだから。次に思い出すのは、憎しみと絶望、そして希望だ。天界にいた時ジュディアは私を愛しており、人間界へ落ちる前に『人間と恋に堕ちるな』と忠告した。だが、私はフィーネを愛してしまった。ジュディアは嫉妬で怒り狂い、フィーネを殺した。私はその時、身を焼かれるような憎しみに包まれた。愛する者を奪われた怨みは、どんな理由であれ決して消せはしない。今もその光景を思い出すと、心の中でどす黒い炎が巻き上がる。フィーネの魂が私から離れた時、私は死にたくなるぐらいの絶望を覚えた。愛する者を失った絶望は、注いだ愛情に比例する。絶望からは、リバレスの支えと『永遠の約束』によって救われた。再び巡り会うという希望、それだけが私の生きる糧だった。

魂の邂逅、離別、そして再会。フィーネはシェルフィアとなり、私の元へ戻ってきてくれた。永遠の約束が守られた事、死は終焉では無い事の証明。この時の喜びもまた、私の魂に深く刻まれ消える事は無い。

死闘と、多大なる犠牲の果てに現在がある。シェルフィアとリルフィ、私の命よりも大切な二人だけは死なせずに済んだ。

悲しみ、恐れ、慈愛、怒り、愛、憎しみ、絶望、そして希望と喜び。それらは全て、心(Heart)の一部だ。私は、『心』によって支えられ、時には支配されて生きてきた。

心は複雑で繊細に出来ている分、傷付きやすい。悲しみは心を傷付け、憎しみは心を折り、絶望は心を凍らせる。無論、『傷』は生きていく上で必要なものであり、それを乗り越えて人は成長する。だが、生きている上で傷は完治する事は無い。心の何処かに、傷の痕跡は残っているのだ。

それが、今までの認識だった。

この無限と静寂の白は、心の奥底まで沁み入りゆっくりと傷を洗う。まるで、不純物の無い清涼な水で果物を洗うかのように。そして、洗われた傷は完全に塞がるのだ。

憎しみと絶望に彩られた筈の記憶を辿っても、最早心に痛みを覚える事は無い。

この場所は、『心の層』だ。誰かに聞かずとも、心を洗う『白』がそう告げている。

何と精巧に出来ているのだろう。記憶の層は魂から記憶を消し、心の層は傷を癒す。

魂は、生前に左右されない。皆、死して此処に来れば、傷の無い希望に満ち溢れた魂へと還り、再び生へと旅立つのだから。

人は、果て無き死と生を繰り返す。どんな辛い生を送ろうと、此処に来れば忘れ、癒される。何の為に人は生き、死ぬのだろうか？

死が新たな生への準備期間であるならば、魂にとって重要なのは生だ。

生が死という目的地へ向かう為のものならば、逆である。

だが、私は思う。どちらも大切なものだ。

結局の所、生きても死んでも、大切なものを見付けて懸命になるしかないのだ。

だから私は進み、大切な二人を捜しに行く。

白が、一段と濃くなる。

私は躊躇い無く、一番濃い白に魂を委ねた。

### 第三節 魂体

此処は何処だ？

何故私は自分の肉体を認識出来る？

さつきまで心の層に居た筈なのに、今はS.E.N.Nに似た光の下、クリスタルで出来た平原の上を『歩いて』いる。目の前が見えるし、指先の感覚も生前と変わらない。それどころか、無意識に呼吸し、心臓が奏でる鼓動まで聴こえる。

私は蘇ったのか？

それにしては、この非現実的な光景に違和感を覚える。私は歩き続ける。平原で一際明るい場所へ向かって。

明るい場所、其処に辿り着くと私は閃光に包まれた。

「久しぶりだな、ルナリートよ」

聞き覚えのある懐かしい声、荘厳さに秘められた慈しみ……。まさか！？

「父さん……、なのですか」

光が薄れ、その中から父の姿がもどかしい程ゆっくりと現れた。

「そうだ、よく来たな」  
頭が何かを考える前に、私は父に抱き付く。父は生涯を天界の維持に捧げ、私の前に現れた時は死の間際、それも敵としてだった。最期には分かり合えたが、それも刹那……。父は砂のように消えたのだ。

「父さんっ！お会い出来て嬉しいです。でも、ごめんなさい……。貴方に貰った命、使い果たしてしまいました」

父は目を瞑り何も言わず唯、私の頭を撫でる。私はこれまでの事を思いつくままに話した。

「私の選択の結果がこれです。自分の信念に従い歩んだ道を後悔したりはしませんが、多くの犠牲を出してしまいました」

頷く父、全てを見透かして私の言葉が終わるのを待っているのだろう。

「存在シエ・ファは『封滅』によって、封印しました。何万年持つかは解りませんが、少なく



とも今世界で生きている人々の前に現れる事は無いと思っ  
ています」  
私  
が其処まで話し終えた時、父の表情が変わった。目を開き、冷静さと厳しさを顔に浮かべ  
る。

「二年だ。シェ・ファの力を封じられるのは長くて二年だ。シェ・ファは、過去に我々が封じ  
てきた12の魂を全て内包している。各々の魂を封じる事は出来ても、一つに纏まった『存  
在』を神と獄王の力で完全に封じる事など出来はしない」

そんな、まさか!?

二年後、シェルフニアとリルフィの元に再び死の脅威が訪れるというのか!

「お前達の判断は正しい。若い神と獄王、その完全なる力の全て、命をまるごと『封滅』に使  
った。そうでなければ、今頃全ての生命は死を迎えていただろう」

私は束の間、項垂れる。だが、直ぐに気を持ち直し強い口調で言葉を発した。

「私は転生し、シェ・ファを倒します。倒す方法を今は思い付きませんが、必ず倒してみせま  
す」

だが、父は首を振る。

「『存在』はこの星の核(コア)であり、それを破壊するのはこの星の消滅に等しい。倒すの  
は、『存在』に内包されている12の魂。つまり『存在』をコントロールする者だ」

『存在』をコントロールしているのは、『精神体』。否、彼女の口振りから考えて『存在』  
自体が精神体だ。この星で唯一の、精神エネルギーの結晶。その精神体を動かす12の魂。そ  
れだけを倒す。どうすれば?

「其処で考えても答えは出ない。お前の長所は、強い信念とそれを活かす行動力の筈だ。我以  
外の者にも話しを聞くが良い」

私は強く頷き、走り出そうとする。其処で呼び止められた。  
「この世界の説明をしていなかったな。簡潔に話す。お前なら一度で覚えられるだろう」

この世界は『魂界』。我々が魂を送ったり、取り出したりする事が出来る界だ。

我々が生きている間に干渉出来るのは、魂界の表層のみ。お前も通ってきたから解るだろう  
が、魂はこの界の内部で純潔なものとなる。記憶の層、心の層の作用によってだ。記憶の層や  
心の層、そして今居る『魂体』に神や獄王が干渉する事は出来ない。生前の世界とは完全に独  
立したものだと思っ  
て良い。

この世界の構造は、球を半分に切った真円の上をイメージすると理解し易い。最外殻が記憶  
の層、記憶の層から中心に向かって心の層。更に中心に向かうと、此処『魂体』に辿り着く。

魂体は4つに分かれており、それぞれ『神魂体』、『獄魂体』、『天魂体』、『魔魂体』と  
いう名称がある。神魂体には、神の魂。獄魂体には獄王の魂。天魂体には天使と人間の魂。魔  
魂体には魔の魂が転生前に集まるようになってる。

魂体に於いて、生前の五感が備わっているように感じるのは転生準備の為だ。通常の魂は、  
死後記憶が消されて心が浄化される。生前に体得した感覚も例外無く消える。その状態でその  
まま転生すると、転生後の肉体操作に支障を来す場合があるからな。

お前はさっきからキョロキョロしているが、察しの通り此処は神魂体だ。ハルメスも傍にい  
る。行くが良い。  
「はいっ!」

私は父が指し示す方に全力で走った。すぐ傍に会いたかった兄がいるのだ!

空から降り注ぐ光、その光に負けないぐらい輝く光柱。此処から目算で2km先。あの光が  
兄さんだ。直感がそう告げている。

遠い、たかが2kmなのに感じる距離はそれを遥かに凌駕する。

「ルナっ!」

胸に響く声、何度も記憶で反芻した声。私はその声が聴こえた瞬間、涙が止まらなくなった。  
涙で何も見えず、声も出ずにいた所、不意に暖かい感触に包まれる。この抱き締められる感触、

目を開けて確かめる必要も無い。

「泣くなよ、俺まで泣けてくるだろ？」

「はい……、ごめんなさい。余りにも嬉しくて」

私達は暫くそのまま、涙が止まり言葉を発せるようになるまで待った。

「元気そうだな、って言いたい所だが、お互い既に死んでいるからな」

兄さんが笑う。この人が言うと、重い話題でも軽く聞こえる。まだまだ私は敵わない。

「そうですね、でも兄さんに再会出来て本当に良かった。話したい事が山程あって」

私は兄さんの手をギュッと握り締める。溢れる記憶と言葉達、今にも喋り出そうとする私を兄さんは制止した。怪訝な顔で兄さんの目を見ると、その視線は私の横に送られていた。

「紹介するよ、ティファニーだ」

私は兄さんの手を離し赤面した。隣にいたのに全然気付かなかったからだ。

「初めまして、ハルメスからいつも話は聞いています。いいえ、彼が生きていた頃、私は彼の魂と同化していたから貴方の事は良く知っているわ。生真面目で、責任感が強い所が兄弟そっくり」

クスクスと可笑しそうに笑う。だが、全く嫌な感じはしない。寧ろ、周りの人々の心を優しく撫でるかのような、温和な笑い。

「こちらこそ初めまして、ルナリートです。兄さんにも、貴方にもお世話になっています」

「そんなに硬くならないで。気楽に行かなきゃダメよ」

この女性が兄さんの妻なら納得出来る。二人とも器が大きい。

「二人はよく似ていますね」

私が思わずそう漏らすと、二人は顔を見合わせて笑った。

「ははは、よく言われた」

「そうね、最初は余り似てなかったけど、一緒にいる時間が長いとやっぱり似てしまうものなのよ」

私達は時間を忘れて、生前の話をした。

そして、話題が自然と真剣なものになる。

「あの時は勝手な事をして悪かったな」

「あの時とは？」

「俺が獄界への道を閉ざす為に死んだ時だ」

全員が沈黙に包まれる。あの時、大切な者を三人同時に失った。父さん、兄さん、リバレス……、

「気にしないで下さい。兄さんのお陰で平和を築く事が出来たんです」

「ああ、済まない。死に逝く者はいつも勝手だからな」

その通りだ、私もシエルフィアとリルフィに無断で死んだ。兄さんの気持ちは、痛い程よく解る。

「ところで、リバレスを知りませんか？」

私は場の空気を変えようと、そう言った。リバレスに早く会いたい気持ちも勿論強い。

だが、兄さんとティファニーさんは目を丸くして顔を見合わせた。

「何か拙い事を言いましたか？」

再度二人は顔を見合わせる。

「リバレス君は既に転生したよ」

「此処にいた期間は短いわ」

「えっ！そうなんですか」

私は二人の顔を交互に見る。何故か二人とも笑っている。

「お前の鈍さは折り紙付きだな。ある意味感心するよ」

「リバレスさん、可哀想」

そうか、私は生きている間に彼女を見付ける事が出来なかったのか……。転生後、しっかり捜そう。

「すみません、気付いてやれませんでした。私が転生したら必ず見付けます」  
また二人が顔を見合わせる。だが今回は直ぐに兄さんが言葉が発した。  
「そうだな、お前が自分の力で見付ける方が彼女は喜ぶ筈だ」  
ティファニーさんが頷く。私も強く頷いた。

「さて、そろそろ本題に入ろう」  
兄さんの声で三人が一樣に姿勢を正し、鋭い目付きに変わる。

「問題は、『存在シエ・ファ』を止める力を持つ者は誰もいないという事だ」

私は頷く。エファロードとエファサタンの命を注いでも一時的な足止めしか出来なかった。  
「現実的に有り得ないが、例えルナと俺、否、全てのロードとサタンが転生したとしてもシエ・ファを倒す事は出来ないだろう。何故なら、俺達の個別の力は彼女に遠く及ばない。同時に全員が命を捨てて彼女の封印に注力したとしても、やはりそれは一時的なものにしかならないんだ」

「それが最善で、唯一の策だと思っていました」

私は項垂れて呟く。私とファイアレスの二人で無理なら、全員で封印するしか無いという結論だった。

「それが出来ない理由があるの。魂界は、かつての神々と獄王達の魂によつて支えられている。転生を行う事が出来るのも、彼らが魂界に留まってくれているから。通常、現世にいられるのは神と獄王一人ずつよ」

そういう事か。全員がもし転生すれば魂界は失われる。そうなれば、星に新たな生命が生まれてくる事は無くなる。唯、死を待つだけ……

沈黙の時間が流れる。その沈黙を、兄さんが思いがけない言葉で破った。

「たった一つだけ方法があるが、それはお前が見付けなければならぬ。その方法は、あらゆる責任と苦しみをお前に強いる上に、それを最終的に決断するのは、ルナ自身だからだ」

「え？」

話が見えない。責任と苦しみを伴う方法が唯一であり、それを私が決断しなければならぬかい？

抽象的過ぎて解らない。

「皆に会って来るんだ。そうすれば見えてくる」

私は首を傾げながらも兄さんに背を向けて歩き出した。

クリスタルの平原が緑の芝生に取って代わり、至る所に木々が生い茂っている。此処は恐らく『天魂体』だろう。

特徴は……人が多い。記憶も感情も無い人々の群れ。しかし、皆微笑んで楽しそうだ。そんな人々がゆったりと歩き回り、時には座り、空を眺め、眠っている。純潔な魂、それを具現している人々。私達の魂は、如何に生きている間に様々なものに染められているのだろう。

「よう、何をボサツとしてるんだ？」

思いつ切り肩を叩かれる、痛い。だがこんな力で叩く者は一人しかいない。

「セルファス！」

「覚えていてくれて光栄だぜ」

ニツと歯を剥き出しにして笑う。彼も記憶を失わずに此処まで来たのだろう。

「馬鹿、あんな死に方をして。ジュディアとウィッシュがどれだけ悲しんだと思ってる!？」

「済まん。が、お前もだろ？」

「……ああ、そうだな」

私達が騒がしくしているのを聞きつけて、見覚えのある二人が走り寄って来た。

「ルナリート君！」

「ノレッジ、レンダー！」

私達は皆でハイタッチを交わす。全員死んでいるのに、この和気藹々とした雰囲気滑稽で笑いが込み上げた。

束の間、再開の喜びに浸っていたが、私は本題を切り出した。

「皆、守れなくて済まない。私が不甲斐無いばかりに」

「お前の所為じゃねーよ。全てが終わった訳じゃない。大事なのはこれからだろ？」

「即座の返答、セルファスは心強い頼れる男だ。」

「そうですね、これからの事は今から考えましょう」

「私も微力ながら、お助けします」

長い討議の末導き出された結論は、「全ての神と獄王、そして魂界にいる魂の『エネルギー全て』を一つに集約すれば、存在シェ・ファを倒す事が出来るのではないか」というものだった。さっきのハルメスさんとの話の相違点は、全員が転生するのでは無く、エネルギーのみを集約するという点のみだ。

だが、これも不可能だろう。全エネルギーを集約すれば、魂界の維持は不可能だ。更に、そのエネルギーを受けてシェ・ファと戦える『器』、つまり神か獄王は存在しない。神と獄王の『肉体』では、そんな強大な力を支え切れない。

この結論は、実践は難しそうだが参考にはなった。  
私は三人に札を言い、次なる目的地へ向かう。

緑の芝生が消え、今度は闇の海が現れる。不思議と、この海の上は歩く事が出来た。

此処は間違い無く『獄魂体』だろう。ファイアレスと先代獄王に会う為に私は此処に居る。

広大な暗黒の海原で、他に比べて圧倒的な漆黒に包まれている箇所がある。其処が彼等の居場所だろう。

「ファイアレス！」

私は何も見えない漆黒に向かって叫ぶ。すると、黒のカーテンが開かれるように漆黒が裂けて、中からファイアレスと先代獄王が現れた。

「遅かったじゃないか」

彼は剣を私の眉間に突き付ける。私はその切っ先を指二本で掴み、脇へ弾く。

「大層な挨拶だな。今更唾み合っても仕方無いだろう」

「僕は、ずっとここで剣を振っていた。あいつを倒せなかったのが悔しくて、少しでもあいつに近づきたくてね。ルナリート、君は少しでも努力をしたのか」

私は一瞬言葉に詰まった。私は、ついさっき此処に来たばかりで情報収集しかしていない。

「ファイアレス、落ち着くのだ。彼がさっき来たばかりなのは知っているだろう」

久々に見る獄王。私が獄界で会った時よりだいぶやつれている。それにしても改めて見ると、二人はそっくりだ。

「私は情報収集をしていました。シェ・ファを倒す為に」

「ははっ、まだ解らないの。たった一つの方法が？」

「いちいち癪に障る言い方だ。だが、それを気にしていたら話は進展しない。」

「魂界自体のエネルギー、魂界にいる魂のエネルギーを一つに集約して存在シェ・ファにぶつける事だ。それを実行する為には、現世でそのエネルギーを支える器が必要となる。だが、私にはその器に成り得る人物が思い浮かばない」

一瞬、ファイアレスの目が大きく開かれる。この仮説が彼の考えと一致しているという何よりの証明だ。だが、この仮説は実行出来ない。魂界と魂を犠牲にする上に、器も無いからだ。

「器はお前だ、ルナリート・ジ・エファロードよ」

何、どういう事だ？

今度は私が驚いて獄王の顔を覗き込む。

「僕は剣になる。器の君が振るう、最強の剣に」

二人とも何を言っている！？

私は突拍子も無いこの状況を把握する為に、頭を全速力で回転させる。



魂界と、魂の全てを器である『私』に注ぎ込み、剣となったファイアレスを持ち存在シエ・フアと戦う事が『真』である。  
転生後の私の肉体が、全てのエネルギーを支えられたとしても、魂界は失われ、生命は二度と循環しない！

「どれだけ究極の肉体を持っていたとしても、そんな膨大なエネルギーは支えられません！」  
「その心配は不要だ。器が肉体である必要は無いのだから」

意味が解らない。私は転生するのに、肉体を持たないというのか？

「答は、後で必ず君が見つけなければならぬ。ちなみに、ハルメス・ジ・エファロードは君を守る鎧となる」

「兄さんが鎧だと？何故私だけが知らないんだ!？」

私は感情的になり、ファイアレスの胸倉を掴んだ。睨み返すだろう、私はそう思っていたが予想外に彼の目は悲しみに満ちていた。

「君しか器になれないからだ。僕は剣としてしか転生出来ない。『この魂界』から姿を留めて転生するのは君が最後なんだ。僕はキュアに会う事も、生まれてくる子供を抱き上げる事も出来ない」

私はファイアレスを放した。私自身が理解する必要があるならば、理解しよう。ファイアレスの覚悟は本物だ。

「子供がいたんだな。なのに、そんな素振りは一切見せなかった」

「同情されるのは嫌だからね。今から、先代神とハルメス・ジ・エファロードの元へ向かう。異論は？」

「無い。行こう」

私達三人は、神魂体へ向かう。其処で何が始まるのかは解らないが、大切な者を守る為ならばどんな事でも受け入れよう。

「器」

五人が神魂体に集結する。全員がエファロードかエファサタン、錚々たる顔触れだ。こんな事は此処でしか実現出来ないだろう。

「ルナ、ファイアレスから聞いたと思うが、俺はお前の鎧となり転生する」

「はい、そう聞きました」

私は強く頷く。今の私は、どんな話でも聞く覚悟がある。

「ルナリート、我が息子よ。お前には今から、『星剣ファイアレス』を携え、『星鎧ハルメス』を纏い、『無の層』へ行つて貰う。無の層は、魂界の外側にある純粹な無の事を指す」

「無の層で、我等過去の獄王及び神が、存在シエ・ファの虚像を造り出す。その虚像とお前は戦うのだ。そうすれば、自ずと理解する。器の意味を、そして未来を」

行くしか無いようだ。此処で考えても答は出ない。

ファイアレスが、輝石に彩られた漆黒の剣へと変化する。細身で両刃の長剣。見た目は普通の剣だが、ファイアレスの力がそのまま剣に変換されており、一振りですべての力を持つ。

兄さんが私の身を守る鎧と化す。どんな物理攻撃も神術、魔術をも寄せ付けぬ最強の鎧だ。何より、兄さんが身を守ってくれるという事実が心強い。

「準備が出来たようだ」

「お前達が最初で最後の希望だ」

鎧を纏い剣を携えた私は、父さんと先代獄王、フェアロット・ジ・エファサタンの極術に包まれる。無の層に転送されるのだ。

転送される寸前、父の声の頭に響く。

「（ルナリート、これはファイネが此処に来た時の記録だ。初代エファロードから頂いた。お



前の励みになるだろう)」  
これは……記録、否、記憶の転送だ。フィーネの記憶の断片が、私の意識に展開される。寂しさを堪えながら、記憶を保ち続けた彼女。永遠の約束を強く、強く信じ続けた心。魂体に辿り着き、全ての神と獄王に対して、再び私と巡り会えるように懇願するフィーネの姿。

私は涙が止まらない。

そしてフィーネは転生した。例外的にシエルファイアの魂と共存する形で……

しかも、神魂体、獄魂体、天魂体、魔魂体の力添えを受けて。だから、彼女は今のようにな力を使いこなせる。

彼女は、生まれ変わってこんな話を私にした事が無い。此処での出来事を完全に覚えているというのに。

弱音を吐いている場合じゃない。彼女がいてくれるなら、私は何だって出来る。

#### 第四節 与えられた試練

深淵なる闇、一寸の光さえ無い。在るのは私達のみ。

私は深く息を吸い込んだ。通常、無の中で呼吸など出来る筈も無いが、この五感は造られたものなので、自分の思うように振舞う事が可能だ。

「(ファイアレス、戦闘は以前と同じように定められたパターンで行う)」

「(解ってる、心を読まれるからね)」

会話は全て『転送』で行う。剣と鎧に変化した二人は言葉を発する事は出来ない。

「(俺は、攻撃を受ける際に神術を全解放してお前を守る)」

「(はい、お願いします)」

無音、聴こえるのは自分の鼓動のみ。緊張が高まる。

「(来た)」

「死しても、無駄な足掻きを止めないようですね」

白い肌、白いローブ、腰まで伸びた銀の髪。潔癖なまでの美しさと、閉じられたままの瞳……

。更に、彼女の性格まで忠実に再現されている。

「(やっぱり凄いな、僕達のご先祖様は)」

「(ああ)」

「(無駄口を叩いている暇は無い、来るぞ!)」

「苦しむ暇すら貴方達には与えません」

無数の白光が私達を包む! 私はパターン通り、星剣ファイアレスに『光』を込めた。ファイアレスが『光』に『闇海』を融合させ、極術『光闇』を生成する。

「切り裂け!」

私は剣を全力で振り抜く!

「バァァ……ン!」

白光の包囲網を全て破壊した。追撃だ!

私は剣を更に強く握る。だが、

「スッ」

シエ・ファは既に目の前にいて、彼女は『純白の剣』を振り終えていた。

「私の攻撃を弾くだけで全力を使うのに、私を倒せると思いますか」

剣が折れ、鎧が砕ける。私の胸から噴水のように血が噴き出す……

「無駄な言葉を省き私が戦闘に専念すれば、貴方達が私に極術を使うのは不可能です」

私は既に死んでいるのに、何だ……このリアルな……苦しみは……  
感覚が消え、意識が消える。このままでは、勝てる筈が無い。

死んだと感じた瞬間、私はシェ・ファと戦う前の状態に戻っていた。虚像に殺されても私が消滅する訳では無い事は解ったが、あの死の苦しみは本物と変わらない。一体此処で私は何万回死を体験するのだろうか、と思うと憂鬱になったが、シェルフィアとリルフィの顔を思い出すと元気が出た。

三人共暫く黙っていた。兄さんとフィアレスも同様に、繰り返されるだろう死の衝撃を咀嚼しているようだ。

最初に言葉を送ったのはフィアレスだった。

「(全然駄目だね、とりあえず作戦会議だ。元の姿に戻ろう)」

彼の声と共に、兄さんも元の姿に戻る。

「人間界を監視していた神々に話は聞いていたが、あれ程絶望的な強さだとはな。力、スピード、術、何一つ俺達は太刀打ち出来ない」

私達は黙り込む。思えば、シェ・ファを封印出来たのも奇蹟だ。彼女が先程の様に、攻撃の手を緩めず連続攻撃を仕掛けて来ていたら封印など不可能だっただろう。

「兄さん、私が器となり魂界のエネルギーを受けられれば、彼女と同等の力を持てるのでは？」

私がそう言うと、兄さんが首を振った。その筈では無いのか？

「エネルギーを受けた瞬間、お前の肉体が崩壊する。そして、魂界も消えるだろう」

やはり、『肉体』ではエネルギーを受けられない。もっと高次の器で無ければならぬかい？

私はその時、シェ・ファの言葉を思い出していた。

「生命には二種類のエネルギーが備わっている事は御存知でしょう。一つは物体エネルギー。もう一つが精神エネルギーです」

「精神エネルギーは、物体エネルギーよりも高次のエネルギーです。精神エネルギーによる神術や魔術が、物体を攻撃するのは簡単ですが、その逆は限りなく大きな力を消耗します。只の剣が、神術そのものを掻き消す場合を考えればお解りでしょう」

「『精神体』は、精神エネルギーの結晶です。この星に存在する精神体は私のみ。無論結晶である以上、内蔵しているエネルギーは貴方達の比ではありません。人間と貴方達の精神エネルギーの差など、私からすれば瑣末なものですよ」

**「精神体、私が精神体になる」**

「その通りだ、お前は『肉体』で転生するが、シェ・ファとの戦いの直前、『精神体』へと変化する」

動悸が止まらない。私は精神体になったらどうなる？

その前に、どうやって精神体に変化する？

「肉体を、精神体に変化させる媒体が現世に一つだけある。所在も判明している。それを使うんだ」

待て、その前に……

「何故私が選ばれたんですか？精神体になるだけなら私以外でも！？」

「落ち着いて聞いてくれ、ルナ」

兄さんが私を抱き竦めた。だが、私の動悸が止む気配は無い。

「確かに精神体になるだけなら、俺でもフィアレスでも可能だ。精神体になれば、魂界のエネルギーを受ける事も不可能じゃないだろう。問題はその後だ」

その後？

シェ・ファとの戦闘時、否、倒した後か？

「何とかシェ・ファを倒せたとしよう。その時、魂界は何処にある？」

「存在しないでしょうね」

私は咄嗟に答えていた。それは明確だからだ。

「今いる魂界は消えるだろう。だがたった一人、精神体になる事により、魂界を再構築出来る者がいる。それがお前なんだ、ルナ」

「私が」

そんな事は知らない。初めて聞くし、神として継承した記憶にも存在しない。

「これを見る、ルナリート」

ファイアレスが中空に文字を描く。古代語で……

「Luna」

「この言葉の意味は、転生する迄に必ず理解するだろう」

Luna、私の名前の一部。そして、『月』を意味する。そんな事は昔から知っていた。だが引つかかる。古代語の「Luna」には別の意味が存在していたような気がする。私は読んだ書物は一言一句記憶しているが、Lunaの別の意味は思い出せない。書物には書かれていないのだから。だが、妙に懐かしい言葉だ。

もう少しで思い出せそうな気がするが、暫く時間がかかるだろう。

「ルナリート、今はシェ・ファとの戦闘で勝機を見付けよう。奴が封印から覚めるまで時間は僅かしか無い」

「あ、ああ。解った」

考え事をしていたので曖昧に頷く。確かにファイアレスの言う通りだ。一番重要なのは、誰が精神体になるかでは無い。如何にしてシェ・ファを倒すかだ。彼女が再び人間界に現れるのは、二年後では無く明日かもしれないのだ。

「次からの戦いは、ルナを擬似的に精神体に変換して行う」

兄さんの声、その声が響いた瞬間、私の中に洪水の如くエネルギーが流れ込むのを感じる！

「熱い！」

私は半狂乱になり叫び、体の中心から焼かれるような感覚の後、気を失った。

精神体

意識が揺れている。陽炎のように……

頭の頂から爪先、体の中の隅々まで熱に冒されている。

段々意識がはっきりしてきた。恐る恐る目を開く。

「（気分はどうだ）」

これは兄さんの意識の声、私は他人の意識を掬い取れるようになっていた。

「体が熱いです」

その時、ふと自分の指先を見ると『半透明』になっている事に気づいた。だが、意識を指先に送るとくっきりと指が浮かび上がる。精神体は体の密度まで変えられるらしい。

「ルナリート、覚悟！」

ファイアレスの叫び声！

私は咄嗟に身構える！ファイアレスの剣が私に向かって振り下ろされた！

「ヒュッ」

だが、剣は私を透過して空を切る。物理的な攻撃は無効、シェ・ファと同じだ。だがそれより……

「脅かすなよ！」

私は拳を握り、ファイアレスに殴りかかった。

「待て、ルナ！」

兄さんが立ち塞がり、私の拳を止める！

「うおおお」

炎に包まれ、数百m弾き飛ばされる兄さん。何て事だ！

私は走り、兄さんに近づく。体が軽い、瞬き一つ終わらない間に彼の元に辿り着いた。

「治癒！」

炎と打撲によって致命傷を負った兄さんの傷が瞬時に修復される。

「また死ぬかと思っただけ……。どうだ、シェ・ファとは戦えそうか？」

「はい」

私は即答した。あらゆる力が、肉体の時を凌駕している。更に、精神体になるとシェ・ファに意識を掬われる心配も無いだろう。精神体が意識を読み取れるのは、他人の肉体に内蔵された精神エネルギーと、共鳴する事が出来るからだ。精神体同士では意識の共鳴は不可能だ。

それから、一年間戦いの日々を過ごした。

精神体となった私が、星剣ファイアレスと星鎧ハルメスを濃縮された精神エネルギーで覆う事により、対等に戦える事が解った。

だが、存在シェ・ファも精神体である私も擬似的なものだ。シェ・ファの実際の力は、この数千、数万倍に及ぶだろう。そして、私に注がれるエネルギーも同様に桁違いの大きさだろう。訓練は終わった。後は転生し、実際の戦いに備えるだけだ。

二つ、精神体になって解った事がある。

まず精神体は孤独だ。あらゆる意識を拾い、他の生物と理解しあう事は出来ない。

エファロードや、エファサタンも他人の意識を掬う事はある。だがその状況は極めて限られており、普段は自意識のみで生きる事が出来る。

だが、精神体は精神エネルギーの結晶であり、否応無く常に他の精神エネルギーと共鳴するのだ。その事により、あらゆる生物の、悲しみ、喜び、憎しみ、慈しみなどの感情や、現在考えている事までもが濁流の如く流れ込んでくる。

大勢の生物がいる人間界で、長時間精神体になったままなら、私は発狂してしまうかもしれない。唯、シェルフィアとリルフィを想う事だけが正気を保つ「よすが」だ。

次に、一旦精神体になると肉体に戻る事は出来ない。精神体の膨大なエネルギーを肉体では支える事が出来ないからだ。肉体で支えられる程度まで精神体のエネルギーが低下した場合、その精神体は姿を留める事は出来ないだろう。

「Luna」

私は、その言葉の意味と重みを転生直前になって理解する。

## 第五節 心を受けて

私の目の前には父さんと先代獄王、隣には兄さんとファイアレスが並んでいる。そして、私達を遠くから円状に囲んでいる歴代の神と獄王。その数は46526人に上る。更にその外側では、セルファス、ノレッジ、レンダー、ティファニイさんを始めとするあらゆる人々、魔が祈るように私達を見詰めている。

此処は、魂界中央の『転生台』。名の通り、魂界を通じて来た魂の最終目的である『転生』が行われる場所だ。

「準備は出来たようだな」

信頼に満ちた目と口調。父が私達三人を一瞥して言った。

「はい、後は私が精神体になる為の媒体を教えてください」

頷く父と先代獄王。

「媒体は、『シェファ』と呼ばれる宝石だ。在り処は」

そこまで言われて私は先代獄王を制止した。それ以上は聞く必要が無いし、聞くのも恥ずかしい。

「シエルファイアが持っています」

私がそう言うと、皆が頷いた。全く……。先祖達に見守られるのは有難いが、プライベートが皆無なのは辛い。

宝石シェファは、211年前にリウオルタワーを陥落させた時に街長から貰い、11年前にシエルファイアへの婚約指輪となった。勿論、今もシエルファイアが大切に保管している。虹色の光を放つ珍しい宝石だと思っていたが、まさかそんな力を持っているとは。

「宝石シェファは、始めの者『存在』の一部だ。星の名が付いているのはその為だ」

そんな重要なものを人間が持っていたのは驚くべき事だが、もっと驚くべきなのは私の手に渡った事だ。まるで最初から決められていたかのよう。

『運命』、その言葉を信じ、翻弄され、私は戦って来た。もし今の私の状態が運命ならば、運命は多重構造だ。私の最初の運命は、従来の神と同様に、生涯を懸けて天界を支える事だった筈だ。だがその運命を変えた先には自らの死があり、今度は精神体として存在シェ・ファを倒すという運命がある。

運命は、選択の結果が交錯して生まれた必然とも言えるだろう。天界の維持を放棄した後の、存在シェ・ファの出現、大切な者を守る為に自らの命を犠牲にした事は必然だ。だが、シェ・ファを一時的に封印出来たのは僥倖であり、偶然だったのかもしれない。

一つだけ言える。

**運命でも必然でも偶然でも構わない。自分が一番大切なものを守れるならば。**

兄さんは煙草を吸っている。ティファニイさんから貰った煙草。紫煙がゆつくりと立ち上っていく。ティファニイさんは、遠くから兄さんに笑いかけ、兄さんもそれに応えて口元を緩ませる。

ファイアレスは目を閉じている。現世での妻、そしてもう生まれているだろう子に思いを馳せているのだろう。

「息子よ、お前が現世で宝石シェファを手を取った瞬間から、魂界と全ての魂は純粋なエネルギーに変換されてお前に注がれる。肉体の臨界を突破した時点でお前は精神体になるだろう。宝石を手に取り、完全なる精神体になるまで数秒。存在シェ・ファの封印が解けた事を感じ取ったら、直ぐに宝石を握り締めるのだ」

「解りました。私からも質問があります」

「何だ」

「私は何分間、精神体でいる事が出来ますか」

私の言葉で皆に動揺が走る。何故隠すのか、私に余計なプレッシャーを与えない為だろうか。「気付いているとはな。確かに精神体は、状態を維持するだけで凄まじいエネルギーを消費する。何もせずとも、一日で全エネルギーが枯渇するだろう」

「思ったより短い。」

「全力でシェ・ファと戦えるのは30分だ」

先代獄王の迷い無い声。静まり返る場、私はこの言葉が正しい事を確信した。

30分で倒さなければならぬ。躊躇無く、最初から全開で戦うしか無いだろう。予想外の短時間だが、30分も存在シェ・ファと対等に戦える時間を作って貰えるだけで十分有難い。

「ルナリート、ハルメス、我が息子達。そして、獄王ファイアレス」

「我々の未来に福音を」

兄さんが鎧となり、ファイアレスが剣と化す。私は二人を身に着けた。

「必ずや、成し遂げて見せましょう！」

私は星剣ファイアレスを抜き、天高く突き上げた。



光と闇が斑に走った膜に私達は包まれる。私は、二人の分まで皆に手を振った。もう、この魂界を見る事も皆に会う事も無い。精神体となった私のエネルギーと化した時点で、この魂界も皆も消えるのだ。

そして、新たな生命が生まれる事も無くなる。死した生命の魂は星を彷徨い、安住の地へ行く事も無い。

やがて、星の生命は全て朽ち果てるだろう。

そう、私がシエ・ファを倒さない限りは。

私ははつきりと理解した。「Luna」の意味、私が生まれた意味を。Lunaのもう一つの意味、「約束の場所」。

例え、最愛の人の魂に触れる事が出来なくとも、私は守ってみせる。

*I'm Luna.*

*The meanings of Luna are "the moon" and "the promised place".*

*I'll lose my body, and I'll create a new world named Luna.*

*So, I'll protect you in the heart of eternity.*

*Don't cry for me, and don't worry.*

*I'll be there forever.*

*Anytime, you can meet me in your heart.*

*No need to feel loneliness, because we live in the heart of eternity.*

§§ 第三章 心を受けて §§

— 完 —

第一節 母子の絆

ルナさん。今でもこの名前を口に出すだけで、ううん心で呟くだけで涙が零れそうになりません。

早く会いたい。リルフィの前で強がっていても、私は貴方がいないと生きていく実感が沸かないの。自分が死んだ時、魂界に行ってしまうからは絶望よりも希望が強かった。自分が頑張れば、またルナさんに会いに行く事が出来るから。でも、今は唯待つだけ……

ルナさんが必ず戻ってくる事は解ってる。貴方なら、記憶も失わないでしょう。

私は強いつて言ってくれた。でも、それは私の傍に貴方がいてくれたからだと思う。

ルナさんが世界を守って、魂がこの世界を離れてからもうすぐ二年が経ちます。魂界と現世では時間の流れが違う。魂界の方が早く時間が流れるみたい。だからルナさんが魂界で過ごしている期間は一年ちよつとぐらいかな。

今日こそは、ミルドの丘に戻ってきてくれる。そう信じて、私は毎日空を見上げています。でも、夜が来て眠る頃には寂しさで胸が一杯になるの。

二年、その間に沢山の事がありました。

私とリルフィ、ジュディアさんとウィツシュは最初の数日間には悲しみが強過ぎて何もする事が出来なかった。その中で最初に立ち上がったのはウィツシュ。ウィツシュはセルフアスさんの剣の残骸を持って言ったわ。

「僕……、俺は偉大な父さんの息子なんだ。俺が今すべき事は、世界中で苦しんでいる人々を支える事だ！」

彼が駆け出そうとしたその時、私とジュディアさんは何も声をかけられなかった。

でも、リルフィは違った。

「わたしも行く。わたしはルナリートの娘。弱音ばかり吐いてちやダメだもんね」

二人が視界から消えて、私はジュディアさんと顔を見合わせて頷いた。

「子供達があんなに強いのに、私達がこんなじゃ駄目ね」

「ええ、行きましょう」

その後、私達は世界の復興に尽力した。やるべき事は山積みで、まずは犠牲者の遺族の住む所と食料の手配で時間が過ぎていった。ようやく人々の寝る所と食料を満足に確保出来たのが一カ月後。次の半年は、心を病んだ人達のケアで終わった。

少し余力が出てきた所で、ミルドの丘に一軒の家を建てた。ルナさんを待つ為の、私とリルフィの仮住まい。

私とリルフィは二人とも『転送』で世界中を瞬時に移動出来る。だから、時間の空いた時はなるべくこの仮住まいに来てるの。

私とリルフィは、貴方が早く帰って来てくれる事を祈ってる。雨の日も晴れの日も、風の日も風の日も。

リルフィは私よりも強い心を持っているわ。昔からそうだった。私達の娘だけど、持つてる靱さは誰よりも強い。

この二年間で、あの子の靱さが身に染みて解った。何気ない一言だったけど、私はその日をおい出すの。

雪の音

窓。仮住まいの窓の外は真っ白だった。昨晚から降り続けた粉雪が時間をかけて積もったのだ。

今日は久々に一日休み。リルフィが朝からクッキーを作りたいと言うので手伝った。出来は

上々、彼女の料理の腕前は日に日に上がっていく。いずれは私を越えてしまうかもしれないと思うと、嬉しい反面ちよつと寂しい。リルフィは元々手のかかる子では無かったが、成長していくにつれて、ますます親の手を煩わせる事が無くなった。

まだ10歳なのだから、もう少し甘えて欲しいと思う親心は私の我儘なのかな？

完成したクッキーを持って、リルフィは出掛けた。世界中にいる友達に少しずつ配るみたいだ。何とも彼女らしい。

一人になった私は、丘の樹へ向かう。ルナさんと私が最初に出会った場所。永遠の約束の場所。そこで育った樹は、私達の過ごした年月をそのまま体現しているのだ。それを愛しく思わない筈が無い。また、樹の麓にはルナさんの肉体が眠るお墓がある。

ルナさんのお墓に口付けして、私は樹の麓に座った。私が座ったのは、お墓から見た樹の裏側。お墓からは死角になる。一人になった時、私はいつも此処へ来る。此処なら誰にも見られずに泣く事が出来るからだ。

雪の降るミルドの丘、私（フィーネ）が戻ってきたのもこんな日だった。こんな日にルナさんがいないのは余りにも寂しくて、日が落ちて夕食の準備に取り掛かるまでは此処にいたいように思っている。

此処に私がいる事は誰も知らない。そう、リルフィさえも。

その時、ルナさんのお墓の方で物音がした。私は息を潜める。だが、物音はすぐに消えた。聴こえるのは、ひらひらと舞う粉雪の音。誰かがいる気配はあるが、長い間雪の音しか聞こえて来ない。

その沈黙が唐突に破られる。良く知っている声によって。

「パパ、ううん今日からは『お父さん』って呼ばせて貰うね」

ガサガサという物音。リルフィが、今朝作ったクッキーを墓前に供えているのだろう。花瓶に花を挿す音も聞こえる。恐らく、仮住まいで育てているルナ草。

「また、お父さんと離れちゃったね。せつかく、貴方の娘として生まれる事が出来たのに」

『また？』

彼女は……やはり。

「お母さんは頑張ってるわ。私の前では涙は見せないようにしてる。だから、わたしも泣かない。直ぐにまた会えるもんね」

リルフィは私が一人で泣いているのを知ってる。彼女は昔から人を理解して、何も言わず優しく見守る子だった。思わず目頭が熱くなる。

「次に会う時はきつと……存在シェ・ファとの最後の戦いになる。お母さんも、それには薄々気付いているのよ」

そんな事は口に出した事が無いのに、何て子だ。

「だから、今度と一緒に戦おうね。わたしもお母さんも、お父さん一人が苦しむのを許さないから」

私は目を閉じ、黙って頷いた。祈るように掌を組みながら。

「わたし達はずいといつと一緒、生きてても、死んでも、近づくも、遠く離れるも」

冷たく澄んだ空気を伝って聴こえてくるリルフィの言葉。何もかもを受け入れ、疑い無く永遠を信じている。

私は一人になるとどうしても弱気になってしまうのに、彼女は一人でも……

貴方は昔からそうだった。

溢れ出る涙が止まらない。私は彼女が去った後も、長い間動く事が出来なかった。

## 第二節 再臨

この日、世界中で大雪が降った。雪と共に激しい雷光が走り、人々は恐れ跪く。何か大きな事が始まるうとしている、誰もがそれを予感した。始まるのは終焉への序曲か、それとも救世主の降誕か。あらゆる生物が祈りを捧げる。安息の未来を願って。

皆、本能で理解している。終末の日が近い事を。そして、終末を止められる一縷の希望が現れる事を。

ミルドの丘、世界の祈りはこの一点に集まる。

夜が更けていく。丘の樹の麓では、二人の女が空を一心に見上げている。シエルファイア・ジ・エファロードと娘のリルファイである。其処から50m程離れた所には、小さな子供を抱いたキュア・ジ・エファサタンもいる。時折子供の頭を撫でてはいるが、彼女もまた無心に雪空を注視している。

彼女達は、直感で今日が『再臨』の日だと知っているのだ。

三人共、昨晩から胸騒ぎを覚えていた。失った大切な人が帰って来る予感。その予感を、この大雪と雷が確信に変えた。

「もうすぐよ、リルファイ」

シエルファイアがリルファイの手をギュツと握る。リルファイは強く頷く。

私には解る。一度転生した私には。この懐かしいエネルギー、空気、全て私がシエルファイアになった時と同じだ。ルナさんが帰って来て最初にかける言葉はもう決めている。

シエルファイアは微笑んだ。間も無く、その瞬間が訪れる事を知っているからだ。

突如、雪と雷が止んだ。世界が無音に包まれる。その刹那、

「ピカッ！」

真っ白な光柱がミルドの丘を包む。その光は、真夜中の空を破り天高く立ち上っている。

その光は世界を照らし、まるで真昼のようだ。

ルナリート・ジ・エファロードの墓が宙に舞い、光の最も濃い部分へ吸い込まれる。その後、世界へ拡散した光も其処へ集約を始めた。

世界が震え始める。たった一つの希望を生み出す為に。

濃縮された光、それが消えていくと共に一人の男が姿を現す。白亜の鎧と漆黒の剣を携えて。銀の髪が風に靡き、紅の瞳が未来を見詰め、光の翼が空を切る。

ルナリート、最後の希望だ。

彼は自分自身の存在意義を理解し、帰って来たのだ。

「ただいま」

地上に降り立ったルナリートが、慈愛に満ちた笑みを浮かべてそう言った。

歓喜の涙を流して彼に飛びつくシエルファイアとリルファイ。

「おはようルナさん、お帰りなさい！」

私の記憶が完全に戻った時、ルナさんが掛けてくれた言葉。それをずっと、ルナさんにも言いたかったの。

シエルファイアは幸せを目一杯顔に表し、ルナリートの首に抱き付く。

「お父さんお帰りっ！」

リルファイは、此処で初めてルナリートを『お父さん』と呼んだ。一筋の涙を流すルナリートの胸に、彼女は顔を埋める。

ルナリートは二人を抱き締めながら、冷たくなった頬を温かくなるまで擦った。愛する人の体温を感じられる幸せを、強く噛み締めながら。

本当はずっとそうしていたいのを我慢して、彼は二人を放す。ルナリートの真剣な表情、それを見た二人は直ぐに話を聞く態勢に入った。

「転生したのは私だけじゃない。この鎧はハルメス兄さんの魂そのものだ。そして」  
束の間の逡巡、だが決意して彼は口を開く。目の前に居る、キュアに向かって。

「この剣がフィアレスだ」

彼女の目が大きく見開かれ、涙が瞳に溜まる。だが彼女は歯を食い縛って泣くのを堪えた。  
「ルナリート・ジ・エファロード、お心遣い有難うございます。貴方が戦う為に帰ってきたのも、フィアレスが貴方の剣になったのも解ります。ですが、どうか一晩だけでもこの剣と一緒に居させて頂けないでしょうか」

ルナリートは大きく頷く。彼は、妻にも子にも自由に触れる事が出来る。だが、フィアレスは触れるだけで傷付けてしまうのだ。それでもキュアは涙すら流さず、ルナリート達に嫉妬する事も無く、唯一一緒にいさせて欲しいと願っている。そんな切なる願いをルナリートが断れる筈も無い。

「言葉は話せないが、意識の『転送』で会話する事は出来る。キュア、君も私の城に来れば良い。そうすれば、戦いの日まではフィアレスと共にいられる」

彼は妻と娘に目をやった。二人共、目に涙を浮かべて何度も頷いている。

「ありがとうございます！」

キュアは涙を堪えるのを止めて、大泣きしながら剣を受け取った。

「(済まない)」

ルナリートにだけ響く、フィアレスの声。

「(私に出来るのはこれぐらいだから)」

彼もまた、微笑みを浮かべてフィアレスに『転送』で言葉を送り返した。

この日、世界中で喜びの歌が歌われ、生きとし生けるもの全てが生を謳歌した。この生が、もうすぐ終焉を迎えるものではなく、未来永劫連続と続いていく事を信じながら。

ルナリート達も、城で夜が更けるまで話し込んだ。暖炉を囲み、幸せな昔話に花が咲いたからだ。勿論、こんな夜に厳しい現実の話が相応しくないのは、自明の理である。

シエルフィアとリルフィはこの日、ルナリートに甘えたくて仕方が無かったが、三人共ベッドに入った瞬間眠ってしまう。幸せと安堵と少しばかりの疲労、それらが重なった為だ。

もしルナリート達が勝利を取めれば、この日は『再臨祭』として永遠に祝われる事となるだろう。絶望の中にも必ず希望がある事を、人々は決して忘れない。

何者も、『想い』を砕く事は出来ないのだ。時も死も、絶望さえも。

### 第三節 小さな翼

「お父さん、お母さんおはよう！」

朝の冷気を吹き飛ばすかのように、元気な声がリビングに響く。

「おはよう！」

私とシエルフィアの声が重なり、三人共、同じようにニッコリと微笑んだ。

リルフィ、この二年で随分と成長したものだ。背が10cm程伸び、顔付きがますますシエルフィアに似てきた。また、声も随分と落ち着いている。何より、私の事を『パパ』では無く『お父さん』と呼ぶようになった。

寂しいやら、嬉しいやらで複雑な親心。二年は短いように思えるが、子供にとっては長い長



い時間で、心と身体が変化するには十分な期間なのだろう。

私とリルファイは、シエルファイが居るキッチンから朝食をリビングに運ぶ。運び終えると、シエルファイが料理に向かって手を広げて嬉しそうに言う。

「さあ、食べて！」

「頂きます！」

二年前と変わらない平和と幸せに満たされた光景。シェ・ファとの戦いで死を迎えた時、たった二年で戻って来れるとは夢にも思わなかった。

これが贅沢なのは十分解っている。セルフアスも、ノレッジも、シェ・ファに殺された者は誰も帰って来ていない。ファイアレスは帰って来たが、子供を抱く事さえ許されていない。兄さんも、かつての自分の部屋でテイファニさんの彫像の下で、訪れる『時』を静かに待つのみだ。

笑顔を湛えて美味しそうに料理を口に運ぶ二人、それを見て微笑む私。今までに起こった悲劇が、全て嘘のように感じてしまう。

皆には申し訳無いが、もう少しこの幸せを満喫させて欲しい。私が『肉体』を現世に留めて置けるのは、後僅かだから……

この日は、ミルドの丘を登り、リウオルの湖を散策して帰って来た。

転生してから、二人は私の近くを片時も離れていない。勿論、眠る時も三人一緒だ。明日は、シエルファイと二人になれる時間を取ろう。リルファイなら寂しくても我慢してくれる。

こうして考えてみれば、子は親に甘えるのは当然だが、親も子供にしっかり甘えている。特にリルファイはしっかりしているので尚更だ。

「(どっちが親か解らないな)」

何処かで聞いたような台詞、私は苦笑した。

明日で、私が転生して一週間が経つ。

二人が寝静まった後、私は一人ベッドを抜け出した。魂界で心に決めた事を実行する為だ。

く小さな翼く

月光と星々の光で仄かに明るいテラス。其処で私は、光の翼を広げた。遙か上空まで飛び、転生したリバレスを捜す為だ。私は神経を集中させて翼を動かし始める。その時だった。

「待って！わたしも連れて行って！」

リルファイが寝巻きにコートを羽織って走ってくる。急いで私を追いかけたのだろう。

「直ぐに帰ってくるよ。一緒に来ても寒いだけだ」

私はリルファイの頭を撫でる。いつもなら、これで大人しく待っている筈。だが、

「いいの、お願い」

そう言って、彼女は私の胸に腕を回した。聞き分けの良いリルファイがお願いまでするとは……

まあ、リルファイと一緒にいても、リバレス捜しには何の支障も無い。連れて行こう。

「解った。しっかり掴まってるんだぞ」

彼女が微笑みながら頷くのを確認し、私達は天高く舞い上がった。流星に寒いので、熱の膜を神術で作って自分達を覆う。

フィグリル全土が見渡せる高度で、私は目を閉じ意識をフィグリルに向けた。全ての魂が私の心の中に映る。だが、リバレスの魂に近い者はいない。どうやら、フィグリルには居ないようだ。

「お父さん、何してるの」

私の腕に抱えられたリルファイが怪訝そうに、私の顔を見上げる。

「昔、私がとても世話になった人を捜してるんだ。この世界に転生しているらしいから」

その言葉を聞いたリルファイは微笑み、唐突に私の腕から離れた。

「危ない！」

急激なスピードで落ちていくリルファイ！

だが、私が追いつこうとした時に何故か落下が停止した。  
「わたし、飛べるのよ」  
「えっ」

確かにリルフィは宙に浮かんでいる。エファアロードが飛べるのは異常では無いが、何だか様子が変だ。リルフィの髪は赤で、瞳の色も茶色のままだ。即ち、光の翼を出しているのでは無い。翼が無くとも、重力に対して同一の力を放出すれば浮く事は可能だが、神術を使っている様子も無いのだ。

「一体どうやって？」

「さて、どうしてでしょう」

あれ、リルフィはこんな子だったのだろうか？素直で、意地悪な所は微塵も無かった筈なのに。二年という歳月が彼女をそう変えてしまったのか？

「見ててね」

リルフィはそう言うと、私の周りを飛び回った。何の苦も無く、空を飛んでいる。背中に羽、否、小さな翼が生えているように見えるのは見間違いだろうか？

「まだ解らないの？お父さん、本当鈍いね。翼が見えているのは見間違いじゃない、わたしが神術で造ったものよ」

神術で、あんなにリアルな翼が造れるものか？

「『変化』の神術でね」

変化、天翼獣だけが使う事が出来る神術。

天・翼・獣・だけが！？

そんな、まさか……

「お母さんは、わたしが生まれた時から薄々気付いていた」

嘘だ、否、そう考えれば全てがしっくりくる！

「お父さんはずっと気付かなかった。たまに、わたしが気付かせる為の素振りをしてみても」  
間違いない。

こんなに寒いのに、目頭と頬が熱い。際限無く涙が溢れて止まらない。

私はリルフィの頭を胸に抱き寄せる。こんなに大きくなって……。ありがとう、私達の子供として生まれてくれて。

「おはよう……、リバレス」

「おはよう、ルナー」

私達は周りに誰もいない事を良い事に、声を上げて泣いた。

生まれた時からよく泣いていたリバレス。いつの間にか、私にとって何よりの心の支えになっていたリバレス。喜びも悲しみも、平穏も戦いも……。いつだって私達は一緒だった。

彼女はどんな時でも私の事を一番大切にしてくれた。私の肩の上で消えてしまうまで、ずっと！

その彼女が、生まれ変わって今、私の胸の中に居る。

10年、彼女は黙っていた。唯、私が気付くのを待って。私が今日リバレスを捜すという事も、察知していたのだろう。リルフィはシェルファイアと違って（シェルファイアの魂は、元はフリーネと別だった）、魂がリバレスそのものだ。だから、私が上空から捜せば直ぐに見付かる。

リルフィは上空からじゃなく、直ぐ傍で気付いて欲しかったのだ。だから、私にお願いして付いて来た……

ようやく二人の涙が収まると、リルフィは私の顔を見上げて笑う。

「ややこしいから、わたしの事はこれまで通りリルフィって呼んでね」

「ああ、解った」

私が大きく頷くと、リルフィが私の耳に口を寄せる。

「一言、言わせて」

「何だ？」

「気付くのが遅ーい！」

耳が痛い！だが、これが10年分の怒りなら安いものだ。

「本当にごめん」

そう言いながら私はリルフィの頭を、ポンポンと撫でた。

「もう……。ルナはお父さんになっても、変わらないね」

両手を広げ、『やれやれ』という仕草を見せる。お前も全然変わってないよ。

「さあ、帰りましょ。お母さんが心配してる」

「シエルフィアも此処にいる事を知ってるのか？」

「当たり前じゃない、女の勘は鋭いのよ。ちゃんとお母さんに断りを入れてから来たんだから」

知らなかったのは私だけ。ああ、我が家の主導権は今後完全に女性陣が握る事になるだろう。

リバレスが見付かって良かった。それも最高の形で。

これで私は、二人の為に何処までも強くなれるだろう。シェ・ファにも負ける気がしない。

そして、形はどうであれ私達は永遠に一緒だ。

先を飛ぶリルフィに追い付き、肩車をする。彼女が一番好きな場所。

本当に、ありがとう。

#### 第四節 The Heart of Eternity

「随分遠い所まで来たな」

私は一人呟く。此処は、フィグリルの神殿の屋上にあるテラスだ。

現在の時刻は、午後9時。家族で夕食を済ませた後、私は「散歩してくる」と言っただけで城を出た。

粉雪が街の明かりを受けて明滅している。まるで、生命の営みを象徴しているかのようだ。生きては死に、死んでは生きる。その繰り返しは太古から現在に至るまで脈々と続いて来た。

だが現在、生命の営みは停止している。魂界が魂を現世に送り出せないからだ。現在の魂界が受け持つ最後の役目は、私のエネルギーになる事。

此処数日、全身に悪寒が走る頻度が増した。戦いが目の前に迫っている証拠だ。そろそろ、シエルフィアには本当の事を話さなければならない。私が『精神体』になる事、そして二度と……

「永遠の約束。お互いの魂が離れても、約束の場所に集い必ず再会する事。何度生まれ変わっても、永遠の心に刻まれたその約束があれば、一緒に居られる」

不意に、私の頬を涙が伝う。約束を交わしたこの場所に居るからだろうか？それとも、その約束はもう『果たせない』と気付いてしまったからだろうか？

「そう、此処で私達は永遠を誓いました」

シエルフィアの声！私は慌てて涙を拭い、笑顔を作って振り向いた。

「ルナさん、私は幸せですよ」

あの時と同じ言葉、212年前と。

「ああ、私もシエルフィアとリルフィが傍にいてくれるだけで幸せだよ」

私も同様に、昔の言葉を少し変えて返事した。

甘えた表情、私は微笑んでシェルフィアを強く抱き締める。彼女の身体は少し冷えている。私を追って歩いて来たのだろう。

それから暫く経ち、彼女の身体は温まったが何故か震えている。私が彼女の髪を優しく撫でると、彼女は潤んだ目で私を見詰めた。無言の彼女、私は目を瞑り彼女に口付ける。

深く長いキス。二人の全身が溶けて、混ざり合うような。今まで、何度彼女とキスをしてきたのだろうか？その度に思う。私はこの時の為に生きてきたのだと。

「んっ」

シェルフィアが声を漏らしたので、私はふと目を開く。すると、彼女の目尻に涙が薄っすらと浮かんでいるのが目に入った。

「どうしたんだ？」

私はハンカチを出して、彼女の涙を拭って訊いた。

「私は……貴方がいない世界では生きられない。たった二年だけど、毎日が本当に辛かった」  
俯き、震えながら話す彼女。私が出来る事は唯、彼女を胸に抱き、生きている温かみを彼女に伝える事。

「もう、嘘はつかないでね。ルナさんは、シェ・ファと戦ったらどうなるの？」

自分の表情が凍り付くのを抑えられない。全てを話す時が来たのだ。

「落ち着いて、聞いて」

私が真剣な顔で彼女を見詰めると、彼女は強く頷いた。

「まず、私はシェ・ファと戦う為に『精神体』になる。シェルフィアに渡した婚約指輪の石を媒体にして」

シェルフィアが呼吸を止めて目を大きく見開く。この言葉の意味を理解したのだ。

「戻れるのよね？」

彼女が私の服を掴んで揺さぶる。だが、私は静かに首を振った。

「一度精神体になると、肉体には戻れない」

「再会して直ぐなのに、私達はまた離れるの？次の転生まで何年かかるか解らないのに！？」  
半ば叫ぶような声。その気持ちは痛い程解る。だが、私はもっと辛い事を告げなければならぬ。

「転生も出来ない。魂界は、私を精神体にする為に消えるから」

「嫌！」

今まで聞いた事の無い、シェルフィアが私を糾弾する叫び声。彼女は顔を真っ赤にして泣いている。

「それじゃあ、私達は二度と会えないの？約束の場所で、幾ら待っても！？」

「……ごめん」

私がそう言った直後だった。

「バシッ！」

彼女の平手が私の頬を叩く。シェルフィアに叩かれたのは、初めてだ。だが仕方無い、私は酷い事を言っているのだから。落ち着いて聞くなど無理な話だ。それでも私は、彼女に話し続けなければならない。

「私はシェ・ファを倒した後、新たな魂界を創る。それは私にしか出来ないんだ」

その言葉を聞いたシェルフィアの表情が青褪めていく。

「どうして他の人じゃなくて、貴方が」

私は再び彼女を抱き寄せる。彼女の荒い息遣いを落ち着かせる為に、髪と背中をゆっくり撫でながら。

「それは解らない。でもこれだけは言える。私は、君を愛しリルフィを守る為に生まれてきたんだ。私が魂界を創る事によって、二人を未来永劫守る事が出来る」

「……貴方は魂界を創ってどうなるの？」

「私は魂界を治め、現世を見守り続ける事になる」

長く、長く彼女の嗚咽が私の胸に響く。  
目を閉じると、雪の降る静かな夜の中、世界にはたった二人しかないような錯覚が私達を包んでいる。

「ルナさんは、ずっと新しい魂界にいるのね」

嗚咽に混じる囁きのような声。私は頷いた。

それから私達は抱き合つたまま、無言の状態が続いた。シエルフィアは何を思っているのだろうか？私が思索を巡らせていると、彼女はゆっくりといつもの微笑みを取り戻して口を開いた。

「さつきは叩いてごめんね」

「いいよ、私が悪いんだから」

私がそう言うと、シエルフィアは私の胸に強く顔を押し付けた。

「ルナさん、大好き。誰よりも、何よりも」

「私もシエルフィアが大好きだよ」

その言葉を聞いて満足したのか、彼女は私の胸を離れテラスをゆっくりと歩き出した。掌を上に向け、雪を集めている。

「新しい約束を作ればいいわ」

「えっ」

「私達が現世で逢えるのはこれで最後になるけど、私とリルフィが死んだ時には魂界で逢える。形は変わっても、心は決して離れない。そうでしょ？」

何て強いんだ。さつきまで私の言葉に絶望していたのに、もう新しい希望を創ろうとしている。その健気さと、心強さで今度は私の涙が溢れ出した。

「……ああ、そうだな」

私の言葉に、シエルフィアは笑顔で頷く。

「永遠の心は変わらない。現世で逢えないのは寂しいけど、魂界でちゃんと私とリルフィを見付けてね。出来れば、魂界にいる間だけでも家族でいたい。そんな風に魂界を創れる？」

考えてもみなかった。確かに魂界の魂体では、擬似的ではあれ肉体的な感覚があった。ならば、魂界で家族でいる事は可能だろう。否、不可能でも可能にしてみせる。

「必ずそういう風に創るよ」

「良かった、約束よ」

シエルフィアがそう言つて私の手を握る。フィーネの時から変わらない、お願いの仕草。私もその手を握り返して頷いた。

「例え命を失つても、星が無くなつたとしても心はずっと一緒に在り続けようね。現世で触れ合えなくても、言葉を交わせなくても貴方の存在は私の中で永遠だから」

「シエル……：フィア」

本当に、彼女を愛せて良かった！

私は彼女を抱き締め、彼女の肩の上に顔を埋めて赤子のように泣いた。

「ルナさんは本当に良く頑張ってる。あんまり甘えてくれないけど、私にはもつと甘えていいよ」

感情が涙と共に瀑布のように流れ落ちる。

本当は怖いんだ。シエ・ファと戦う事も、新しく魂界を創つて独りになる事も。私にしか出来ないし解つていても、心の澱を掻き混ぜれば恐怖で一杯になる！

何かに縋りたかった。私の心は脆く、完全じゃないから。

でも、シエルフィアが私の心を強くしてくれる。シエルフィアだけじゃない、リルフィもだ。

シエ・ファに負ければ全てが消える。最愛の人も、あらゆる生命も。だが、私が勝てば最愛の人は生き、生命は循環し続ける。そして、私達は魂界で再会する事が出来るんだ。それ以上、何を望む？



「シエルフィア、ありがとう。愛してるよ、永遠に」  
「私もルナさんを愛してる、永遠に」

私は彼女を抱き締めて持ち上げた。大丈夫だ、私達の想いはどんなものにも決して負けない。  
「ルナさん、今日は」  
顔を赤らめるシエルフィア。言いたい事は解ってる。  
「二人だけで眠ろう」

手を繋ぎ、帰路をしっかりと踏みしめて歩く。  
帰る場所が変わっても、私達は必ず家族で集まるのだ。

Even if the eternal promise changes, The Heart of Eternity doesn't change.  
If there is time which can meet you for a moment of the 100 years also, I'll think that I'm fortunate.

Believing The Heart of Eternity which you gave, I'm waiting forever at Luna.

I love you from the bottom of my heart.  
I appreciate loving you.

But I did not know your real intention at this time.....

## 第五節 終幕の焰

私の胸の上で、シエルフィアが寝息を立てている。穏やかな寝顔。私は彼女の髪をゆつくりと指に絡めた。

時刻は午前二時、誰もが眠っている時間だ。私も先程まで眠っていたが、突然意識が明瞭になり目覚めたのだ。転生してから、私は常に体内のセンサーを研ぎ澄ましている。それは眠る時も例外では無い。

今、センサーは強く私に訴えかけている。「間も無くである」と。  
私は彼女の頭をゆつくりと枕に乗せた。そして、唇にそっとキスをする。恐らく、これが二人で居る時の最後のキスになるだろう。

唇を離す、すると眠っていた筈のシエルフィアが私の首に手を回した。  
「もう少しだけ」

彼女も解っているのだ。私がかもう直ぐ肉体を失い、触れる事すら出来なくなる事を。

私達は目を瞑り、今まで過ごした二人の時間を思い起こしながら互いの感触を確かめ合った。自然と涙が伝う。だが、次に目を開ける時には笑顔で居たい。二人共同じ事を考えていたと思う。

リルフィがドアをノックした時には、私達は微笑んで抱き合っていた。

「お父さん、お母さん！」

駆け寄るリルフィを私は抱っこした。そのリルフィをシエルフィアが抱き締める。

三人が肉体で触れ合えるのはこれが最後だ。だが恐れる事は無い。私はこれから先も、新しく創る世界で二人をずっと待っているから。

私は、もう一度だけシエルフィアにキスをして、リルフィを肩に乗せた。

**狂おしい程愛しいこの温かみ、永遠に忘れはしない。精神体になっても、新しい魂界でたった独りでも。**

私は目を一瞬ギュッと瞑り、大きく見開いた。大好きな大好きな二人の顔がしっかりと目に焼き付く。これで何も怖くない。私は駆け出した。

「(兄さん、行きましよう)」  
「(ああ、悲劇はもう終わりにするぜ)」

兄さんの力強い笑顔が脳裏に浮かぶ。私は強く頷きながら、星鎧ハルメスを纏った。そして、キュアの部屋へ急ぐ。

彼女の部屋のドアを叩くと、彼女は力強く頷きながら私に星剣フィアレスを差し出した。彼女の目は流した涙で腫れていたが、今の表情は澄み渡り一点の曇りも無い。抱えた子供も、無心に剣を見詰めている。

「(良い妻と『息子』を持ったな)」

「(僕は幸せだ。二人の為に戦える事を誇りに思うよ)」

私は剣の柄を握り締めて微笑んだ。

私達は全員、屋上のテラスに集まった。

シエルフィアが、婚約指輪を小箱から取り出し私に渡す。私は指輪を掲げ、精神エネルギーを石に集約させ始めた。

開戦の合図だ。

く罅く

存在シエ・ファは、自分を閉じ込めている『封滅』を一撃で破壊する為のエネルギーを練っていた。ルナリートとフィアレスが命を捨てて放った封滅は思ったよりも強力で、中途半端な攻撃では破壊する事は出来ない。

現世で2年、封滅空間の中で体感時間で2000年の時が流れた。その間彼女はエネルギーを練る他に、現世の様子を探る事が可能だった。ルナリート達が転生した事も、精神体として自分と戦おうとしている事も知っている。

「生命の救いは私と同化する事なのに、まだ私を討とうとする。愚かな存在、なのに何処までも力強い」

ふと自分の表情が緩んだ気がした。私は感情を持たない筈なのに、今の表情は微笑みを浮かべた人間のようなだ。

だが彼女は直ぐに表情を引き締め、いつもの無感情を取り戻した。この時感じた緩みの正体は、彼女自身が後になって知る事となる。

「これで、この空間に罅を入れる事が出来る。罅が出来れば、其処から抜け出すだけ」

彼女は抑揚の無い声で言葉を発しながら、蓄積されたエネルギーを右掌に集約させた。

「カッ！」

超高密度に圧縮された白光の槍が、空間の一点に突き刺さる。暫くの無音、その後空間全体が轟音と振動に包まれた。

「ピシッ！」

槍が刺さった箇所から、蜘蛛の巣状に罅が入る。彼女はゆっくりと罅に近付いた。

一方、現世でもシエ・ファが白光を放った直後から異変が起こり始めた。

まず、轟音と共に海が真っ二つに割れた。それから束の間の静寂。次に、割れた海の底から溶岩が天高く舞い上がった。

噴き上げられた溶岩は空を超え、世界を真紅に染め上げる。

際限無く噴き上がる溶岩が、やがて空に一本の亀裂を走らせた。その罅からも、血のように赤い液体が流れ落ちる。あらゆるものが、溶岩とその液体で赤く見える。空、海、大地、森、湖、街、人々、真っ白な雪原さえも。

溶岩は大地の怒り。赤い液体は空の涙。何も知らない者がこの光景を見たならば、恐れ戦き一つの言葉しか発する事が出来ないだろう。

「世界の終わりだ」と。

一閃、目を焦がすような眩い白光が罅から迸った。  
その直後、溶岩と液体の赤は『白』に貫かれ、砂塵となって消える。

「祈り」

「皆、今から戦いが始まる。私達の守護神、ルナリートの勝利を信じて祈って！」

ジュディアがミルドの丘の上で、眼下の群集に呼びかけた。人々もそれに呼応し、声を張り上げながら拳を高く突き出す。

「強い思いは必ず届く。私達は祈る事によって一緒に戦ってるの！」

彼女は自分の声をミルドだけで無く、人間界にいる全ての人間へ届けている。ありったけの『転送』の聖石を使って。

祈りは気休めでは無い。人々の祈りの力は、実際にルナリートの元へ転送されるのだ。

人々は目を瞑り、一心に祈りを捧げる。子供も大人も老人も一様に、腕き手を合わせながら。願いは一つ、「ルナリートが勝ち、明日を迎えられる事」だ。

やがて、世界が真紅に染まる。シェ・ファの復活が近い。

その頃、獄界でも全ての魔が宮殿を取り巻き、祈りを捧げていた。魔にはキュアが既に現況を伝えている。

魔の願いも人間達と同じだ。彼等は声も出さず、微動だにせずひたすら心の中で祈り続ける。その祈りを妨げるかのように、獄界を仄赤く照らす溶岩が、突如激しく蠢き出した。だが彼等は動じない。主君の勝利を固く信じているからだ。獄界全体が鳴動し、足場に亀裂が入ってもそれは変わらない。

「彼等の祈りもまた、星剣ファイアレスの力となる。」

一段と大きな揺れが獄界を襲った。最後の戦いが始まるのだ。

魂界は今まさに消えようとしていた。

全ての魂、そして界そのものが次々と純粹なエネルギーに変換されてゆく。記憶、思い出、心……。それらは全てルナリートに委ねられるのだ。

先代の神と獄王は息子を思い、ティファニーはハルメスに届かぬ愛の言葉を囁き、セルファスはジュディアとウィツシュを心に浮かべて涙を流し、ノレッジとレンダーは手を繋ぎながら消えた。

唯、Lunaを信じて。

「永劫火」

「うあああ」

指輪を持つ右手が炎に包まれる！否、そう思った刹那私の体全体が燃えていた。全身の細胞が死滅する激痛が体を駆け抜けた後、無尽蔵のエネルギーが私の魂に流れ込み、宝石シェファを核として『精神体ルナリート』が再構築されてゆく……

肉体の私は死んだ。もう戻る事は二度と無い。

精神体になった瞬間から、人間界だけでなく獄界の意識までもが全て私に流れ込むようになった。全ての人間、魔、その他の生物の感情が手に取るように解る。魂界に居た時、それは想像を越えた苦痛だと思っていたが、そうでは無いようだ。私に伝わってくるのは、未来を願う切なる祈りが殆どだからだ。

シェルフニアとリルフイ、キュアは戦いの場まで付いて来る。少しでも近くで戦いのサポートをする為だ。シェ・ファに彼女達を殺させはしない。私が必ず守るから。

私は全員を、『転送』の膜で包んだ。空に入った白い罅の中心へ向かう為だ。其処にシェ・ファは居る。

景色が瞬時に移り変わる。次に瞬きする頃には、敵の眼前だ。

白。目に大量の眩い白が飛び込んでくる。空に垂直に入った真っ白な罅、罅から零れ落ちる白砂、海を塗り潰す絵の具のような白。そして、純白のローブを纏い、透き通る程色が白い存在シエ・ファ!

封滅で封じ込めた時から何も変わっていない。潔癖で近寄り難い美しさ、閉じられた瞳、無感情な顔。表情を変える事無く、彼女は口を開いた。

「生命体が、精神体になるとは。予想はしていましたが、まさか実行するとは思いませんでした。ですが、状況は以前より悪化しています。魂界が消えた今、私が貴方を倒せば生命の循環は永遠に断たれる。よって、肉体を失った全ての魂は私と同化する以外の選択肢を失ったのです」

私は星剣フィアレスを抜き、彼女の眉間に突き付ける。

「お前は私に倒される。そして、生命は巡り続けるだろう」

眉間から一筋の血が流れる。私の力を注いだ剣での攻撃は彼女にも有効だという証明だ。

「精神体ルナリート・ジ・エファロード、星剣フィアレス・ジ・エファサタン、星鎧ハルメス・ジ・エファロード。貴方達の力は私に匹敵するようですね。それならば、私も本気を出さざるを得ない」

彼女は右手を宇宙空間に向けて広げ、左手を自分の胸に当てる。

この隙にシエルフィア、リルフィ、キュアを戦いの中心から遠ざけた。彼女達は、空中で巨大な三角形を作り私達に力を注ぐ。シエルフィアは精神体の私に人間界から集めた祈りの力を転送し、リルフィは自分の力を兄さんに送り『保護』能力を高める。そして、キュアは獄界の力を一身に受けそれをフィアレスに送っているのだ。

「(ルナさん……、頑張ってる!)」

「(お父さん、ハルメスさん、フィアレスさん、わたし達がいるから何も心配しないでっ!)」

「(フィアレス様、この戦いが終われば、あの子の名前を考えてあげてね)」  
彼女達の声が『転送』で響く。安心感に満たされ、何でも出来るような気がしてきた。

「精神体で創った剣と鎧です」

ガラスのように透明な剣と鎧。脆そうに見えるが、秘められた力は現世のどんな武器をも凌駕している。

彼女が両手で剣を構えた瞬間、雷鳴が轟いた。そして、無数の白い稲妻が彼女の剣に集約される。

まさかこれ程までとは……。2年前、如何に彼女が手を抜いていたかが解る。私達を倒すのに最小限の力しか使っていなかったのだ。

無意識に一步後退る。だが、その様子を察知した二人が即座に声を上げた。

「(弱気になるなよ、ルナリート。僕が君の剣になっているんだぞ)」

「(そうだ、俺がお前をしっかりと守る。思い切り行け!)」

精神体は酸素を必要としないが、私は深呼吸して剣を強く握り空を蹴った。

「キーンッ!」

剣がぶつかり合う。もっと力とスピードを!

私がそう願うと、核の寶石から更なる力が溢れて来た。その力で剣を振るう!

「ブシュッ!」

シエ・ファが私の剣を回避出来ずに、左腕にダメージを受けた。だが傷は浅い、追撃だ!だが、

「私も出力を上げましょう」

その声と共に私の視界から彼女が消えた。気配を探る。後ろだ!

「ガキンツ！」

星鎧に衝撃が走る！気付くのが後一瞬遅ければ、首を刎ねられていた。

「貴方もまだまだ出力を上げられるようですね。しかし、出力を上げれば上げる程、精神体で居られる時間が短くなる。それでしよう？」

「そうだな。だが、どの程度まで力を出せるか、どれぐらいの時間戦えるかは私にしか解らない。精神体は誰の心でも覗けるが、お前は唯一私の心は読む事は出来ない」

「私は不敵に微笑んだ。それでも彼女の表情は変わらない。」

「その通りです。それにしても、私以外の精神体がこんな傍に居るのは、とても久し振りでず。この感覚は、貴方達の言葉を借りれば『懐かしい』と形容するのでしょうか」

「シエ・ファの他の精神体、それは即ち別の『存在』。宇宙は、『存在』から生まれた。その『存在』は言わば『存在の源泉』だ。源泉から飛び出した存在は星となる。彼女は、『この星』になった時から独りだったのだ。それを考えると憐憫の情が沸いたが、直ぐに打ち消す。私は彼女を倒さなければならぬのだ。」

「其処で一つの疑念が浮かんだ。彼女を倒せば、否、彼女を消し去ればどうなるのか？」

「私がお前を倒せば、この星はどうなる？」

「この問いの答を知っているのは彼女しか居ない。答が何であれ、私が彼女を倒すのに変わりはないからこそ、その問いを投げかけた。」

「私が完全に消滅すれば、この星も崩壊するでしょう」

「予想通りだ。だが、一つだけ方法がある。出来ればそれを彼女の口から聞きたい。」

「しかし、貴方なら解っていると思います。私の『意志』のみを破壊出来れば生命は死滅せず済むでしょう」

「やはりその方法しか無い！」

彼女は本来意思を持っていない。意思は、12の魂によって造られたもの。ならば、12の魂と意思を碎けば良い。そうすれば彼女は再び眠りに就き、この星の生命に安息が訪れる。

「それを聞けば十分だ。心置きなくお前を倒せる。尤も、私がそれを実行出来ないと踏んでいるから話したのだろうが」

「ご明察です」

その言葉を聞いた直後、私は彼女から出来るだけ離れた。力を解放する為だ。今迄が40%、これから一気に80%まで引き上げる。

「うおおおお！」

星全体が鳴動を始めた。海底からは盛んにマグマが噴き上げる。そして、私自身はSUNのように光り輝いている。

「生命の足掻きは、もうそれぐらいで良いでしょう」

彼女が透明の剣に、濃縮された白光を纏わせ突進して来た！剣が私目掛けて振り上げられると同時に、私は全力で星剣を振り下ろす！

「カツ！」

剣がぶつかった瞬間、光が弾けた！

剣を中心にエネルギーの波動が拡がり、全てを飲み込んでいく。空気は真空となり、海は干上がる。大地は消滅し、後には何も残らない。上も下も横も、見渡す限りが無と化した。私とシエ・ファを除いて。シエルファイア達は？

「(シエルファイア、無事か！？)」

私は冷や汗をかきながら、全世界に向けて意識を転送する。

「(ええ！三人とも転送で100kmぐらい離れたから大丈夫)」

「(良かった。だがつと離れてくれ。此処から半径500km以内には誰も近づけてはいけない)」

「(解った！)」

「この程度の衝撃で何を驚いているのです？まさかそれが貴方の全力ですか？」



シエ・ファには傷一つ無い。そして私にも。どうやら私は、全力で剣を振るったつもりが、力を抑えていたらしい。

「そう思うか？」

私は意識を剣に集中し、更なる力を願った。すると、剣を握る力が増大するのを感じる。そうだ、精神体は力を込める箇所を自在に変えられるのだ。魂界から受けたエネルギーが余りにも強大で、全身に力を均等に割り振っても、魂界でシミュレートした時とは比べ物にならない力を発揮出来る為、その事を失念していた。

私は空を蹴り、彼女に剣を振り下ろす刹那、転送を使う！

「キキキーン！」

背後に転送した私の剣を、彼女は振り向きもせず剣で受け止めた。そして、ゆっくりと振り返る。

「速さも力も貴方は発展途上。ならば、今の内に貴方を消し去る」

彼女の長い銀の髪が逆立った。そして、認識出来る限界を超えた無数の斬撃が私を襲う！

「ブシュブシュッ！」

「ガキンッ！」

私は堪らず転送でその場を回避する。だが！

「これで終わりです」

転送先で見たのは、数万の白い荊のような白光を纏った剣を振り下ろした彼女の姿だった。

「ピカッ！」

彼女の剣が、鎧と私の体を貫通する。そして、白光が私の全身を覆い焼き尽くす……

「ドーンッ！」

海に落ちた。それでも私の落下速度は加速する一方だ。やがて岩盤にぶち当たり、溶岩が私の体を包む……

痛みは感じない。だが、今の一撃で残存しているエネルギーが急速に減少したのが解る。そして……

「（兄さん、ファイアレス！）」

溶岩の中で身を振りながら叫んだ。彼等へのダメージは、直接魂の消耗に繋がる！

「（俺は大丈夫だ……。だが、あの攻撃は何度も耐える事は出来ないだろう）」

兄さんの声が響き、鎧が修復してゆく。

「（僕も平気だ。君が究極の一撃で奴を葬るまで、僕は折れたりしない）」

良かった。私達はまだ戦える。私は自分の傷を修復させた。

溶岩の中で立ち上がり、再び剣を握り締めたその時、何処からともなく声が聞こえた。

「絶対、ルナさんなら勝てる。もっと自分の力を信じて！」

「お父さん、今から私達のありったけの力を送るから」

「ファイアレス様、獄界の皆も貴方の勝利を確信してる」

意識の転送、否、直接魂に響いてくる声だ。それだけでは無い。

「ルナ！負けるんじゃないぞ！」

「ルナリート君、僕達の事は気にせず全力でぶつかって下さい！」

セルファスとノレッジの声が内から聞こえてくる。

「ハルメス、しっかり弟を守るのよ」

ティファアニーさんの声。鎧が身震いするのを感じる。

「（行こう！）」

私達は同時にそう叫んだ。

溶岩を飛び出し、一気にシエ・ファの元へと舞い戻る。

「あの攻撃で無事とは……。予想外のエネルギーです」

彼女の表情が一瞬歪んだ。感情は無い筈なのに、まるで動揺しているようだ。

「もうお前の攻撃は受けない！」

私は残った力を全て解放した。恐らく、この状態が続くのは5分も無いだろう。

「光闇剣！」

極術『光闇』は、神術『光』と魔術『闇海』の融合。肉体の時の極術は、シェ・ファの攻撃を掻き消すのが限界だったが、精神体である今は桁違いの精神エネルギーで発動させる事が可能だ。尤も、ファイアレスは精神体では無いので、魔術で足りないエネルギーも私がカバーしている。

「受けてみる！」

彼女が避けきれないスピードで、私は剣を振り下ろす！

「キィイ」

彼女が剣で受け止めたのが見えた！その直後、視界が白と黒の斑に包まれる。精神エネルギーの結晶同士の衝突。『星の核』レベルの力の競り合い。この星自体が痛みの叫びを上げている！

大気、海、陸、山、溶岩、そして獄界……。星の全てがのた打ち回っているのだ。

「うおおお」

力を腕と剣に全て集約させ、私は剣を振り抜いた！

「ドオオオー……ン！」

光闇が霧散する。

周りには何も見えない。シェ・ファの姿も。唯、暗黒と真空と静寂だけがこの場を覆っている。

数秒が経過した。大気が真空に流れ込む。それから暫くして、粉雪が舞い始めた。

「勝ったのか？」

私は辺りを何度も見渡す。だが何の気配も無い。

現状を確認してみる。私が精神体の姿を維持出来るのは、恐らく後1分程度。星剣ファイアレスは、柄にも刀身にも無数の罅が入り、一振りで折れそう。聖鎧ハルメスは肩当てが砕け、胸当てから放射状に深い亀裂が走っている。

限界が近い。頼む、もう現れるな！

だが……闇の底から小さな白い『一点』がぼんやりと浮かび上がってきた。

鎧が砕け、ローブがボロ布のように破れ、全身が血塗れのシェ・ファ。腰までであった銀の長髪も、今では肩の下までしか無い。

「互いに、満身創痍ですね」

彼女が微笑んだ、ように見えた。一体彼女は……？

「く……。次の一撃で終わりだ」

「はい……。異論はありません」

どちらも、最後の攻撃を行う力しか残っていない。自分の攻撃力を抑えて、相手の攻撃の回避に専念し、次の一撃で倒す事も考えたが、力を抜くと回避する前に私が消滅させられる可能性が高い。

私は震える手で剣を握り直した。深く息を吸い込み、精神体の維持を除いた全ての精神エネルギーを剣に集約させる。

最後にして、究極の一撃。神術でも魔術でも無く、『私そのもの』を燃焼させるのだ！

シェ・ファも自分のエネルギーを剣へ注いでいる。彼女の剣は白く輝き、まるでS.O.N.Nの光を至近距離で見るかのようなようだ。

互いの力が頂点に達する！  
「行くぞ！」  
私の全身、剣、鎧の全てが精神エネルギーの炎で覆われる。触れるものを瞬時に焼き尽くす炎。

### 「永劫火！」

S.O.C.を超える超高温、そして精神体をも消滅させるエネルギー密度を持った劫火がシェ・フアに直撃する！その刹那、

### 「起源の白」

シェ・フアが劫火に向けて剣を振り抜いた！  
炎が白を飲み込む！だが飲み込んだ瞬間、白が炎を貫く！  
それが一瞬の内に、何度も何度も繰り返される！  
私達の剣を中心点として、惑星シェ・フアが放射状に崩壊していく……

白が眼前に迫る！私の劫火は殆ど消し去られてしまった。  
剣が折れ、鎧が砕け、私の体は半透明だ。もう……維持出来ない。  
何もかも諦めかけたその時、背後で声が聞こえた。

### 「ルナさん、私の力を使って」

シェルファイア！？一体何を？  
体の中心に、細くて柔らかいものが入っていく。まさか！？

「やめろ！」  
「ごめんね」

彼女が、寶石シェ・フアを握り締める。瞬時に彼女は肉体を失い、精神体となった。

「『私』を貴方に預ける。だから負けないで！」

シェルファイアそのものが、私の中に入った。私は涙を流しながらも、力で満たされるのを感じた。

「うあああ」

私は半狂乱になり、スクリュー状の永劫火を再度放った！  
その一撃は、白を引き裂きシェ・フアの胸へと到達する。

最後の瞬間、私が見たのは優しく穏やかな目をして微笑んでいる彼女の顔だった。開かれた瞳からは涙が零れ、その雫に私が映っている。

「強くなった『私の子供達』……。私はこれからも貴方達をゆっくりと見守っています。貴方達が選んだ『生きる』という選択、それには多大な苦難が付き纏います。しかし、誰かの為に生きる事が出来る強さ……。、それがある限り、乗り越える事が出来るでしょう。私（シェ・フア）はもう、母として貴方達に干渉する事はありません。思うように生きなさい。願わくは光溢れる未来を」

彼女は再び目を閉じた……

今の彼女が、12の魂の支配から解放された、『この星』としての彼女なのだ。  
私は無意識に嗚咽を漏らす。

シェ・フアは、永劫火と共に、大地の奥へ、奥へと沈んでいく。

私は、大いなる母の微笑みを胸に抱き、自分の体が光の粒となり消えていくのを、唯じっと

見詰めていた。

## 第六節 星は一つへ

シエ・ファは何処までも落ちて行く。海も岩盤も溶岩も、あらゆるものを消し去りながら。それと同時に、彼女の体（精神体）は精神エネルギーの粒子となり、星の核へ還元される。その最終段階、つまり彼女の体が全て星へと還る直前、一つの巨大な結界が破壊された。

それは、**獄界を獄界たらしめる結界**である。

結界が消えるという事は、獄界が元の姿に戻る事を意味する。かつて、星に『界』は存在しなかった。神と獄王によって、『天界』、『中界』、『獄界』に分断されるまでは。

星を三界に分けたのは、神と獄王の強大なエネルギーである。天界は、神が星の地上を浮かび上げさせ、結界とエネルギーの膜で覆う事によって生まれた。獄界も同様に、獄王が星の海と陸地の一部を削り取り、地中に空間を作って転送し、結界とエネルギーで覆った事が始まりである。

現在、獄界を維持するエネルギーを注ぐ者は居ない。よって、結界の崩壊は必然的に獄界の存続を不可能へと導く。

獄界は、かつての場所へと戻る。そう、天界が地上に落ち『聖域ロードガーデン』となったように。その場所は、丁度ルナリトとシエ・ファの戦いによって消滅した空間である。

獄界の溶岩は冷やされて岩石となり、闇の海は地上の海と同化する。そして……、魔も毎日光を浴びる事が出来るようになるのだ。

夜明けが迫っている。全ての者の、生きる事による幸福と苦しみを伴った『永遠』の夜明けが。

例え日没と共に死が訪れようとも、畏れる必要は無い。

『彼の地』が待っているのだから。

天使も人間も魔も、最早関係無い。平等に生を享受し、死を迎える。長い年月をかけて、種は一つになるだろう。

星（シエファ）が生命の未来を願っていてくれる限り、『生命』を否定する者は居ない。もし遠い未来、自らの破滅を望む生命が現れたとしても、希望の灯火は決して消えない。

一人一人の『永遠の心』は、未来永劫受け継がれていくのだから。

暁は生命に希望を与え、光は生命を養い、黄昏は明日への活力を生み、闇は生命を包み眠りを与える。

生命は螺旋軌道を駆け抜け、何度でも生まれ変わるだろう。

『永遠』に『終焉』は無い。懸命に生きる者は誰もが美しい。

『彼等』が生きた物語は、もうすぐ終わる。だが、物語は生命が連綿と語り続け、心の中で生き続ける。

そして、物語の終わりは新たな時代のプロローグでもある。

Lunaが目覚めようとしている。

自らの存在意味を全うする為に。

## 第七節 Luna

私は……何処に居る？  
まだ存在しているのか？

最後に見たのは……シエ・ファの最後と、自分自身の消滅の筈だが。

この意識は何だ？  
何故意識を保つ事が出来る？

私は意識を自分自身に向けてみた。

どうやら、私はまだ精神体の形状を保ったままのようだ。だが、指先も爪先も動かない。それだけでなく、全身のエネルギーが非常に薄い……。シエ・ファとの戦闘時に比べて数千〜数万倍に希釈されていると言っても過言では無い。

目は開くだろうか？

開いたとして、周りを認識出来るだろうか？

私はゆっくりと瞼を開けた。

「お父さんっ！」

リルファイ……、無事で良かった。

不安と心配に染められた顔。そして、暫しの別れを受け入れようとする哀しみの顔……

何の躊躇いも無く、彼女の瞳からは涙が溢れている。かつてのリバレスが泣き虫だったように。

私は起き上がり、彼女の頭を撫でようとした。だが、触れる事は出来ず透過してしまう……

彼女が私に抱き付こうとしても、それは同じだった。私は、弱っているとは言え精神体だ。

「リルファイ、ありがとう。でも私はもうすぐ行かなければならないんだ」

私は彼女を胸に抱き留めたい渴望を押し殺し、彼女の涙すら拭えない今の状態に歯軋りが止まらない。

だが、もう時間は残り少ない。

私は『最後の責務』の遂行について考え始めた。それと同時に、現在の状況を冷静に分析する。

どうやら、此処はミルドの丘のようだ。リルファイが、祈りの力と自分自身の力を私に注ぎ込んでいる。私の形状を維持させる為に。

今此処に居るのは、私とリルファイ。そして、少し離れた所にキュアが居る。キュアは、折れた剣（フィアレス）を抱き締めて嗚咽の声を漏らしている。この世界で話せるのは、これで最後になる事を彼女は知っているのだ。

兄さんは私と同化し、ティファニーさんの『心』と共に、『時』を待っている。

更に、私達を遠巻きに囲むようにしてジュディアとウィツシュ、数え切れない程の人間達が見える。

何より驚きなのは、この人間界に獄界が同化している事だ。否、元の星の姿に戻ったと言うのが正しいだろう。

「……お母さんは？」

リルファイの声に、私の思考は中断された。シエル……フィア。彼女は……

「リルファイ、ごめんね」

シエルフィアの苦渋に満ちた声が響く。精神体の私から分裂するように、薄っすらと彼女が浮かび上がったのだ。



「お母さん、どうして!？」

リルファイがシエルファイアに駆け寄る。が、彼女の手はもうシエルファイアに届かない。

「リルファイ、私達の大切な子供。そして……私達の為に犠牲になつてくれたリバレスさんの生まれ変わり。貴方は、とっても良い子に育ってくれた。素直で優しく、強い心を持った自慢の娘よ」

シエルファイアの半透明の体が、リルファイを優しく包み込む。

「本当にごめんね。でも貴方は解つてると思う。ルナさんが、新しい魂界を創らなければならぬ事。そして……、私がルナさんと『共に行く』事を」

シエルファイアは最初から、新しい魂界へ私と行くつもりだった!？」

だから、シェ・ファとの戦闘中に自ら肉体を捨て精神体となつたのか。私は……二人をこの世界に残し、一人で行くつもりだったのに! 一体どういふつもりだ?

「解つてるけど嫌なの! 大好きな二人と一緒に暮らせる幸せを知った今、一人だけでこの世界で生きるなんて! わたしだけが、二人の居ないこの世界に何度も何度も転生し続けるのよ。家族で再会出来るのは、お父さん(ルナ)が創る魂界で過ごす僅かな時間だけじゃないの!？」

リルファイが悲痛な声を上げる。私は黙って、伏し目がちに彼女の声に耳を傾ける事しか出来ない。

「ルナさんも一人よ。新しい世界で一人ぼっち。魂界が安定するまで、誰とも会う事は無かつた一人で過ごさなければならぬ。隣には誰も居ないわ。終わりの見えない孤独と重圧……。ルナさんが私に生きていて欲しいと望んでいたのは解つてる。生きる事が、どれだけの喜びと悲しみに溢れているかも知ってる。でもね、私は生きる事よりもルナさんの傍にいてあげたいと思つた。ルナさんは、何でも一人で背負い込もうとするから。私はルナさんが唯一甘えられる場所になりたいの。リルファイ、貴方には生きていて欲しい。それが、親としての私達のエゴだとしても。何より、貴方の優しさと強さは、この世界に必要とされているわ」

粉雪がキラキラ光りながら舞い落ちる。夜明け前の光と、沈みゆく満月の月光を浴びて……シエルファイアとリルファイの大きな瞳からは、涙が止め処なく零れ落ちている。私も、目の前が霞む。だが、私は涙を拭いた。リルファイに伝えるべき言葉があるからだ。

「リルファイが望むなら、転生しなくても構わない。ずっと魂界に居ていい。でも、これだけは言わせて欲しいんだ。リルファイは、リバレスの頃から私達の幸せの為に生きてきた。自分の幸せを追求する事も無く……。生きる事は不幸な事ばかりじゃない。生きていたから、私はフィーネに、シエルファイアに会う事が出来た。だから、リルファイがリルファイで居る内は一生懸命生きて欲しい。その温かな心を自分自身に向けてあげて欲しいと思う」

リルファイは俯き、口を一文字に結ぶ。涙を堪える。そして、力強く手の甲で涙を拭って顔を上げた。

「解つた。弱気になるのは、わたしらしくないもんね。お父さんとお母さんがくれた命、大切にする。一生懸命生きるだけ生きたら、魂界でわたしを呼んでね。二人から貰った記憶も心も絶対に忘れない」

私はリルファイを包んだ。家族三人、触れ合う事は出来なくとも、その想いは何も変わらないのだ。

「リルファイありがとう、約束する。私も永遠に忘れない。大好きだよ」

私は彼女の瞳を見詰めた。彼女もまた、私を見詰め返す。私達の間でもう言葉は要らない。二人同時に頷いた後、私はシエルフィアに視線を合わせた。

「シエルフィア、君の向こう見ずな所を久々に思い出した。そして、君の私を想う一途な想いと優しさは、何を言っても変えられない事を私は誰より理解してる。新しい世界創りは大変だと思うけど、君が居れば何とかなれると思う。ずっと……支えて欲しい。誰よりも愛してる」

私の言葉を聞き、彼女は穏やかでいて力強い微笑みを浮かべる。

「うん、何があってもルナさんを助けていく。だから心配しないで。私も貴方を愛してるわ」  
彼女はそう言うと、粉雪のように姿を変え私の中に消えた。

朝陽が昇り始める。時間だ……

「(ルナリート、行こうか)」

「(ああ)」

フィアレスが剣の形を止め、エネルギーの粒子となり私と同化する。その様子を、子供を抱き締めながら見守るキユア。

「(名前は決めてやったのか?)」

「(勿論だ。君が上手く魂界を創って、話をする余裕が出来たら教えてあげるよ)」

「(了解)」

私は微笑んだ。全ての生命の為に、リルフィの為に必ず成し遂げてやる。シエルフィアも傍に居る、一人じゃない。

巨大な光の翼、私はそれを出現させた。果てしない長旅になるからだ。

『柔らかな光』を浴びながら『今を生きる』者と全ての魂の『心を受けて』私は『Luna』へ。

飛び立つ前に、私はこの星の皆へ最後のメッセージを送る。

「私は、Luna(月)に新たななる魂の世界を創る。死せる者には安らぎを与え、愛し合う者の間には新たななる生命の息吹を吹き込む為に。生きるには苦難が付き纏うだろう。だが、生きるからこそ輝きに満ちた喜びを享受する事が出来る。懸命に生を駆け抜けよ。愛する者と共に」

私は地面を蹴った。その時、リルフィの声が響いた。元気に満ち溢れた声が。

「お父さん、お母さん行ってらっしゃい！」

眼下に見える彼女に手を振り、私とシエルフィアが同時に声を発する。

「行ってきます！」

どんどん地面が遠くなる。

だが、全ての生命の祈りの声は途切れる事無く響する。人間、元天使、魔、動物、植物……。希望に溢れた、感謝の祈り。

雲を超え大気が無くなっても、まだ生命の声は止まらない。

月がどんどん大きくなる。周りは果てしない宇宙空間。それはまるで、無限の黒い海に無数の光の粒を鑲めたかのようなようだ。その粒の一つが、惑星シエ・ファであり、月であり、S.O.N.なのだ。何と言う広大さ、私は眩暈を覚えた。そして、何の気無しに後ろを振り返る。すると……

「これが私達の星……。鮮麗でいて完璧な造形美だ。海の蒼と陸の翠の調和、輝く雪の白と

SUNに照らされていない部分の闇。この壮麗さは、周りのどの星とも一線を画している」  
私は驚嘆の吐息を漏らした。同時に、この星で生きた事への誇りで胸が一杯になった。

間も無くLunaに送り着く。

生命の絶滅的危機は去った。途方も無い犠牲を払って……

私のエネルギーとなった魂、それが再び完全な姿に戻るには想像を絶する時間がかかるだろう。  
私 (Luna) の中には、無数の記憶と心が散在している。それを整理し、再びエネルギーを注がなければならぬからだ。

たった一つの生命は脆くとも、心を持ち愛する者と結束すれば何処までも強くなれる。  
数千年、数万年、数億年の時が流れて、私の存在を忘れてしまったとしても、その事だけは忘れないで欲しい。

シエ・ノマ (惑星シエノマ) は母として、私 (月) は父として皆を見守り続ける。

Luna の中心にあるのは、『永遠の心』。あらゆる永遠の心は何度でも、『Luna』を訪れる。  
死を恐れず、生に煌きを。

私は自分の形を変え、精神エネルギーの膜となり月を覆った。  
この時から月は青白く輝き始め、Lunaと呼ばれる事となる。

幻想小説ハートオブエタニティ

第二部 Luna

著作 焰火 紅

— 完 —

夏が終わろうとしている。真夏の陽射しが和らぎ、涼しい風がミルドの丘をそっと包み込む。丘の上には、少女のあどけなさを残しながらも確実に大人へ近付いている女性が、一人手を合わせ空を見上げている。

斜陽が彼女の赤い髪を照らす。それは、まるで炎のようだ。その色は、彼女の芯の強さとぴたり符号している。

彼女は静かに、潤んだ瞳で空に浮かぶ Luna を見ていたが、やがて微笑みを湛えて口を開いた。「お父さん、お母さん、お元気ですか？あの日から星には争いも無く、皆毎日一生懸命生きています。最初は、人間と魔の間で険悪な雰囲気があったけど、ジュディアさんとキュアさんのお陰で上手く纏まってる。あの二人は凄いわ。わたしも少しはお手伝いをしてるけど」

遠い両親への報告は彼女の日課だった。いつもはベッドに入って眠る前に、心の中でその日の出来事を話している。丘の上で思いを言葉にするのは、胸が一杯になった時なのだ。

「私は今年で17歳になったの。そう、あれから7年が経ったわ」

長い長い7年だった。リバレスだった時から、わたしはルナとそんなに長時間離れた事は無い。気丈に振舞っても、最初は寂しくて寂しくて寝る前は毎日泣いていた。

でも、お父さんとお母さんの記憶が整理されるにつれて、寂しさは消えていったの。本当に大事な事に気付いたから。

「わたしは寂しく無い。Luna で大好きな二人が、いつもわたしを見守っていてくれるから。夜に Luna を見上げれば、二人の存在を感じられる。目を閉じれば、二人の顔を思い出せる。耳を澄ませば、声が蘇るわ。そして、お父さんとお母さんに貰ったこの体と心は、今も強く元気に生きてる。わたし自身が、二人がいてくれた証だもんね」

それでも、不意に悲しみが心を満たす時がある。

そんな時は、涙を我慢しないようにしてる。涙が悲しみを流してくれるから。

「あれっ？」

彼女は不意の出来事に驚いた。まだ夏の終わりだというのに、キラキラと蒼白く輝く光の粒が舞い落ちてきたからだ。

溶けない粉雪、彼女の為だけに降る。

「もう……。此処に来る時は泣かないって決めてたのに卑怯よ」

二人からの贈り物。永遠の心が消えていない証……

いつでも、わたしを見てくれるのね。やっぱりわたしは……

「お父さん、お母さん、ずっと愛してるわ。そして、この星と Luna によって生まれてくる生命……。みんな大好き」

彼女は涙を拭い、しっかりと Luna を見据える。そして、満面の笑みを浮かべた。

「ありがとう」

その声は星を越え、Luna に響き渡る。Luna は蒼さを増し、声に応えた。白い粉雪が世界中に降り始める。『彼女』もまた生命を祝福しているのだ。

「この星の生命、生命を支える Luna。」

その未来が幸せに包まれていますように。